
ハヤテのごとく！～初恋物語～

隣のマニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！～初恋物語～

【Nコード】

N1685D

【作者名】

隣のマニア

【あらすじ】

桂ヒナギク知つての通り彼女は綾崎ハヤテに恋をした。初めは否定していたが、今では自分でもはつきりと自覚しているハヤテ君が好きこれはそんな彼女の初恋を描いた物語である

一章： 1話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

<http://ncode.syosetu.com/n4238d/>

一章： 1話

桂 ヒナギク

知つての通り彼女は綾崎ハヤテに恋をした。

初めは否定していたが、今では自分でもはっきりと自覚している

ハヤテ君が好き

これはそんな彼女の初恋を描いた物語である

一章

「ピピピピピピ」

小鳥のささやきが聞こえる静かな時にミスマッチングな機械的な音が鳴り響いた。

「んっっ……もう朝なの？」

ヒナギクはポツリと囁きながらのびをした。

「いよいよ今日からね……」

ヒナギクの顔はやる気と期待に満ちている。

今日は始業式の日。彼女は春休みの間、ずっとこのときを楽しみにしていたのだ。

今日は待ちに待ったクラス分けの結果の発表。

ハヤテと一緒にのクラスになる唯一のチャンスなのだ。胸が高鳴るのも当然である。

同じクラスになれば、一緒にいられる時間はいまままでと比べ物にならないほど増える。

そんな幸せをかみ締める為、もう一期勤めてくれと先生に言われた生徒会長の座も降りた。

高校生活で一番楽しいといわれる二年生を、精一杯楽しむ為だ。

「さあ、行きましょうか」

早々と朝食も済ませ、ヒナギクは今日の大舞台の会場、白皇学院へと出発する。

「行つてきます！」

いつもより少し大きな声で言った。特に意味はないが、そういう気分だった。

「ふふふ。青春ね、ヒナちゃん」

玄関でヒナママが微笑んでいたというのはだれも知らないことである……

外はこれ以上ないほど快晴だ。

だれでも気分がつかれる、そんな感じの天気だ。

「今日についてそうね」

つい、そんなことを口走ってしまうほどだ。

と、そんなとき、聞きなれた友人の自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「おっはよう、ヒナちゃん！」

「やあ、ヒナ。今日はずいぶん機嫌がいいみたいだな」

「まったく、ひそかに尾行していた我々に気付かないとはな」

元・生徒会三人組がいつもの楽しそうな感じで笑っていた。

彼女達も、仕事をしたくないというものあるのだろうが、学校を楽しむ為に生徒会の座を降りた。

まあ、ヒナギクからもう辞めなさいと言われたのは内緒である。

「あら、三人ともおはよう。っていつかなに尾行なんてしてんのよ！」

期待通りの反応に三人組は笑い出す。

ヒナギクの分かりやすすぎるこの性格は、何回いじくっても面白いものだ。

一方のヒナギクは、口では怒っているが、実際は楽しんでいる。

この三人と一緒にいると、心が楽になる気がしていた。

そんな楽しい時間を過ごしながら、桜が咲き乱れる学校への道を歩いていった。

それから少しして、学校の校門前に着いた。

入り口では、数百本はある桜が満開を向かえ、見事な桜吹雪が起きている。

今見ると、見慣れた校舎やガーデンゲートが全く違うものに見える。

ガーデンゲートで気づいたこの気持ち、今年は伝えられるだろうか？

いや、今年こそは伝えるんだ、伝えさせるんだ。

桜景色を見て決意を硬く固める。

「さあ、みんな行きましょう!」

ヒナギクの言葉で、一同はクラス発表ある会場へとむかった。

一章： 1話（後書き）

小説の感想、意見等随時募集しています。
ここはこうするといいいんじゃないかな？
とか、

これはダメだろ
という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイスを頂けたらと思います。
よろしく願いします。

2話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

<http://ncode.syosetu.com/n4238d/>

2話

「キヤー！！同じクラスよ！！！」

「おい、何で俺はあの方と同じじゃないんだ！」

四人がクラス発表の会場へ着いた時、すでに結構な人数が集まって大賑わいをしていた。

たった一枚の紙を見に、1学年全員が来るとなると、想像もしたくない壮絶な込み合いになる。が、今は早めに来たのでそれほどはない。

しかし、某ねずみの国の入場開始時間数分前程度の込み方はしている。

これは気を引き締めていかなきゃ殺やられるわね……

ヒナギクはよしと気を引き締めてその人ごみの中に入ろうとする。が、そのとき、気の抜けた、けれども恨めない青色の髪の少年の声に呼び止められた。

ヒナギクはちょうど歩き始めてようとしていた時をやられ、前のめりになり転びそうになった。

「おはようございます、ヒナギクさん。どうかしたんですか？」

人の気持ちもしらないでよくそんなこと言えるわね……

まあ、それがハヤテ君らしいんだけど。

そんなことを考えながらハヤテに挨拶をする。

こうしてハヤテと会話をしていると、美希たちと話してるときくらい、いや、それ以上に微笑んでしまう。

と、突然下のほうから聞き覚えのある不機嫌そうな声が聞こえてきた。

「おいヒナギク、私のこと忘れてないか」

「えっ、あつ、ナギ！ーおはよう」

あまりに突然だったのでつい変な声が出てしまった。

いつもは学校に来ないとはいえ、今日くらいは来るだろうにすっかり存在を忘れていた。

ナギの探求の目が自分に向かって突き刺される。

このままだとまずいわね……。別の話題を振らなきゃ……

「えっと、そういえば今日は学校来るの早いわね」

「ああ、当然だ。今日は大事なクラス発表の日だからな。この目でハヤテと同じクラスなの確かめに来たのだ」

どうやらうまく話をそらせたようだ。

しかし、このままここにいるとまた地雷を踏みかねない。

「とりあえず、クラス分け、見に行かない？」

こうしていつの間にか雑談会が始まっているところに声をかけ、皆で人ごみの中へ突入していった。

それから五分後・・・・・・・・

「はあはあ、もうダメです・・・・」

ハヤテは草むらに力なく倒れこんだ。

文字通り大の字になって倒れ、顔は汗で溢れている。

それを見守る女子二人はあからさまにご機嫌オーラをだしていた。

そう、二人ともハヤテと同じ『2・6』になったのだ。

ちなみに元・生徒会三人組も同じである。

それはさておき、二人は不思議そうな顔をしていた。

それもそのはず、人ごみに突入してみても、自分はピンピンしているのだ。

車にはねられても生きていたハヤテがこれほどまでに疲れている理由がわからなかった。

まあ、実際は最近やたらとヒナギクと仲良くして、さらに同じクラスにまでなったハヤテへの男子の総攻撃があったのだが。

いつまでも寝ているわけにも行かないので、ハヤテはいつもの営業スマイルをしてひよこつと起きだした。

「すみません。もう大丈夫ですので。」

執事服についた汚れを手で払って行きましようと言図をする。

「そうね、行きましようか、私”達”のクラスへ」

「又っ！！私のハヤテとなれなれしくするなっ！」

こうしてヒナギクはハヤテと同じクラスになった喜びをかみしめながら、三人で教室へと向かった・・・

ちなみに元・生徒会三人組はというと・・・

「いやゝ、疲れたなゝ」

もうすぐ教室へ行かないと遅刻になるのも関わらず、木陰でのんびり過ごしていたそうだ。

2話（後書き）

小説の感想、意見等随時募集しています。
ここはこうするといいいんじゃないかな？
とか、

これはダメだろ
という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイスを頂けたらと思います。
よろしく願いします。

3話(5/25加筆修正)(前書き)

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

<http://ncode.syosetu.com/n4238d/>

3話（5 / 25加筆修正）

「えーっと、ここね2年6組は」

教室前に辿り着いた。今まで足を踏み入れることの少なかった棟なので、たどり着くまでに何度か道に迷ったりした。だだっ広い校舎の助けもあって1kmは軽く歩き

回っただろう。

ヒナギクは余裕でここねとか言っているが、体力の無さで一位二位を争うどころか独占する勢いのナギはもちろんばてている。

「ハヤテ・・・、早く教室に入って一息するぞ」

さっさと席に座って休みたいナギに引っ張られてハヤテも教室に入る。後を追ってヒナギクも入る。

早めに学校に着いたのだが、迷いに迷ったせいで、すでにHRぎりぎりの時間になっていた。教室にはすでに嫌なんだけど一年間過ごすかもしれない大体の新しいクラ

スメートが揃っている。誰か落第しなかったら一年間の付き合いだ。

ハヤテは見渡してみると、ほとんどが話したことがない、初対面のばかり人だった。考えてみれば編入してからまだ半年間しかいなくて、やっとクラスメートと仲

がよくなったところで、他のクラスに知り合いなど皆無に等しい。

うまくやっていけるかな」とか考えながらハヤテはナギの座る席へ向かった。

一方ヒナギクは、四、五人くらい知っている人がいた。ただ、知っているというだけで友達とかそういうレベルではない。ヒナギクも顔は広いが積極的に友達を作

るほうではないので（相手が勝手に寄ってくるタイプ）、自分の中の良い人はあまりいないという状況だった。まあ、相手から見れば超絶美貌の完璧生徒会長を知

らないはずは無いので、すでに友達リストに入っているのだが。

そんなことを知る由はあるけど知らないヒナギクは、一通りの人を確かめながら、ひとまず黒板に張ってある座席表で自分の席を確認する。

えーっと、左から三番目の前から三番目か。なんだか度真ん中ね。

ヒナギクが一番前が良かったらしい。先生に質問がしやすいし、集中力が上がるからだそうだ。考え方が違う。

うーん。隣は誰かしら。

左は……竜宮さんか、知らない人ね。仲良くなれるかしら。

仲良くなったら部活に誘われないように注意したほうがよさそうだ。

右は……綾崎ハヤテっていう人か……

・・・

って、えっーーーーーっっ!!!

突然奇声を発しだしたヒナギクにクラス中の視線が集中する。

カア／／／・・・

ヒナギクは慌てて何でもないと周りに必死の弁明をしてから今の自分の置かれた状況を必死に整理する。

えーっと、私があそこに座って、ハヤテ君があそこに座って・・・

・・・

って隣同士じゃない!!

当たり前です、とかそういう突っ込みは許されません。今の彼女は普段の冷静さを完璧すぎるほどに失って、いわゆるパニック状態にあるのだから。

隣同士・・・ってことはこれから私はハヤテ君の隣で勉強する・・・

考えただけでうれしくなる。いままでこんなシチュエーションを夢に見たことすらなかったのに、まさか現実世界で叶おうとは。

願っても無い絶好すぎるチャンスに最高の喜びを胸の中で味わうのだった。

ただし・・・

こんな幸せにも問題はあった。

まだ知る由もないことなのだが・・・

上機嫌なヒナギクは、ややスキップ交じりの歩き方でハヤテの隣、もとい自分席に向かった。実際に自分の席であろうところの隣にハヤテがいるのを見て、見間違

いでなかったことを確認した。

こうなったら後することといえばひとつしか残っていない。

「隣の席ね。よろしく」

出来る限りハイテンションが表に出ないよう話してみた。生徒会長という肩書きがある以上、人前で取り乱すことは許されないのだ。

そんな感じで自然にハヤテに近づくと、ハヤテが座っているはずの席にナギがいることに気がついた。

しかし、良く見ると座っているのではなく机に倒れこんでいるというの方が正しかった。

すっかり忘れていたが、疲労困憊なナギをハヤテは休ませているのだった。ハヤテは鍛えられてた視力で自分の席を確認し、ナギを座らせたのだった。どこまでも

好きの無い仕事、それが執事である。

そんなこんなでご主人の体力ないわねえとかそんな感じの話をした。普通なら自分のことを悪く言われるとそこまでやらなくてもというくらい噛み付いてくるナギ

だが、本当に付かれきっているようでまるで反応が無かった。

まるでただの屍のようだ・・・

とりあえずこんな状況なので、自分が望むままにハヤテと雑談を始める。これからの授業のこととか、強化の先生は誰とか他愛も無い話だったが、ヒナギクには

これ以上ないほど幸せな時間だった。

しかし、幸せな時間というのはすぐに過ぎ去るもので、まだまだ話していないこともあるのにHR開始を告げる鐘がなった。まあ、今日しか話せないわけじゃない

から今日のところはこのくらいにしておくことにした。

ハヤテは動こうとしないナギをやさしく起こして自分の席につかせる。その動きに無駄は一切なく、すごいと思ったがそれと同時に慣れているなということも分

かった。きっといつも自分から起きようとしらない主人をこうやって起こしているのだろう。

そんなことを考えていると、隣に戻ってきたハヤテになんですか？と言われた。どうやらずっと見つめていたらしい。どうも気を抜くとミスが出るようなので気を

引き締めておく。

ちなみに、二人はまったく気づいていないが、この周りから見ればイチャイチャな2人を見て、ヒナギクファンクラブの男子からハヤテに殺人的視線が注がれ始めて

いた。一人一人のハヤテを憎む気持ちの強さも異常だったが、それを注ぐ数も多い為、教室はカオスフィールドと化していた。もはや普通に生きていられるのは気

づいていない二人だけのようだ。

と、この時ちょうど運良く新しい担任の先生が入ってきた。凍り付いていた空気はどこかへ流れていき、ハヤテをにらみつけていた男子たちの顔も元通りになって

いた。

さっきの空気から考えると、先生の到着があと数秒遅れていたら何が起こったかわからなかった。ナイス先生。それでこそ脇役です。

何も知らない先生は、毎年同じことをやっていることがバレバレなくらい慣れた手つきで名簿を広げ、まず黒板に自分の名前を書いた。

「ごほん。えーっと、私が今日からここ『2年6組』の担任をすることになった薫・京ノ介だ。よろしく」

担任の名前を聞くと、クラスにざわめきが起こった。

理由の分からないハヤテはヒナギクに聞いてみると、どうやらガンラマニアらしい噂が流れているということだった。そんなの間お嬢様が初代から全部大人

買いしていなのにかハヤテは思ったが、まあ口にしないことにした。

一方の薫先生は、生徒の話が聞こえたのか、顔を赤くしながら恥ずかしさを隠すように声を張り上げて続けて言った。普段から人前で

作っているくせに情けない。

心のオタクは堂々としているものなのだ！

「話はまだあるぞ。副担任のことだ。一応女の先生だぞ」

女の先生と言う言葉に反応して、なにやら男子の態度が変わった。急に身だしなみを整えだした。どうやら先生に何らかの期待をしているらしい。

薫の入ってきてという合図と共に、教室のドアがゆっくりと開き始める。

クラス中の視線が集まる。ハヤテとヒナギクも誰になるのだろうとワクワクしてしまう。

ガラガラガラ・・・

ドアが開いた。

そして入ってきたのは・・・

「ういゝっす！私が副担任の桂・雪路よ！」

雪路だった・・・

美人を期待していた人の中には顔を見た瞬間ずるっとこける人もいた。

クラス中から聞こえてくる不満の声に雪路はややご立腹気だ。

「ちょっと、私だって好きでやってんじゃないのよ！副担任に降格させられて給料ちょー減ったんだから！」

こんな発言、教師として許されるのだろうか・・・

まあ、許されないから薫るが担任になったわけだが。

そんなこんなでHRが始まった。

薫が出席を取るとある事実が判明した。ヒナギクの前と後ろと、その横の席が空いているのだ。

薫は座席表でその席の住人を探す。

「えっと、そこは花菱と朝風と瀬川か……………」

またあの三人か……………」

薫は生徒会の仕事を担当しているので、三人娘との面識もあり、どのような生徒かもわかっている。もちろんサボリ癖があることも。

「まったく、あいつらときたら初日からこれかよ」

しょうがないなと言いながら雪路に探してこいと言って振り向くと、そこにはすでに雪路の姿はなかった。

「まっず、こんなのがばれたらまた私の給料が引かれちゃうわ！」

そんなことを叫びながら校内を走り回った。

予想以上の気合の入りに薫は少しの間言葉を発せずにはいたが、軽く苦笑いするいつもの調子にもどってまたHRをはじめた。

とまあ、ここまで波乱続きだったが、残りのプリント配りなどは順調にすすんだ。

少しすると無事に三人娘も雪路に引つ張られながら帰ってきた。まあ、三人娘的には無事ではなかったようだが。少しなみだ目になっている姿を見れば一目瞭然だ

。

こっぴどく叱られたようだね、これは。

「はいじゃあ今日はこれで終わり。解散！」

こうして2・6初のHRは無事に終わった。

部活動のある生徒は各活動場所へ、帰宅する生徒は家へ帰っていった。

ある1人の少年を除いて……

ヒナギクは帰ろうと思ひ席を立つた。剣道部はとうとうじつは定休日だったりする。生徒会も今日は仕事なしだ。こんな日は滅多にあるものではない。こういうと

きは早く家に帰ってのんびりするのに限る。

しかし、彼女は大事なことを思い出した。今、自分はハヤテと一緒のクラスなのだ。

もしかしたら一緒に帰れるかもしれない・・・

そんな淡い期待が胸の中に生まれた。そしてそれはどんどん体中を侵食する。気づくと、一緒に帰りたいという思いでそれ以外は何も考えられないくらいになって

いた。

幸いにもナギはまだ元気を取り戻していない。

近づいても気がつかないだろう。

今が格好のチャンスだ。勇気を振り絞って隣で座っているハヤテに聞いてみる。

「あのハヤテ君・・・？」

ところがハヤテから一向に返事が返ってこない。

少し肩をゆすつてみる。

「ちょっとハヤテ君？」

そうすると案の定、ハヤテはぴくつと反応した。しかし、見てみるとハヤテの顔色が良くない。体の具合でも悪いのかと聞いてみたが、特にいつも通りだと言う。

しかし、ハヤテのことだ。どこが悪いところを隠しているかもしれない。

その思いはハヤテの顔色を見て確信に変わっていく。

一緒には帰れなくなるかもしれないが、ヒナギクは保健室に連れて行くことにした。こんなに辛そうな人を黙ってみているわけにはいかない。

「ほら、一緒に行くからついてきて」

手を引っ張って連れて行こうとすると、ハヤテはいいですよと言って教室から出ようとしなかった。

みんなに迷惑がかかるのが嫌らしい。人のことを優先して考えるハヤテらしい考えだ。でも時には自分のことも考えてあげなくてはだめだのだ。

「ほら、もう行くわよ！生徒会長として生徒の健康を守らなくてはいけないの！」

多少強引にハヤテの手を引っ張る。

今度は何の抵抗もなかった。

よし！このまま……

ヒナギクはそのまま歩き出そうとした。そうすれば後からハヤテが歩いて付いてくるだろうと思ったからだ。

しかし、一歩目を踏み出すと急に手に負担がかかってきた。後ろを振り向くと、そこにはハヤテの姿はなかった。

あれっ？っと思って辺りを見回し見ると、ハヤテは床に倒れこんでいた。

「えっ、ハヤテ君？」

呼びかけても返事が返ってこない。

肩をゆすつてみるが、一向に動き出す気配がない。

ヒナギクの顔が青ざめていく。

「ハヤテくんっ！……！！」

しばらくして、騒ぎを聞きつけた人たちによって運ばれていった……

3話(5/25加筆修正)(後書き)

小説の感想、意見等随時募集しています。
ここはこうするといいいんじゃないかな？
とか、

これはダメだろ
という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイスを頂けたらと思います。
よろしく願いします。

4 話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

<http://ncode.syosetu.com/n4238d/>

4 話

「あれ、ここはどこだ？」

ハヤテが目を覚ましたとき、自分が最後に見た景色とは明らかに異質なものが目に入ってきた。

よく辺りを見回してみると、周りは自分がいつも使っている家具に囲まれている。

「なんだ、僕の部屋か……」

ひとまず今の状況は理解できた。

しかし、なぜ自分がここにいるのかが分からない。

外はすでに夕焼け色に染まっている。

「確か、僕は学校に行ったはず……」

そこまではなんとか思い出すことが出来る。

しかし、HRが終わった後からのことがいくら考えても思い出せない。

拳句の果てにはこんなことにたどり着いた。

「そうか！お屋敷に帰りたいという強い願望が僕をここにワープさせたんだな！」

「全く、何意味の分からないこと言ってるんですか？」

突然、横の方から声が聞こえてきた。

ドアの方を見るとしようがないですねという顔をしたマリアがいた。独り言のつもりでしゃべっていたので、これは予想外な出来事だった。

このままでは自分の体裁が危うい。

マリアに変態だと思われたらもうこの屋敷では生きていけない。

「えっ！！？いや！！だからですね……」

ハヤテの弁明は長時間続いた……

「そつえば、お客様が見えてますが」

ハヤテの必死の弁明も飽きてきたころ、マリアは客が来ていることを思い出した。

ずっとそばにいてくれた人だと言うことをハヤテに伝えると、マリアはその人を呼びにいった。

ハヤテはとりあえず、寝巻きのままなので失礼のないように執事服に着替える。

ハヤテの部屋と応接間は離れているので着替えている間に来てしま
う心配はない。

「それにしても、誰だろう」

さつきからこれが気がかりだった。

とりあえず候補に挙がったのは、ナギ、三人娘、ヒナギクだった。

ナギは……

まず客ではない。違うだろう。

三人娘は……

HRの終わったあと、すぐ帰ったし、そもそもあの三人がおとなし
くそばにいてくれるなんて事はないだろう。

ヒナギクは……

忙しい人だろうから多分違うだろう。それに、これ以上迷惑をかけ
たらどうしたらよいのかわからない。

ハヤテは、ヒナギクが機嫌を悪くしている原因はそういうことの積
み重ねだと思っている。

まあ、実際は鈍感さなのだが、本人は全く気づいていない。

コンコン

丁度このとき、マリアが言っていた”その人”がやってきた。

扉がゆっくりと開き始める。

自然とハヤテの胸が高鳴る。

扉が開ききったとき、そこにいたのは”ヒナギク”だった。

4話（後書き）

小説の感想、意見等随時募集しています。
ここはこうするといいいんじゃないかな？
とか、

これはダメだろ
という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイスを頂けたらと思います。
よろしく願いします。

5 話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

<http://ncode.syosetu.com/n4238d/>

5話

「すみません、ヒナギクさん」

彼女の顔を見て瞬時に飛び出してきたのはこの言葉だった。

また迷惑をかけてしまって、怒っているとの読みだ。

ふか〜く下げていた頭を上げてみると、予想に反してヒナギクの顔に怒りはなかった。

それどころか心配そうな顔をしていた。

「マリアさんから聞いたわよ。冬休みの間、ほとんど寝てないんだって？」

何があったかというと、休みの間、ナギのゲームに夜遅く、と言うか朝まで付き合っていたのだ。

ナギは昼間に寝れるが、執事であるハヤテは寝るわけにはいかない。

そののが冬休み中、ほぼ毎日続いたのだ。

倒れて当たり前だ。

「全く、すぐにそうやって無理をするんだから。若いうちに無理し過ぎると老後に響くわよ？」

ヒナギクはハヤテを寝かせて、隣の椅子に腰をかける。

ハヤテが起きだして仕事をしようとするのを監視する為だ。（マリアに見ていないとそうなると言われた）

「そうそう、マリアさん、ちょっと買い物に行くらいから私が面倒みることになったの」

思い出したので何気なくハヤテに言った。

ところがハヤテの様子が変だ。

顔を赤くして何やらもがいている。

あれ、何か変なこと言ったかしら……

マリアさんが買い物に行った、

そういえばナギは寝ているはずだとさっきハヤテが言っていた、

ということは……

ハヤテ君と二人っきり！！！！？

今度はヒナギクの方がもがき始めた。

二人っきり！？いやいや何言ってるのよ、いやいいけど

二人ともすでに自分を見失っている。

とりあえず冷静になろう。

「えっと、ちょっと紅茶でも入れてきますね!？」

「え、ええ、ありがとうございます!？」

ひとまずこの部屋から退却することにした。

そうではなくてはお互い気が気でなくなる気がする。何が起こるかわかったものではない。

それに自分の入れた紅茶をハヤテに飲んでもらいたいという思いもある。

ヒナギクは一呼吸すると、ハヤテの部屋の少し離れたところにある台所に向かった。(マリアに場所を教えてもらった)

広いこの屋敷なので、少し道に迷いそうになったが、なんとか台所と書かれた札が掛かった入り口の前にたどり着いた。

中をのぞいてみると、業務用の調理器具やら何やらがずらりとたくさん並んでいる。

紅茶はどこなの・・・

部屋の中を見渡せど、紅茶の気配は全くしない。

そもそも台所が広すぎるのだ。10畳はある。食器棚もいたい何個あるんだか。

この中からちっばけな紅茶を探し出すのは至難の業だ。

しかし、今はそれをやり遂げるしかない。

「とりあえずあそこからね」

ヒナギクは飲みかけのコーヒーの置いてある棚の辺りから探すことにした。

棚を空けると、そこはコーヒー豆、インスタントコーヒーで一杯だった。

奥の方まで探してみたが、世界中からかき集めてきたと思われるコーヒー類しか入っていない。

仕方がないので隣の棚を探す。

「あつ、これね」

扉を開けると案外あっさりと見つかった。

これまたコーヒーと同様に、何十種類もの紅茶が入っている。

紅茶好きなヒナギクはこれらが世界中の高級品だということが一目で分かった。

これは紅茶の入れ甲斐があるわね

おいしい紅茶ほど入れるときの難しさがある。

ハヤテに自分の腕を見せるためにもここはすごいものを作らねばな

らない。

「さっ、がんばらなくっちゃ！」

ヒナギクは準備を始める。

まずは、熱々のお湯から。沸騰した瞬間のお湯約95℃が紅茶には最適です。沸騰させすぎると水の中の空気が抜けてしまうので、沸騰した瞬間のものを使いましょう。

次はティーポットにお湯を注ぎます。ティーポットを予め暖めておくのと紅茶を高温に保てるのでベターです。お湯は高めの位置から注ぎます。

次は茶葉を蒸らします。3〜5分の間で好みの味を探しましょう。10秒違うだけでも印象がかなり変わりますので正確に時間は測りましょう。

さあ、ここまで出来たら完成です。

「よし。いい感じね。早くハヤテ君のところへもって行きましょう」

一通り準備が終わるとヒナギクはハヤテの元へ向かった。

一方、ハヤテはというと・・・

「ヒナギクさんと二人っきりだなんて・・・ダメだ考えると顔が赤くなるー!!」

いまだに混乱していた・・・

5 話（後書き）

小説の感想、意見等随時募集しています。
ここはこうするといいいんじゃないかな？

とか、

これはダメだろ

という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイスを頂けたらと思います。
よろしく願いします。

6 話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

<http://ncode.syosetu.com/n4238d/>

6話

「ハヤテ君、入るわよ」

ヒナギクは入れたての紅茶を持って部屋に入る。

するとそこにはなにやら逝ってしまった顔をしたハヤテがいた。

どうしたのか聞くと、二人っきりになることを考え込んでいたらしい。

全くしょうがないわね、そんなに恥ずかしいのかしら

まだ顔を赤らめているハヤテを見ると、思わず微笑んでしまう。

その過剰なまでの純粋さも人をひきつける魅力なのだろう。

とまあ、解説してみたが、早く飲まないと紅茶が冷めてしまいますよ？

「あつ、そうだったわ。危ない危ない」

とりあえず紅茶にしよう。

ハヤテをベットに座らせ、カップを渡す。

ありがとございますと言って、ハヤテは口元へ運ぶ。

どうかしら……

自分ではおいしいと思っても、他人がどうかはわからない。所詮味はそれぞれの主観だ。

ハヤテの口の中に紅茶が注ぎ込まれる。

「とってもおいしいです、ヒナギクさん」

・・やった！！！！

ヒナギクは思わず心の中で叫んだ。

やはり好きな人に自分の作ったものをおいしいと言われるのは嬉しいことだ。

紅茶作戦は成功のようだ。

こうなれば後は楽しみのティータイムが待っている。

ヒナギクもベットの横にセッティングした椅子に腰をかける。

紅茶の効果か、前回のような混乱は起こらなかった。

「そういえば、同じクラスになったんですね」

紅茶も飲み終えたところ、暖かい午後の日差しを窓から眺めながら、世間話で盛り上がった。

ハヤテが倒れたとき、実はナギもかなり心配していたことや、学校中にこの噂が広まった（ガダムが倒れた）事など、話のネ

タはいくらでもあった。

たまにハヤテをおちよくつてみると、期待通りの反応するのでこれもまた面白かった。

こんな感じに。

「えゝ、じゃあハヤテ君は私のこと嫌いなのか？」

「いや、そういうわけではないですよ！？」

「じゃあ好きなの／＼／＼？」

「エイッ

W

「！

そんなことをしているうちに、窓の外を見ると夕焼け色に染まっていた。

作者的には泊まっていつてもらいたいが、明日も学校があることを考えると現実的ではない。

そろそろ足りなくなった”池”の幸を”釣り”に行ったマリアも帰ってくるころだ。

「さっ、そろそろ私は帰るわ」

ヒナギクは仕方なく帰る準備をする。

といってもまだ制服で、荷物もかばんしかないのだが。

家まで送りますよとハヤテが言ったのでそうすることにした。これは願ってもないことだ。青春の代名詞、自転車二人乗り（違法です）が出来るのだ。

さっそくハヤテの部屋を出る。いや、正確に言うとお出ようとしただろう。

丁度ハヤテがドアノブを触った時、地震が襲ってきた。

ハヤテはドアの近くにいたので安全だったが、ヒナギクはまだ部屋の本棚付近にいる。

ハヤテはほぼ本能的にヒナギクを守る為、自分の下にかがませる。

すると、ハヤテの予感どおり本が大量に降ってきた。

ハヤテは余裕で耐えられると思ったが、片付けていなかった広辞苑や英和辞書など重いものばかり降ってきて、姿勢を維持できなくなってきた。

だんだんと腰が下ってくる。

下を見るとそこには心配そうにこちらを見ているヒナギクがいた。

まずい、このままではっ！！！

ハヤテは必死に耐えるが、筋力の限界が見えてきた。

仕様がな、こうなつたらっ！！

ハヤテはヒナギクを抱くと、物が落ちていないところへと瞬時に飛んだ。いや滑り込んだといったほうがただしいたろう。

ふう、何とか助かったかな……

瞑っていた目を開けると、なんと目の前にヒナギクの顔があった。

あれ、おかしいぞ。

そういうば〇元に何やら柔らかい感触がある……

つてえええええー！！！！！！！！！！

氣付くと、自分とヒナギクの唇が、重なっていた……

6 話（後書き）

小説の感想、意見等随時募集しています。
ここはこうするといいいんじゃないかな？
とか、

これはダメだろ
という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイスを頂けたらと思います。
よろしく願いします。

7話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

<http://ncode.syosetu.com/n4238d/>

7話

次の日の学校……

「おはようございます、ヒナギクさん／＼」

「おはよう、ハヤテ君……／＼」

そこには何やら気まずい雰囲気の二人がいた。

あゝ、もう！なんでこんな時に限って隣同士なのよ（なんだ）！！！！

二人は話ずに話せない状況だった。

昨日も、あの後結局ハヤテはヒナギクを家まで送ったのだが、家に着くまでも間、一言も話さずに帰った。

お互いに、顔をあわせるだけで思い出して顔が赤くなって、会話どころではなかったからだ。

今日、いったいどうやって過ごせばいい（んだ）のよ……

そんな端から見れば超青春ライフを送っている二人を観察する三人がいた。

「ねえねえ美希ちゃん、あれってビュービューなカップルさんだよね？」

「いや、まだあれは煮え切らないタイプだな。ここは我らがサプライズをして盛り上げてやらんと！」

美希が目を”キラン”と輝かせて言う。

その横では理沙が頭を縦に振りながら不敵な笑みを浮かべている。

さあいくぞ！と息高らかに彼女らの任務を遂行しようとしたとき、運悪くHR開始を告げるチャイムがなった。

それと同時に遅刻ギリギリを狙ってくる生徒が山のように教室に入ってきた。

これではもうサプライズ（いたずら）どころではない。

今回は残念だが諦めることにした。

HRが始まると、薫が何ともいえない”またかよ”というような顔をして入ってきた。

この時間は本来、副担任の役目なのだが、定番化した雪路の遅刻の性でわざわざ来ることになってしまった。

宿直室に泊まっている人間がどうして遅刻するのかは一般人には理解できないことだ。

薫はささっとHRを終わらせると、クラス内のまじめそうな生徒を呼び寄せた。もちろんその中にはヒナギクも入っている。ついでにハヤテも入っていた。

「知っていると思うが、今日は生徒会役員選挙の立候補手続きの日だ。立候補しようと思っっている人は放課後に職員室の私のところまで来るように。あっ、あと桂は俺の推薦がついてるから。じゃあそういうことで」

そう伝えると、忙しそうに次の時間の授業のある教室へ向かっていった。

「全く、先生にはもう生徒会はやらないって言ったのに」

残された生徒はやるかやらないかで話し合っていた。

それを聞くと、一人も立候補する生徒はいないようだ。

今年はヒナギクが降りた理由で生徒会をやめたり、立候補しない生徒が多い。それで教師側も人で探しに必死だ。ヒナギクは有能ということもあり、目をつけられたようだ。

一方のヒナギクは生徒会はやらないつもりだ。

仕事自体は嫌いではない、むしろ好きな方だが、せつかくのハヤテとの時間がそがれてしまう。

せつかく一緒の時間が増えたのにわざわざ・・・あれっ？でもハヤテ君も役員にすれば一緒に仕事が出来ること？

そうすれば放課後も一緒に・・・

生徒会、やってもいいかも。

全く、怒涛の発想である。頭がいいんだか悪いんだか意見が分かれ
そつな発想だ。さすがケン力で男子に勝っただけの事はある。

それはともかく、決まったら次は行動だ。

すぐ横で考え込んでいるハヤテにさっそくアタックだ。

「ねえ、ハヤテ君。さっきの生徒会の話なんだけど・・・」

しかし、ハヤテは話しかけられるとすぐに後ろを向いてしまう。

どうしたんだろう・・・

考えてみて気付いた。昨日の出来事を。

思い出すと今度は自分の顔が赤くなってきた。

しかしこんなところで負けてはいられない。

楽しい学校生活は今、この手に掛かっているのだ。

「ねえ、こんな時に悪いけど、生徒会をやるつもりはない？」

「いやあ、僕には執事の仕事もありますし」

「そんなの関係ないわ。私だって生徒会と部活を両立してたんだから、一流の執事なら学校と仕事を両立して当たり前でしょ」

ハヤテは痛いところを突かれて返す言葉がない。

返す言葉を考えているうちにじゃあそういうことでねと言ってヒナギクは去ってしまった。

「えーちよつと！あーもう、お嬢様やマリアさんにどう話したらいいんだー！！」

こうして教室には悲鳴を上げるハヤテだけが取り残された。なぜか
つて？次は移動教室だからです。

こうして放課後、結局ハヤテは断りきれず、立候補手続きをしてしまった。

何度も断ろうと思ったのだが、横で振りまいてくれるヒナギクの笑顔が印象的で、これが見られるのならやってもいいのかなと思って
しまうからだ。

その不思議な気持ちが恋心の始まりだといつかわかる日が来るのだろうか。

今を見る限り、ハヤテの春はまだまだ先になりそうだ。

[illegible]

あとかぎ

白皇の職員室ってどれくらいの広さなんでしょうね。小中高一貫で、予算もあるから先生は普通の学校より多いでしょう。多分300人くらいでしょうか。ってことは職員室はかなりの広さですね。迷いますよ、確実に。先生の机は座席表で確認できるように家の学校はなってますが、300人も名前があつたらまずその中から目的の人を見つける気がしません・・・・。そのところ実際のどうなっているのでしょうか。

7 話（後書き）

小説の感想、意見等随時募集しています。
ここはこうするといいいんじゃないかな？
とか、

これはダメだろ
という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイスを頂けたらと思います。
よろしく願いします。

8話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

<http://ncode.syosetu.com/n4238d/>

8話

前の話の夕方……

「ただいま戻りました」

ハヤテは屋敷の玄関にいる。そこにはいつも通りマリアが出迎えに来てくれている。

「おかえりなさい。今日はちょっと遅かったですね。ナギが待ってますよ」

ナギは昨日学校に行ったということで今日は休んでいる。ゲームの遊び相手がいないと暇でしょうがないらしい。（マリアは強すぎてつまらないらしい）

とりあえずハヤテはマリアと共にナギのもとへ向かう。

ナギのいるプ ステ部屋に着くと、マリアはお茶お入れるため、すぐそばにある台所へ向かった。

ハヤテはとりあえずソックをして部屋の中に入る。

「遅かったではないか！」

中ではマリアが言っていた通りナギがごろごろしながら1人ゲームをしていた。

相当暇だったのか、ハヤテの顔を見るとすぐに飛びついてきた。

そしてすぐさま二人で対戦を始める。

「あゝ、僕のクークが！」

「ふつ、私のテー・ガードに勝とうなんて100年早いな！」

丁度ゲームも白熱して疲れ始めたころ、マリアがお茶を持ってきた。

「はいはい、そろそろお茶にしましょうね」

ナギも疲れてきていたので、三人でお茶することにした。

普通、主従関係にある場合、お茶といったら主人だけが飲み、執事やメイドは後ろで見ているのだが、三千院家は主が堅苦しいことが嫌いなので皆で和気合い合いとしている。

「そういえばハヤテ、今日はどうしていつもより遅かったんだ？」

ナギはいつもより遊ぶ時間が短く、それが気になっていた。もしかするとまた面白いことに巻き込まれていた可能性もある。

ところが、ハヤテからの返事は予想だにしないものだった。

「いやゝ、ちょっと生徒会選挙の手続きをしていました」

それにはマリアとナギが口をそろえて驚いた。

「おいハヤテ！生徒会とはどういうことだ！私はそんなこと聞いてないぞ！」

「私も初耳ですよ！本当にやるんですか！？」

「いや、ヒナギクさんにやらないかって言われまして、それで断れなくて・・・」

ハヤテの言葉を聴くと、ナギの様子が急変した。

額にはあからさまに”ムカつきマーク”が出ている。

ハヤテは本能的に感じた。

あれ、なんか地雷踏んだ？

そこまでは分かった。だが自分が言ったはずの”禁断のワード”がいくら自分の言った言葉を思いだしても見当たらない。

困り果てたハヤテは最終手段のマリアに救いを求める目線を送ってみる。

だがマリアはもうダメですねという顔をしている。

やばい、完全に追い詰められてしまった・・・

だがナギの怒りは一向に収まりそうにない。

「私以外の女と関わるなと何回言ったらわかるのだ！何が”ヒナギク”だ！そんなにヒナギクが好きなのか？私よりヒナギクのほうが大事なのか！？」

ナギの周りはA フィールドと化し、異様な迫力をかもし出していた。

もうこうなったら勘で回避していくしかない。

「いや、お嬢様のことも好きですよ？」

「んっ！？じゃあ何か、ヒナギクのこと好きだということのか！！？」

ナギのことは命の恩人として好きだ。もちろんヒナギクにも世話になっているので嫌いになる要素はない。

「いやまあ、ヒナギクさんのことも好きですけど・・・」

やってしまった。ついにこの一言でナギのスイッチが完全に入った。

「なんだとお・・・！！！！！！！！」

ナギのライジングアッパーがハヤテに炸裂した。

ハヤテは部屋の外まで吹っ飛ばされ、部屋の扉は閉められてしまった。

ドアの向こう側からはふんだ！ハヤテのバーカという声が聞こえてくる。

「痛てて・・・なんでいつもこうなるんだろうっ」

毎度ながら借金執事は未だ事の原因を理解できていなかった。

やることのなくなったハヤテはひとまず台所へ向かうことにした。
それ以外にやることが思いつかなかった。

廊下から立ち上がろうとすると、ナギの攻撃を受けたところが少し痛んだ。

すると、突然後ろから声が聞こえてきた。

「そんなことではいくら命があっても足りませんよ？」

振り向くとそこにはマリアの姿があった。

「全く、しょうがないですね」

月の輝く夜景の輝きを受けたマリアの微笑みは、その名の通り聖母のように優しく、ハヤテの落ち込みかけていた心をすぐに癒してくれた。

「すみません・・・マリアさん」

二人は仕事場（台所）へと歩き出した。

「それにしても、生徒会の話は本当なんですか？」

二人は台所で夕食の準備をしている。

二人にとって料理は手馴れたものなので集中力を要するもの以外は話しながらでも普通に出来る。

ハヤテはマリアに学校での出来事を一通り説明した。

「そうでしたか。（ヒナギクさんも案外大胆なんですネ）でもナギはどうするんですか？学校のことはかりで執事の仕事をほったらかしというわけにはいきませんが・・・」

マリアはナギのことが一番心配だ。

恋人でもあるハヤテが屋敷にいる時間が少なくなるときつと悲しむだろう。

「それも考えたんです。ヒナギクさんに言われて気付いたんですけど、学校も仕事も両立してこそ一流の執事だと思うんです。偉そうなこと言ってますが実行できるかどうかが問題なんですけどね・・・」

「

へえ、思ったより大人なことを言いますね・・・

ハヤテ君は頑張り屋さんですからね・・・なんとかなりますね！きつと！！

「そうですか。ではこちらまでできるかぎりサポートさせていただきますね。えつと書記になるんですね？頑張ってくださいね！」

「はい！がんばります！」

こうして、ハヤテは無事にその日を行きぬくことが出来た。

ちなみに、翌日はナギのご機嫌を取るのがものすごく大変だったらしい（ハヤテ談）

8話（後書き）

小説の感想、意見等随時募集しています。
ここはこうするといいいんじゃないかな？
とか、

これはダメだろ
という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイスを頂けたらと思います。
よろしく願いします。

9 話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

<http://ncode.syosetu.com/n4238d/>

9 話

なんだかんだあつたが無事に翌日。

今日から生徒会選挙の選挙活動開始日だ。

というわけでハヤテとヒナギクも今日から演説などを始める。

それで、今校門前で二人で演説をする準備の真つ最中だ。

「それにしても、本当に僕が生徒会になれるんでしょうか・・・」

「何言つてんるよ！ハヤテ君なら大丈夫だつてば！」

ハヤテは人前に出るのは本当は得意ではない正確だ。

ただ幼いころからのバイト生活のおかげで慣れてはいるが・・・

もちろん、今回もハヤテはかなり不安がある。

まあ、周りから見ればこれほどまじめで几帳面な生徒会向きな人間はそうはいないと思うが、本人は全く自覚していないわけで・・・

そういうわけで、今回も演説内容は前日に考えたものをほとんど暗記してきている。

対するヒナギクは、性格上、リーダーシップというか人前に出るのが得意な正確なので全く心配はない。

こちらも本人は自覚していないが……

そんなわけでお互い励ましながら公約のチラシやらの準備を進める。

しかし、この平和で羨ましいラブ臭のするふたりに迫る邪悪な人影があった。

「このおー、綾崎！1人だけ桂さんとなれなくしゃがつて！！その罪をつぐなわせてやる！！」

校門の近くの木の陰から二人に殺人視線を送る、どこからどう見ても怪しい、末はストーカーな東宮だ。

「黙っていれば、俺の許可もなく桂さんとあんなことやこんなことを……（注意：消して怪しいことはありません）！！」

実は東宮はヒナギクと違うクラスになっていた。

ただでさえ彼にとっては究極のストレスであったのに、さらにやらたとヒナギク親しくしているハヤテの姿が不幸にも彼の目に入ってしまった。

すでに平常心を失った彼は行内最大の加入者と噂される”ヒナギクファンクラブ”のメンバーとともにハヤテに復習することを決めた。そして、すでに計画は実行されている。

本当なら、ハヤテは学校には来れないはずだった。

ハヤテの通学路に仕掛けた数々のわなで登校不能状態に陥れるはずだった。

だが、どうやらハヤテのケタハズレの身体能力によってそれは回避されてしまったようだ。

「だが、次こそはお前に屈辱を与えてやる！」

そういうと、どこからか出した無線機で指令を出した。

「いつでも笑顔を、二年綾崎ハヤテをよろしくお願いしま〜す」

「責任感なら誰にも負けません。桂ヒナギクをよろしくお願いしま〜す！」

そのころ、ヒナギクとハヤテの二人は登校する生徒増えてきたので演説を始めていた。

しかし、まだ早い時間帯なので人影はまばらだ。

ただ立っているのもつまらないので二人でときどき会話もする。

「それにしても今日は朝から不幸でしたよ」

ヒナギクはまわりに人がいないか注意を払いつつハヤテの話を聞く。

また不幸な目にあったのね・・・まあ、珍しいことでもないんだろうけど・・・

「屋敷を出た途端、ゴミ箱から大量のねずみがおそってきてですね．．．」

まあ、想像できないようなことでもないわね．．．

「やっと追いついたと思ったらなぜか交差点で轢かれかけて．．．」

それって大丈夫なの！？警察に行くべきじゃないの．．．

「なんだか嫌な予感がしたので人気のない通りを通っていたら、今度は野生の猫に引っかれて．．．」

なんでそこまで不幸が集中しちゃうのかしら．．．

読者の皆さんは分かっていると思いますが、すべて東宮の計画です

そんな感じの話をしていると、生徒の集団が近づいてきた。

アピールはこういふときにするのが一番効率的だ。

すかさず二人はチラシを配り始める。

ところがハヤテはある事実気がついた。

ヒナギクとハヤテは今、左右の校門にそれぞれ立っている。

しかし、まとめてやってきた生徒数十人は”全員”ヒナギクの方に
よっていくのだ。

えっ、そんなことが・・・

ハヤテもビラを配ろうとしたが、生徒達は受け付ける雰囲気がない。

ヒナギクはビラ張りが忙しくてハヤテのことには気付いていない。

ハヤテは数分間の間、孤独に立たされた。

やっぱり僕は、ダメなのかな・・・

あからさまに落ち込んで、地面に座り込むハヤテを見て、木の陰で東宮が勝利の笑みを浮かべていた。

9 話（後書き）

小説の感想、意見等随時募集しています。
ここはこうするといいいんじゃないかな？
とか、

これはダメだろ
という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイスを頂けたらと思います。
よろしく願いします。

10話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

<http://ncode.syosetu.com/n4238d/>

10話

「フッフッフっ、計画通りだ！」

先ほど通った男子生徒（と少数の女子）は全員ヒナギクファンクラブの会員だ。

今回の作戦はハヤテを選挙から脱落させて、少しでもヒナギクとハヤテの距離を離そうというものだ。

まずは、ハヤテのやる気を削がすため、自分への自信をなくさせる作戦だ。

「完璧だ！今度こそ俺は綾崎を打ちのめしたぞ！」

東宮は自信満々に部下のファンクラブメンバーに自分の成果を見せる。

ところがメンバーは東宮にあそこを見ろというサインを送っている。

なんだよ、せっかく作戦が成功してというのに

ハヤテがさっきまで地面に座り込んでいたところを見ると、そこではヒナギクと手を取り合っている姿があった。

どーユーことダーーーーー！！

もはや心のなかで叫ぶしかなかった。

見ただけでかわいそうになってくる程落ち込んでいるハヤテをヒナギクが見捨てるはずがない。

ましてや、東宮は知らないがヒナギクの好意のことも考えるとこれは必然の出来事だ。

明らかな作戦ミス。

「くそーっ！次こそはお前を倒してやる、綾崎！！！」

そういつて東宮は数人の部下と共にどこかへ走り去っていった。

ハヤテはというと、

「ヒナギクさんって本当に頼りになりますね」

登校時間も過ぎ、ヒナギクと二人仲良く教室へ向かっている。

精神的ダメージも、ヒナギクの励ましでなんとかあった。

「それにしても、ハヤテ君……」

ヒナギクは聞いておきたいことがあった。

今回、生徒会にハヤテを立候補させたのは自分だ。

もし、ハヤテが本当は嫌がっているのなら今のうちにでもやめてもらった方がいい。

さつき、ひどく落ち込んだ姿を見てヒナギクはそんなことを思った。

でも、それ以上に聞きたいこともある……

「ハヤテ君は、本当に生徒会やりたいの？ 私と一緒に……

……」

ハヤテ君は、私のことどう思ってるの……

本当に私と生徒会やってもいいと思っているのかしら……

しかし、ヒナギクの不安は瞬く間に消し去られた。

「何言ってるんですか！ヒナギクさんと一緒だから生徒会に立候補なんかしたんですよ？」

えっ、それってどういう意味……

「いつもヒナギクさんにはお世話になってばかりいるので、今回は僕がそばでサポートしますから！」

ハヤテはヒナギクの手を握る。

「だから、絶対に僕は当選しますよ！ヒナギクさんと一緒に！」

クスッ

全然私の思いに気付いてないんだから。

でも嬉しい事言ってくれるじゃない。

ヒナギクもハヤテの手を握り返す。

「そうね！じゃあ二人で頑張りましょうか！！」

ヒナギクは向かい合つとハヤテに小指を出す。

「絶対、当選するって約束よ」

そして二人は誓った。

二人で力をあわせて絶対当選するっ！！！！

誰もいない校舎の片隅で

少女の思いは

確実にハヤテに伝わっていった

10話（後書き）

小説の感想、意見等随時募集しています。
ここはこうするといいいんじゃないかな？
とか、

これはダメだろ
という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイスを頂けたらと思います。
よろしく願いします。

11話

そして放課後……

ハヤテは帰る準備中だ。

放課後は特に選挙活動はない。

しかも、執事の仕事もここ最近時間をかけられなくなってきたので、今日は久しぶりにナギと遊ぶ（遊ばれる）予定だ。

しかし、そんなハヤテにお呼びがかかった。

「ハヤテ君、今日の放課後久しぶりに剣道部に寄ってかない？」

それは少しだけ一緒にいたいと思うようになった人からだった。

ヒナギクだ。

ハヤテは考える。

今日くらいは屋敷に帰ってお仕事しないとまずいだろうな

しかし、ヒナギクを見るとなぜか一緒にいくになる。自分ではまだなぜかわからないけど。

そして結論はこうなる。

まあ、今日くらいはいいかな

こうしてハヤテはヒナギクと格技場へと向かっていった。

しかし、それを影から観察する男が1人……

「剣道か……これは良い！見てろよ綾崎！！」

東宮も格技場へと向かっていった。

「ティヤーーーーっっ！！！！」

格技場はすでに数人の部員が練習を始めていた。

ヒナギクは部員にハヤテが練習に参加することを伝える。

すると一瞬だけハヤテに視線が集まる。

（（またあいつかーっ！））

ハヤテは背筋が凍るような殺気を感じたが、次の瞬間には何事もなかったかのように穏やかな空気が流れていた。

何だったんだと不思議に思いながらも、ヒナギクの言うとおりに稽古を始める。

編入直後に来たとき以来に剣道はやっていなかったが、執事特有のな運動能力で驚くほどの速さで上達していった。

やっぱりハヤテ君はすごいわね・・

一度手合わせしてみたいけど、さすがに二人だけで試合っていうわけにもいかないわね

ちょっと早いけど、しょうがないから全員で練習試合でもしようかしら

理由は部長にしては不順だがとりあえず試合をすることになった。

「じゃあ形式はいつもと同じ勝ち残り式でやるわよ。じゃあ一番は綾先君と・・・その人！」

（（その人！？名前で呼んでくだらないのか！！？））

オリキャラは使いたくないんです。がまんしてください。

しかし、問答無用に試合は始まる。

「試合開始！」

二人はまず間合いを取って相手の出かたを伺う。

「まあ良い、綾崎ハヤテ。悪いが俺が倒させてもらおう！」

「えっ、何で僕の名を！？」

「問答無用！！！」

相手は面のフェイクを掛けながらすばやくハヤテの胸元に飛び込み、
胴を狙う。

ハヤテは体の前に竹刀を構え、ぎりぎりで受け止める。

そこからの鏑迫り合いは力でハヤテが押し勝つ。

「もらったああー！」

よろけていたように見えた相手に懇親の面を打つ。

しかし、それは見事に止められてしまった。

「甘いな」

相手は竹刀を上にした状態から胴を放つ。

しかし、確実に決まるはずだったそれは虚空を切った。

何！！今のは達人でもそう簡単には避けられないんだぞ！？

見回してもどこにもハヤテの姿はない。

「上ですよ」

相手は咄嗟に竹刀を構えようとする。

しかしときすでに遅し。

「面っ！！！」

ビピーー！。試合終了。綾崎ハヤテの勝ち！

試合が終わると、すごい試合があるという噂を聞きつけてやってきた生徒が入ってきた。

勝者にも敗者にも歓声を送られた。

狭い格技場はどんちゃんさわぎだ。

何これ、こんなにうちの部活強かったっけ？

っていうかそんな強い人いなかったわよね？いたなら今まで手を抜いてたってこと？

どーなってんのよーーっ！！！！

部屋の片隅に1人取り残されてしまった少女がいた。

11話（後書き）

小説の感想、意見等随時募集しています。
ここはこうするといいいんじゃないかな？
とか、

これはダメだろ
という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイスを頂けたらと思います。
よろしく願いします。

12話

試合が終わると、ヒナギクはハヤテのもとへ駆け寄った。

目の前で好きな人がかつこよく勝ったのだ。いても立ってもいられない。

「すごいわハヤテ君！」

さっきまで気になっていた部員達の異常な強さも忘れ、ただハヤテがすごかったことを話した。

我を忘れてハヤテの手を握りながら。

しかし、ハヤテは困った顔で周りを気にしている。

ヒナギクは八つとして周りの見ると、自分達に視線が集中していた。

よく見ると自分の手はハヤテと……

思わず顔が赤くなる。

まずいわ、場の空気がなんかすごいことになってる……ここは適当に話をそらさないで死んじやいそうだわ……

「い、いやー、それにしてもどんなトレーニングをしたらあんなに強くなるのかしら!？」

頭をフル回転させたが、結局そんなことしか口から出てこなかった。

「えっ、いやー特に何もしてないんですけどねー」

ハヤテが話をあわせてくれて、ようやく息がつまる視線から開放された。

ふうー、危ないところだったわ

今までこういう展開を味わったことのないヒナギクは随分と精神力を消耗した。

次の試合まではまだ少し時間がある。

ヒナギクはハヤテの休憩の意味も含めて外で一息つくことにした。

手を引っ張って、少しはなれたところのベンチまで連れて行く。

外に出ると、そこはまるで人気がなく、格技場のお祭り騒ぎが嘘のようだった。

天気は気持ちの良いくらいの晴れで、心地よい春風も吹いている。

ここなら安心してくつろぐことができそうだ。

ヒナギクはベンチに座ると、さっきまでの出来事を思い出していた。

普段はあまり活躍していなかった部員の活躍、ハヤテのすご過ぎる体力、技量……

そういえばさつき特別な訓練はしてないとか言ってたわよね

あれほどの動きをしながら、トレーニングはしていないというハヤテが信じられなかった。何かしていても信じられない動きだったが。

周りに人がいないことを確認し、ハヤテの体をチェックしてみる。

腕は……意外と筋肉質ね、筋の形がはっきりわかるわ

足は……服に隠れて見えないけど意外と太いわね

こうして調べてみると、ハヤテは意外とマッチョだ。

当然といえば当然だが。

本当にこれでトレーニングしてないの？

考えれば考えるほど疑問が浮かび上がるばかりだ。

うーん、やっぱり仕事をしてると違うのかしら。そういえばうちに来たとき筋トレやってたわよね、うーん、

「……さん、……くさん、ヒナギクさん！」

ヒナギクは気がつくと深く考え込んでいた。

ハヤテは心配そうな顔をしてヒナギクを見ている。

「あの、ヒナギクさん疲れてます？」

いや、あなたのことを考えてただけど・・・

考えていてもしょうがない。本人に聞いてみる。

ヒナギクは運動能力について聞いてみる。

ハヤテは昔のことを思い出し、どこか懐かしそうにも悲しそうにも見える様子で空を見上げて話してくれた。

小学生になったときからやっていたバイト生活、肉体労働が始まったころの辛い体験など今まで聞いていなかったことを聞いた。

その話から、やはり小さいころから労働に耐える為に本人は皆やっているかと教わったトレーニングや訓練があったことがわかった。

それに加え、小さいころからの苦難が、いつの間にか丈夫な体を作っていたのだ。

ヒナギクは、そんなハヤテがとても強く見えた。

前からすごい生活をしてきたと噂で聞いていたけれど、まさかこんなにすごいとは思わなかった。

それをハヤテは乗り越えてきたのだ。

おもわず涙がにじんでしまう。。

「ハヤテ君、私、その・・・」

言葉に詰まったしまった。

と、その時ベンチの後ろの茂みから三人の少女が飛び出してきた。

「暗すぎるぞその二人！」

「これを何の小説だと思っている！」

「こんなのこの作品に似合わないよ」

三人娘だ。ハヤテが剣道部にいくと言う噂を嗅ぎつけて二人を尾行していたのだ。

が、さっきのあまりの空気の重さに耐え切れなくなり思わず出てきてしまったのだ。

しかし、当然尾行がバレればヒナギクからお仕置きを食らうのは決定事項だろう。

「あんた達、全部聞いてたのかしら？」

さつきとは一転して、ヒナギクからは何か殺人的な気がメラメラと漂っている。

一応顔は笑っているが、まったく笑っているように見えない。笑顔がまた怖さを強調している。

このままではタダでは済まない。

（（（なんとか切り抜けなくちゃ）））

三人は必死に言い訳を試みる。

「い、いや、ヒナ。尾行とは人聞きが悪いな。私達はただ剣道部が面白いことになっていると聞きつけてやってきただけで・・」

「そうだ、あんなにギャラリーが多いのは私達が噂を広めたからなんだぞ」

「そうだよ！盛り上げる為に達人達に部員に変装してもらってるんだから！」

一瞬場の空気が固まる。

泉は言っではいけないことを言ってしまった。

(しまったーーーー！！！！)

こうなってしまったら、もう言い返すことも出来ない。

「へえ、じゃああの部員達は偽者なんだ。全く余計なことしてくれるじゃないの？」

ヒナギクから発せられている気の濃度が高まっていく。

「いやあ、ある人に頼まれてそれで面白そうだったから……」

もう死亡フラグ確定だ。ヒナギクの追い討ちが迫る。

「あんなことしてハヤテ君が怪我でもしたらどうするの？そういうことも考えたのかしら？」

怒り度99%。こうなったら最後の手を使っしかない。

「逃げろー！ー！」

三人はあっという間に見えなくなってしまった。

ヒナギクはまったくもつとため息をつく。

「どうしてこういうときだけあの子達は体力があるのかしら」

愚痴を言いながら再びハヤテとベンチに座る。

それにしても、三人娘の話が本当だとすると部員ではない部員が試合をやっていることになる。

部長としてそれは続けさせていいのだろうか。

初戦のレベルからすると、大怪我を生まないともいえない。

部長としての責任を考えるとやめさせたほうがいいのではないか・
・

しかし、そんな考えはハヤテの顔を見たら吹っ飛んだ。

ハヤテは今までに見たことのないやる気に満ち溢れた表情をしていた。

ハヤテは戦う楽しさを感じていたのだ。一対一の勝負はなにか心躍るものがあった。

ヒナギクはそんなハヤテを見て、試合をやめさせることは出来ない。
今のハヤテには男らしさがある。今は邪魔をしてはいけないと思った。

ハヤテ君なら大丈夫よね・・・きっと、、

不思議とそう思えてきた。

時計を見ると五分ほど立っていた。

「さあ、そろそろ会場へもどりましょうか！」

二人は早足で各議場へと向かっていった。

会場に着くと、すでに試合開始直前だった。

ハヤテは急いで次の試合の準備をする。

勝ち抜きなので次の試合にもハヤテは出なければならない。

選手席にハヤテが着くと、すぐに対戦相手が決まった。

「第二試合、綾崎ハヤテとその人！」

またも実名で呼ばれなかった対戦相手は、細身の綺麗な黒髪の少年だった。

背丈も小さめで、かわいいとギャラリーの女子からラブコールが轟く。

見た目は強そうには到底見えない。

あれ、これなかいけるかな

初戦からレベルが高かったので身構えていたが、肩の力が抜けた。

試合前の礼が始まる。

それにしても本当にこの子も達人なのかな？なんか本気で戦ったらダメな雰囲気なんだけど・・・

しかし、ハヤテの心を読んだのか相手から手加減無用コールが掛かった。

いや、でも本気とか出したらあそこらへんの女子からの非難がやばそうなんだけど

礼が終わり、試合が始まる。

「試合開始！」

とりあえずハヤテは相手の出かたを見る。

しかし、相手の方は序盤から積極的にせめている。

籠手面胴とバランスのとれた攻撃が繰り出されてくる。

その技の完成度は初戦の相手よりもむしろ高く、ハヤテは守る一方になっていく。

何なんだこの子は！さっきのひとより全強い！ここは本気を出さないと負ける！

ハヤテも相手の攻撃をよけながら少しずつ攻撃を加えていく。

しかし、それは相手にはかすりもしない。まるで未来が見えているかのように余裕を残しながらまたま戦っている。

時間がたつにつれ、だんだんとハヤテは追い込まれていく。

「なんだ、こんなもんだったの？綾先君。つまらないじゃん」

相手は鎧迫り合いの状態からいきなり力を抜き、ハヤテの体制が乱れた一瞬について突きを繰り出した。

それはハヤテの腹部にあたり、ハヤテはその場に座り込んでしまった。

「なぐんだ、強いって聞いてたからもつと楽しめるかと思ったのに。じゃあもう終わりにしようかな」

ハヤテは激痛をこらえ、何とか立ち上がる。

しかし、その瞬間、相手は尋常ではない速さでハヤテのふところめがけ飛び込んできた。

スパアーーン

そしてそこからハヤテの胴めがけて竹刀が振られた。

12話（後書き）

久しぶりに手の込んだ回となりました。少しでもこういう展開をやりたいと思います。ご意見ご感想がありましたらどしどし送ってやってください。

13話

スパアーーン

ハヤテの胴めがけて竹刀が振られる。

くっ、避けられない、、、これで僕は終わるのか・・・

周りに視線をやると、心配そうにしているヒナギクが見えた。

その時、ハヤテの中で種がはじけた。

こんなところで、、負けてたまるか

！！

ハヤテは襲い掛かってくる竹刀を受けとめ、決定打を防いだ。

しかし、相手の威力で10mは後ろに飛ばされてしまった。

あれ、決まっと思ったのにな

相手は確実にハヤテをしとめるつもりだった。しかし、今のハヤテの動きは予想を超えたものだった。

「へえ、やるじゃん。出来るなら始めからやってくれればいいのに。じゃあそろそろ僕も本気を出そうかな」

ハヤテはさっきの一撃のダメージで朦朧としている。

相手はその隙に呪文を唱え始めた。

「 I have to take a restrained
save Executive Access Agreement
ent!」 (訳があっているとは限りません。本来はギリシヤ語
です)

相手の周りからは不気味な光が現れ、模様が浮き出てきている。

「 Ceremony end Full open organization」

全てを唱え終わると、相手から力のようなものがあふれ出てきた。

ハヤテはようやく立ち上がると、その圧倒的な力に晒された。

「何なんだ、これは!?!」

ハヤテの体は気とは違う力によって吹き飛ばされそうになる。

「驚いたかい?これは俗に言う魔力ってやつだよ。野々原先輩と同じようなものだよ。僕の方が上級だけどね」

そついうと相手はハヤテの目の前から消えた。

とほぼ同時にハヤテの体に衝撃が走る。体に目をやると竹刀がめり込んでいる。

ハヤテは倒れそうになるのを耐え、相手がいるはずのところに勘で竹刀を叩きつける。

しかし、それは虚空を切った。

相手はさっきとは比べ物にならないスピード、パワーで襲い掛かってくる。

すかさず相手は再び攻撃を再開する。

もはや今のハヤテには決めてとなる一手を防ぐことしか出来ない。

使っているのが竹刀とはいえ、相手のパワーともなると武器は何であれ関係なく大ダメージを与えてくる。

「がっかりだよ、せっかく本気を出してみたら全然弱いじゃない」

相手の攻撃がさらに強くなっていく。

「君はピンチに追い込まないと強くないの？」

相手は肩、足などを狙ってくるようになった。しかしそこを守って一本取られてしまう。

気の遠くなるような痛みがハヤテを襲う。

ハヤテは朦朧とする意識の中でただ必死に攻撃を耐え続ける。

もうダメかも・・・視界もかすんできたな・・・

この気の緩みでハヤテに一瞬の隙が出来てしまった。もちろん相手はこれを見逃すはずがない。

「じゃあこれで決めちゃおうかな。ちょっと痛いけど我慢してね」

バシイイイイイーーン

ハヤテの面に風を切る音を立てて竹刀が降られた。

そしてハヤテは倒れた。

14話

「ハヤテ君ーーーーー!!!」

意識が戻ると、遠くからヒナギクが自分を呼ぶ声が聞こえた。

それと同時に烈しい痛みも襲ってきた。

くっ、完全にやられた・・・もう体が持たない・・・

そんな状態のハヤテを相手は見下ろしている。

「さあ、これで君ピンチに追い込まれた。これで少しは強くなるかい？」

不敵な笑みを浮かべて竹刀を掲げる。

動けるのは数秒つてところか・・・もう何も策はないけどあたっていくしかない！

相手の竹刀が顔に当たる寸前、ハヤテは立ち上がり攻撃を再開する。

まだ種ははじけた状態だ。

「イヤアアアーーーーー!!!」

残された時間と戦うように、言葉の通り疾風の如く攻める。

相手は突然のことに対応し切れていない。

ハヤテは最後の力を振り絞り一瞬で間合いを詰めて面を打った。

スパアーーン

避けようとした相手は間に合わずかすり程度だが面に当たってしまった。

ピピー、試合終了！ 綾崎ハヤテの勝ち！

「はぁ、終わったー」

ハヤテは床に大の字になって倒れこんだ。

そこへ相手が寄ってくる。

「おめでとう綾崎君。まさか僕が負けるとはね。見下してたよ」

ハヤテとしては今回ののは偶然勝ったのは分かっている。

そんなことはないですよと苦笑いする。

「最後の足の速さはすごいよ。あれはぼくもびっくりだったよ」

ほんとに・・・まさか君も魔法が使えたとはね・・・

魔法のことは言えないから黙っておくけど、いつか本気で戦える日がくるかも・・・

そういうと相手はそそくさとどこかへ消えてしまった。

それといえれ代わりにヒナギクがやってきた。

大丈夫？とか痛くない？とか聞いているがそうじゃないわけがない。まあ、それは本人も分かつてはいるけど聞かずにはいられない。

聞かれたからにはハヤテは返さなければならぬ。けれど普通に痛いですとも言えない。そこで

「大丈夫ですよ、ヒナギクさん」

結局こう言ってしまう。しかし今のハヤテは大丈夫じゃない。

ハヤテの視界がだんだんぼやけてきた。

そしてあっさりとぶっ倒れてしまった。

気がつくとハヤテは自分の部屋にいた。

体を起こすと、気がつかなかったが横にいたヒナギクが寝てなきやダメといってまた寝かされた。

なんかまたヒナギクさんにお世話になってるな……

起きてみればまた看病してもらっているのだ。ありがたくて（こっちからすると羨ましくて）しょうがない。

ハヤテはふと思い出した。試合はどうなったんだろう。

説明するとそれはヒナギクが危険すぎるということで中断させた。もちろん重態なハヤテを見てはむかうような者はいなかった。

「はあ、それにしても僕負けちゃったんだな」

ハヤテは試合のことを思い出す。

やはり負けるということは悔しかった。

「でもすごくかつこよかったわよ。ほんとうに」

実際は動きが早すぎてよく見えなかったがかつこよかったのは本当だ。

こんなことをしているとハヤテは入学式の日を思い出した。

あの時も倒れちゃったんだよな。もつと鍛えなきゃな。あのときもヒナギクさんはそこにいてくれたな。

そういえば地震もあったんだよな。それでヒナギクさんとなりゆきでキフェウス……！！！！？

ハヤテは勝手に自分の回想にもがき始めた。顔も赤みが掛かっている。

ヒナギクは？マークが浮かぶ。

「どうかしたのハヤテ君？」

「いやっ！別になんでもないですよ！？別にヒナギクさんと接吻したとか思っ
てませんよ！！？」

ハヤテは混乱していて何を言っているのか自分で理解できていない。
当然ヒナギクの顔も徐々に灼熱し始めて・・・という悪循環に陥
ってしまう。

ここでマリアという調停役がナイスタイミングで部屋に入ってきた。

「なんだか楽しそうですね」

顔を赤くしてもがいている二人端から見ると変だった
が、マリアは超人的洞察力でだいたい何が起ったのかを悟った。

そんなに慌てて何をしていたんですか？とか時々ジョークを混ぜて
二人の調子を整えてあげた。

そうでもしないと話なんて出来そうもなかったからだ。

運んできたお茶も飲み終え、一段楽した頃、マリアはハヤテを見て
言う。

「それにしてもまた怪我をしてきたみたいですね」

包帯に半身を包まれた姿はいかにも痛々しい。

「無理をしたらダメでしょう？ただでさえ寿命の縮まりそんなことばかりしてきたんだから少しは体をいたわらないと」

頑張りすぎ症候群＋何でも出来てしまうおかげでつい無理をしがちだ。

今までだって、そしてきつとこれからも・・・

マリアは一度深呼吸をするとハヤテのほうを向く。

「ハヤテ君。今日からはもつと自分のために生きてください。仕事は私達がフォローしますから。もう頑張りすぎはなしです」

マリアは続けて言う。

「これは約束ですからね。私からだけではなくナギやヒナギクさんからもです」

ヒナギクも照れくさそうに首を縦に振っている。

「じゃあ、最初の使命はヒナギクさんをご自宅にお送りしてきてください」

そついうとマリアは部屋を出て行った。

ハヤテは心の中で精一杯のお礼を言った。

14話（後書き）

感想いただけたら幸いです。

ぐぐぐらな展開なので具他のなアドバイスなどいただけたら幸いです。

15話

オレンジ色に染まった空の下、二人はヒナギクの家に向かっている。もちろんヒナギクを家まで送る為だ。

ハヤテは自転車を片手にヒナギクと夕日色に染まった道を歩く。

「でも、なんで自転車がいるんですか？」

ハヤテは乗らないのに自転車を持たせヒナギクの意図が分からない。

もちろんヒナギクは青春の象徴、自転車二人乗りがしたい。

しかし、違反というのもあるが、それ以上に恥ずかしくて言い出せない。

まあ、なんでここまでしてるのに気がつかないのよ・・・

そんな感じで何も出来ないまま帰り道も半分を過ぎようとしていた。

このままではいけない・・・

ヒナギクは意を決して言うことにした。

「「あの！」」

しかしその言葉は誰かとかぶっていた。もちろん声の主はハヤテだ。

予想外に出鼻をくじかれ、急にやろうとしていたことに赤くなってきた。

それを隠す為に必死に顔をそらす。

「あつ、ハヤテ君からどうぞ!？」

ハヤテもやりにい状況ではあったが、ヒナギクの様子が変わった為、自分から話すことにした。

「あの、自転車に乗りませんか？」

ヒナギクは自分の耳に入り込んできた言葉が信じられなかった。

けれどもそれは願ってもないこと。

もしかしたらハヤテ君も私と乗りたいのかも

そんな考えまで持つほど嬉しかった。

「このまま帰りだけ自転車を使うなんてもったいないじゃないですか」

そんな考えは崩れ去り、すぐに彼女は現実呼び戻された。そしてヒナギクをツンツンモードへ突入させる。

「あら、別に私は乗らなくてもいいのよ? どうせ家までそんな遠くないんだし」

思ってもいないことなのだが、素直になれなくてなぜかこんな言葉

が出てきてしまう。

「いや、乗りたくないなんてとんでもないですよ！自転車の方が早く着きますし」

「それって私と早く別れたいってこと？私なんてどうでもいいってわけ？」

気付いてみれば自分はハヤテを追い込んでいた。ハヤテは言葉が返せないらしく、言葉に詰まっている。

・ 何やってんのかしらあたし、一緒に自転車乗りたいはずなのに・・・

そう思っていると自然と言葉が出てきた。

「もお、しょうがないわね。ハヤテ君がどうしてもって言うなら乗ってあげるわよ」

素直になりきってはいなかったが、精一杯自分の気持ちを伝えていた。

それを聞くと、ハヤテの顔が明るくなる。きっと自分の怒りがさめたように思ったのだろう。

そついうことでヒナギクはハヤテの後ろに座る。

ヒナギクは未だかつて二人乗りというものをしたことがない。いくら小さいころ暴れん坊だったといっても一応可憐な少女なのだ。

後ろのあの独特の硬いすわり心地が今は心地よく感じる。

ヒナギクはハヤテがすっかり座ったのを確認すると、ハヤテに抱きついた。

「ちょっと何やってるんですか!？」

ハヤテが顔を真っ赤にしてこっちを見ている。

「だって、これ動くんじゃよ?つかまってないと怖いじゃない。ダメかしら……」

納得の理由にハヤテは黙ってペダルをこぎ始める。

「怖いからゆっくり走ってね!」

すっかし上機嫌なヒナギクはそんな条件まで加えてみた。

もちろん、ヒナギクは二人乗りが怖いわけでも、早いのが嫌いなわけでもない。

ハヤテの、より近くに、より長く居たかった為の口実だ。

今の二人の邪魔をする人は誰もいない。

ヒナギクはハヤテの背中の中をぬくもりを感じながら、まるで子猫のように寝中に擦り寄って幸せを感じる。

ゆっくりと流れる景色、誰もいない道。世界はまさに自分達を中心に動いている気がした。

こうして、しばらくの間、といつても時間的には五分くらいだったが、ヒナギクは何年分もの幸せを堪能した。

自転車が止まり、家に着いたことを知らされる。

名残惜しさがあるが、しぶしぶ自転車から降りる。

「わざわざ送ってくれてありがとう。とっても嬉しかったわ」

ちよっぴり桃色に祖また頬をしてハヤテに礼を言う。

ハヤテはその美しさに自分も頬が赤くなる。

「いえ、こちらこそ色々ご迷惑をお掛けしてしまって申し訳ないです」

気がついてみれば空は黒に染まり始めている。長話は出来ない。

「それじゃあね、ハヤテ君。また明日学校で会いましょう。」

ヒナギクは玄関へ向かい、ハヤテは自転車に乗る。

「選挙は明日が本番よ！お互い頑張りましょう！」

「お互い、絶対当選しましょうね！」

こうして二人はそれぞれの家へと向かっていった。

15話（後書き）

さて、久しぶりに舞い戻ってまいりました。
遊んでいたわけではないですよ？

ただ、ひぐらしやらに出会ってしまったので作風が変わらないことを祈るばかりです。

えっと、相変わらず感想は随時募集しています。こんな風になるといいんじゃないか等、ご意見多数お待ちしております！

16話

次の日……

「あゝ、なんだか久しぶりに会話した気がするな、ハヤテ」

ハヤテはナギと教室に向かっている途中だ。

もちろんこれは毎日あったんですけど、描かれることがなかっただけです。

「そういえば、今日はお前の選挙があるんだろう？」

ナギは今回のことはあまりよく聞いていないが、とりあえずハヤテが出馬することだけ知っていた。

深く突っ込まないところは、彼女の大人の一面というものだろうか。

「もちろん主としてお前に私の清き一票をくれてやるぞ」

ナギは恥ずかしがりながらハヤテの手を握る。

そんなナギにハヤテは優しく微笑み返す。

二人の絆は決して揺るぎはしない。たとえ世の中がどんな方向へなびこうとも……

そんな、晴れ渡った空のように、だれもがご機嫌になるような、すがすがしい朝だった。

しかし、それは昇降口につくと、すぐに崩れ去っていった。

そこには1人の少年が待ち構えていた。

「やあ綾崎とその連れ。ここであつたが百年目だな」

東宮だ。

ナギはいい雰囲気をぶち壊されてかなりいらだっている。

「それでだな、俺は綾崎に『だまれこの虫野郎が！さっさと行くぞハヤテ！』

東宮はナギの気迫に押されて何も言えなかった。

なみだ目になりながら、通り過ぎていく二人をただ見つめる。

ああ、俺は三千院なんかにも勝てないのか・・・

そのとき、東宮の頭の中に、ある誓いを立てたときの事がよみがえってきた。

いや、俺は勝つんだ！勝たなければいけないんだっ！！

「待ってくれ綾崎！」

ナギが早足でハヤテを引っ張っていくので、大分距離は離れていたが、なんとか声は届いた。

「お前に話があるんだ。聞いてくれないか？」

ハヤテはどうするか悩んだが、東宮がいつもよりまじめそうだったこと、ナギが限りなく不機嫌なことを考えてなぎを先に教室に行かせて、話を聞くことにした。

ナギは大分難色を示したが、ハヤテの巧みな話術で先に行った。

東宮は、ハヤテが戻ってくるのを見ると、急にまた元気になった。

ハヤテは適当に流しながら、早く行きたいので用件を迫る。

「いや、それなんだがな、お前、今日の選挙負けてくれないか？」

予想をはるかに超えて火星くらいまで行った返答に、ただ呆然となつてしまった。

東宮が言うには、選挙直前にある最後の演説で、自分が推薦する人を勝たせるようにしろということらしい。

しかし、ハヤテからすれば訳が分からない。

第一、ヒナギクと一緒に当選すると約束したのだ。そんな要求飲めるはずもない。

「あの、何の悪ふざけか知りませんが、丁重に断りさせていただきます。」

少々強めに、自分の意思をはっきり伝えるように言った。

それを聞くと、東宮は最後の警告だったのといって去っていった。

なんだったんだ、あれは・・・

ナギが待つ教室に着くまで、ずっとそのことで頭が一杯だった。

何かの悪ふざけだったのか、それとも本当に何かするのか・・・

考えても一向に答えは出てこない。

あれこれ考えているうちに、気付いたら教室についていた。

教室にはまだいらだっているナギがいる。

教室に入ると、ナギの世話や、三人娘などに絡まれ、ゆっくり考えられる状況ではなくなってしまった。

そんなこんなで気付いたらHRの時間になっていた。

ハヤテはそのときすでにさっきまで考えていたことはすっかり頭から消えていた。

その後、ハヤテはいつも通りに学校生活を過ごした。

そして、運命の選挙の時間がやってきた・・・

17話

「それじゃあ期待の彗星、綾崎ハヤテ君どうぞ！」

ハヤテは全校生徒の期待のまなざしを一身に受けて、雪路からマイクを渡された。

え〜っと、なんで僕はこんなことしてるんだっけ？

雪路は面白そうにはやくやれやれと言わんばかりの顔でハヤテを見ている

何をやれというのかというと、究極の一本勝負、一発芸だ。

だから……

なんでこうなるんだー！ーっ！！

それでは初めから順を追って回想しよう。

学校の6次元目が終わり、次は最後の総合の時間。

ここで選挙が行われることになっている。

「はあ、緊張するな〜」

人前に出ることに慣れているとはいえ、もともとは得意ではない上、今回は大きな目的があるため、ハヤテは結構緊張していた。

そんなハヤテにアドバイスをする三人娘。

「ハヤ太君だったら大丈夫だって！私達でも大丈夫だったんだよ？」

「そうだぞ。我々の公約を聞くがいい」

「その名も白皇大作戦！校内どこでも面白いことができるようにする」という画期的なものだったんだぞ！」

あまりアドバイスになっていない。

けれども、ハヤテにはそんな能天気さが丁度良かった。

まあ、公約だけはいただけないが。

緊張も少しほぐれ、ハヤテはみんなと一緒に体育館に向かう。選挙会場はそこだ。

向かう途中、三人娘にこんな話を聞いた。

「この選挙は普通の選挙と一味ちがうんだよ」

「選挙というよりはお祭りといった方がいくらいだな」

ハヤテにはいまいち意味が分からない。

「つまり、かなり盛り上がるってことだな」

「去年は花火とかまで上がったんだよ。ヒナちゃんびっくりしてたな」

考えてみれば、この三人もヒナギクも去年同じように選挙をして、それに当選していたことになる。

この三人がこんなに手間の掛かることをしていたなんて考えづらい。

「えつとね、それは美希ちゃんがヒ」わわっ！それは言わない約束だろ！……」

突然美希が焦りだした。顔を真っ赤にして泉の口を強引にふさぐ。

何かあるのがまる分かりだが、そこは触れないで置こう。

「まっ、まあそんなわけでヒナが当選したときは大賑わいだっただぞ」

少し冷静を取り戻した美希が、当時のことを教えてくれた。

選挙当時、学校中にヒナギクの噂が広まっていた。

もちろんその美貌と性格に惹かれてた。

それでヒナギクの支持率は圧倒で、ヒナギクの勝利を祝うパーティーのようなものが沸き起こった。

その中には東宮のような裕福そうももちろんいたわけで、一説によ

ると数千万規模のパーティーだったらしい。

ヒナギクは自分のことがわかっていないので、ただ困惑していたというわけだ。

「それで、今回もそうなるんですか？」

「まあ、今年もヒナは出るわけだし、何かしらあるだろうな。ただ、今回はヒナの人氣が前より高まつてるからもつとすごいかもしれん」

ハヤテはどんなものになるのか考えてみたが、全然想像がつかなかった。

選挙というものがどうやってパーティーに変わるのか、とても楽しみだった。

そんなことを考えていると、会場の体育館前についていた。

ついに今回の最後の戦いがやってきた。

ここで全てが決まる。

今までがんばってきたもの、ヒナギクとの約束を果たさねばならない。

ハヤテは深呼吸すると、大きく会場への一步を踏み出した。

「白皇のリーダーとなるのは誰なのか。皆張り切って応援しよう！」
オーーーーーっ！！！！！！

会場内は選挙とは思えないほど盛り上がっていた。

迫力に押されて突っ込むことさえ出来ない。

とりあえず、なぜかいる盛り上げ役の司会者と、それに答える生徒達で会場内はまるでお祭りだ。

これは大変な仕事になりそうだな……

そんなことを思いながら、とりえあえず指定された立候補者の集会所へ集まる。

そこにはすでにヒナギクの姿があった。

「噂には聞いていましたが、こんなにすごかったんですね」

ヒナギクはこうなる理由が分かっていないので、なんでこうなるの

かしらと首をかしげていた。

それにはハヤテも苦笑いするしかない。

参考に、去年の様子を聞いてみたが、こんな状況だったので流れでやっていたらしい。

それでは参考ににならないが、とりあえず自分の進行を予想してみる。

普通にやる 周りとかみ合わない B A D E N D

ハイテンション キャラが違う B A D E N D

ノってみる 周りはヒナギクファン B A D E N D

.....

考えてはダメだということが分かった。

こうなったらその場で何とかするしかない。そのための人生経験なら嫌になるほどつんできているはずだ。

頑張るぞと心の中で気合を入れた。

そうこうしているうちに、指導の先生が来た。雪路だった。

「ハイ皆聞いてね。見ての通り会場はあんな感じだから適当に私達が進めるから振ったら何とかする感じでよろしく」

「ちょっとお姉ちゃん！？適当って何よ！こいう厳正なものをもっ

としつかり……」

ヒナギクの最後の言葉を聞く前に、雪路はいつも間にか目の前から消えていた。

どうやら司会者の集まりの方へ向かったらしい。

しかも鼻歌を歌いながらスキップという気持ち悪いくらいの上機嫌さだったらしい。

機嫌が良くなるということは、きっと酒が豪華な料理でも振舞われるのだろつとその場の全員が予想した。

雪路が勝手にいなくなったので解散となり、その場に残ったのはヒナギクとハヤテだけとなった。

「それにしても、とうとう本番がやってきたんですね」

どうしても選挙会場とは思えない盛り上がり方が気分を複雑にさせるが、今までの努力の結果がもうすぐ出るのは変わりない。

「何言ってるのよ。ハヤテ君なら大丈夫に決まってるじゃない」

ヒナギクは心からそう思う。

強いし、やさしい。自分にはなくてはならない存在だ。

「ハヤテ君がいなかったら私……イヤ……」

ハヤテは最後のほうは声が小さくて聞き取れなかったが、顔を赤くして小さくなっているヒナギクがただかわいかった。

ちょうどその時、選挙開始を告げるアナウンスが入った。

「それじゃあ行きましょうか。僕たちの戦場へ」

ハヤテはヒナギクの手をとり、さらに盛り上がりが増した会場へと向かっていった。

17話（後書き）

ずいぶんと無駄に長く引つ張った選挙シリーズももうすぐ完結です。しかし、こういうイベントなのか自分でもわかっていなかったりします。いいラストとの案がある方は感想等からお願いします（汗

それ以外でも、駄文ゆえのご意見や、内容等へのご意見がありましたがお気軽に書いてみてください。きっと作者は喜びます。

それではまた次話でお会いしましょう！

18話

会場ではすでに数人が演説を始めていた。

ただ、演説といっても雰囲気はトークショーといった感じのものだ。内容は一応選挙関連なものになっているが、ユーモアもかなり混ぜられている。

何も知らない人が来ても選挙だなんて思わないだろうな・・・

文句は言ってみたが、ハヤテにしてみればこちらのほうがやりやすい。

こういう状況のほうが経験が多いからだ。

ハヤテは意気揚々とヒナギクとともに、候補者がそれぞれ演説することになっているステージへと向かう。

ハヤテとヒナギクは隣同士のステージだった。

ハヤテは得意の話術で観客の心を奪って行く。

とくに腐女子そうからの人気は圧倒的だ。

ヒナギクはもともとの人気で観客のハートをつかんでいく。

ファンクラブ会員数だけでも全校生徒の1/5という圧倒的数だ。

二人の人気は圧倒的なものとなり、選挙はきわめて順調なものとなっていた。

ところがそれに水をさす男が男が現れた。

「はっはっは、ずいぶん調子に乗っているようだな、綾崎」

また東宮だ。

まったく、今度は何の用だって言うんだか

「今日はな、お前と勝負をしにきた！」

そんなあからさまに勝負って言われても、今の時代決闘とかできませんよ？

「心配するな、そんなことはしない・・・選挙で勝負だ！」

いやいやいや、それもないでしょう。

しかし、面白そうな展開に、周りが盛り上がり、断れなくなってしまうた。

しかし、別に何か害があるわけではない。東宮に負けるくらいならもともと選挙に勝てるはずがない。

まあ、それは別として疑問があった。

たしか、東宮は選挙に立候補していなかったはずなのだ。

なのにどうやって勝負するといふのだろっ。

「それは心配するな。この俺に代わって我らが愛歌さんが勝負する！」

東宮の後ろにはいつの間にか愛歌がいた。

何を考えているのか、まったく想像を許さない笑顔でその場に君臨している。

ハヤテはその貫禄に息をのむ。

「お手柔らかにね、綾先ハヤテ君」

ハヤテの本能は大乱闘を予感させていた・・・

「勝負は簡単。一対一で選挙をして、投票数が多かったほうが勝ち。わかりやすいだろっ？」

いや、選挙って言ったら後半部分はあたりまえだから。

しかし盛り上がりのあまり、そんなことは気にできる状況ではない。

「ルールも簡単。制限時間内に演説っぱいものをすればいい。手段は問わない。妨害あり。以上だ」

それだけ説明すると、東宮は用意していたゴングをならした。

なんか始まっちゃったみたいだな

しかし、負けられないのはかわらない。

まずは相手の出方を見てから考えよう

愛歌はというと、演説をするでもなく、適当に一人を選び、耳元で何かをささやいていた。

十数秒だっただろうか。愛歌がささやき終わった後、選ばれた一人は気でも狂ったかのように愛歌の応援を始めた。

えっ、今何話したんだ！！！！！

考えてもしょうがない。相手は確実に一人ずつ落とすつもりらしい。それなら得意の話術で大人数を一気に落とせばこちらが有利となる。

しかし、もう一度愛歌のほうを見たハヤテは驚愕した。

なんとついさっきまで一人だけだった犠牲者が、十人程度にまで増えていた。

何ーーーーっ！！感染するのか、あれ！！

これはまずい、このままでは確実に自分よりも多数を手に入れるだろう。

「ふっ、どうした綾崎。所詮貴様はその程度か？だから警告しておいたのに」

横を見ると、勝ち誇った顔で東宮が見ていた。

「まあ、お前は女顔で貧乏で、実年齢小学生にやとわれているヘタレだからな。無理はないか。はっはっはっ！」

カッチーン

切れた。

といってもハヤテではない。

ヒナギクだ。

「ちょっとそれどういう意味よ。ハヤテ君のこと悪く言うのは許さないんだから！」

完全に不機嫌モードに入ったヒナギクからはダークネスなフィールドが展開されている。

ハヤテと愛歌の勝負はいったん選挙を中止して行われていたので、ヒナギクもそれを見ていたのだ。そして聞いてしまったのだ。

「いや、桂さん。よく見てみてください。その男に何ができるって言うんです!？」

ヒナギクが出てくることは完全に予想外で、少々東宮は焦っている。

「何だってできるわよ！ハヤテ君は天才なんだから！」

対するヒナギクも怒りでわれを忘れて、勢いでものを言っている。

「じゃあ、これはどうです？この場の全員を納得させる一発芸を披露させてみてくださいよ！」

東宮はもう思いつきでものを言う悪い癖が出てきてしまっている。自分で何を言っているのか理解できていない。

「いいわよ！ハヤテ君やって！」

・・・

いやゝ、僕はまったくできるとか言っていないんだけどなゝ

もはや固まるしかない。

ヒナギクの振りで、なぜか沸いて出てきた雪路に体育館の真ん中までつれてこられた。

そしてそこで ハイ、注目注目ゝ！ とか言いながらハヤテにマイクを渡してきた。

回想終了

だから・・・

何でこうなるんだーーーーっ!!!!!!

一通り事態を整理したところで納得できない。

そういえば以前、咲夜の誕生日会でも同じ目にあった気がする。

もう、そのりで行くしかない。

は、じゃあ行きますか

「それは352年前、中国は……」

長い戦いが始まった。

18話（後書き）

さて、なんか無駄に続いた感じがしないでもないですが、選挙編です。

落ちが決まっていなかったのでどうなるかわかりません。

期待はしておくと作者が喜ぶでしょう。

それではまた！

19話

それでリーはいったのさ。それじゃあ私の娘と同じじゃないかってね」(キラーン)

オオオオオーーーー！！！！！！

五分以上にわたる決戦は幕を下ろした。

どうにか成功させられたようだ。

「どう、これがハヤテ君の実力よ！」

ヒナギクはハヤテの話が聞けて、かなり上機嫌なようだ。

がんばったのはハヤテなんだけどね。

東宮は、ハヤテがここまでうまくやるとは思っていなかったらしく、あせりの表情が見て取れる。

「まだですよ、勝負は選挙が終わるまでわからないんですから！」

そつ、まだ油断はできない。相手はあの愛歌さんなのだ。

それから、ハヤテのとヒナギクはできる限りのことをした。

そして、投票が終わり、運命の開票の時間……

投票箱から次々に表が出され、集計されていく。

目の前に見えているだけに、緊張感はかなりなものだ。

そして、発表のとき……

「大丈夫よ、ハヤテ君ならできるわ」

ヒナギクがそばで見守ってくれている。

ナレーターのところへ結果が書かれた紙が渡される。

いよいよだ……

「開票の結果

霞 愛歌、583票

綾崎 ハヤテ 529票

よって、霞 愛歌の勝利です」

えっ、そんな……

今の放送は聞き間違いだろうか。いや違っただろう。

ただ公然と突きつけられる事実を自分が認められていないだけだ。

しかし、認めたくない。認められない。

「僕は、、、僕は……………」

力なくしゃがみこんでしまったハヤテにヒナギクが優しく声をかける。

「仕方のないことじゃない。ハヤテ君はよくやったわ」

しかし、慰めるヒナギク自身もショックだった。こんなに応援していても負けてしまうというのは心苦しかった。

そこに、無常にも東宮が勝ち誇った表情でやってきた。

「それじゃあ負けた綾崎にはこっちの言うことを聞いてもらおうか」

そしてその空気の読めない口から言い渡されたのは、、、

「この選挙を棄権しろ」

ハヤテの中でその言葉が何回もこだまする。

絶望感のようなものが体中に充満し、ヒナギクとの約束を果たせなかったことへの悔しさも湧き出してくる。

ヒナギクはそんなのひどすぎると抵抗してくれているが、負けてしまった以上、男として要求は呑まなければならぬ。

「わかりました、それでは手続きを『ちょっと待って』」

突然、ハヤテの言葉がさえぎられた。

ヒナギクのほうを見てみたが、彼女もきよろきよろしているので違うようだ。

「そんなことする必要はないわ」

人の山から出てきたのは愛歌だった。

それがわかると、同時に疑問も出てきた。

「どうしてです？僕は負けたのに」

「そうだ、僕は正式に勝ったんだぞ！」

東宮も言っていることがわかっていないらしい。

・
愛歌は東宮の仲間のはずなのになぜこんなことになるんだろう・・・

「理由は簡単です。私は副会長で立候補しました。綾崎君は書記です」

・・・

会場内に長い沈黙が訪れた。

そしてどれくらい経っただろうか。沈黙の要請がいたるところを飛び回りつくしたころ、会場内によりやく失笑が生まれ始めた。

「じゃあ、僕はこのままいてもいいんですね？」

ようやく事態を理解し、その言葉に愛歌も笑いながらうなづく。

しかし、一人だけこれに納得しない人物がいた。

「そんなのありかよ！だって、綾崎は仮にも負けたんだぞ！」

まあ、人として正常な反応ではある。

明らかに、自分に過失はあるが。

「仮に、私が書記候補だったとしても、勝手にこんな勝負とかさせないわ。それに、今は書記候補が綾崎君だけだからやめてもらった

らこつちがこまるの」

もはや東宮にはむかう余地はない。

「うつつ、覚えてろよ、この馬鹿野郎っ—————!!」

半べそをかきながらどこかへ走り去ってしまった。

こうして波乱に満ちたなぞの決闘は幕を下ろした。

その後、選挙はいたって順調に進み、無事にハヤテ、ヒナギクともに当選した。

まあ、例によつて壮大なお祝いパーティーが行われたが、それはまたどこかでお伝えすることにしよう。

そして、選挙日の翌日。

翌日から働かされているのも考え物だが、ヒナギクは二期連続ということもあってなぜかハヤテもセットでさっそくお仕事をしていた。

「それにしても、本当にうまく行ってよかったです」

一時はどうなるかと思った。

愛歌さんは冗談が本当にきつい。

後で愛歌から聞いたが、勝負にならないことを知っていて東宮に協力したそうだ。

面白そうという理由で。

これからのハヤテの生活が危ぶまれる。

「まあいいじゃない！どんなことでも二人そろえば出来ない事なんて何にもないんだから」

他の生徒会員は、初めてでまだ講習中だったり、愛歌のように学校を休んだりで今、生徒会室は完全に二人のものになっている。

おかげでヒナギクのご機嫌度メーターもうなぎのぼりだ。

今の台詞も、最後にハートマークがつきそうなほどに。

無駄に立派なテラスから、春の鳥の鳴き声が聞こえる。

いかにものどかな風景で、これ以上ないほど平和だ。これを見ていると、ハヤテなりの理論でヒナギクの機嫌がいいのもわかってくる。

こんなところにいられるのもヒナギクさんのおかげなんだよな

ヒナギクは鼻歌を歌いながら、座高くらいまでたまった書類を片付けている。それでも二人で分けているんだが。

考えてみれば、ヒナギクさんが誘ってくれなければ生徒会なんて絶対やらなかった。

もしも、あるときヒナギクの誘いを断っていたらどうなっていたん

だろう。

熱くなったバトルも、マリアさんからもらった自由な時間も何もかもがなかったかもしれない。

そう考えると、自然と言葉が口から出ていた。

「ヒナギクさん、本当にありがとうございます」

ヒナギクはいきなり何を言うのよと、急に顔が赤くなった。

正直、かわいらしく思える。

「いままで、いっぱいお世話になってきました。だから、、今度は僕があなたを守ります。それでもいいですか？」

ハヤテは手をさしのばす。

ヒナギクは右を向いたり、左を向いたりして困った顔をしたと思ったら、今度は顔から蒸気が出そうなほど赤くなった。

そして、

「お願いします・・・」

二人の手は重なった

第一章
完

19話（後書き）

長かったようで短い、第一章完結です。

これは、プロローグ的なものでこれから第二章、三章でさらに盛り上がっていきます。

これまで読んで頂いて来た方、本当にありがとうございます。そしてこれからもよろしく願います。

それではまた二章でお会いしましょう。

p・s・s 近々オリジナルを書く予定です。そちらもよろしく願います。

二章：20話

「お嬢様、おはようございます」

ハヤテはいつもどおりナギを起こしに行った。

風の冷たさもだいぶ和らぎ、春もいよいよ真っ盛りと言う感じの4月下旬。

蚊という人類い最大の敵もなく、またすごしやすい気温のこの季節は誰もが心休まる。

しかし、そんな中、すがすがしいと言う言葉とはまったく正反対の状態の少女が一人いた。

予想通りといったら怒られそうだが、簡単には起きてはくれそうにないダラケ具合だ。

「昨日は学校いったんだから今日は休ませてくれ……」

分厚いドア越しに、ナギの眠そうな声が聞こえてくる。

まあ、この陽気での眠気は理解できなくもない。

本当に眠そうなのでハヤテは今日はゆっくり寝かせてあげようと思った。

「ダメですよ、ハヤテ君。あんまり甘やかすと後が大変ですよ？」

見破っていたのだろうか。マリアが良すぎるタイミングで出てきた。そして、鍵のかかったナギの部屋にマリアにのみ許されたレアアイテム「合鍵」で見事進入に成功した。

マリアは嫌がるナギに無理やり着替えをさせているようなので（音が聞こえるだけ、決して見てないですよ！）、ハヤテは朝食

の準備に向かうことにした。

しばらくして、あからさまに不機嫌な顔をしてナギが食堂に現れた。そんなに学校がいやなのだろうか。いまいち理由がわからない。

「家でゲームしているほうがよっぽど楽しいし、それに家で勉強するほうが効率がいいからな。あんな無意味なところに行きた

くなるはずがない」

そうですか・・・

でも学校は人間関係も学べる場所なんですよとマリアが言ったが、ナギはふんつと言ってスルーした。

「まあ、今日は特別に学校に行つてやるとしよう。もうすぐ沖縄行くしな」

やっと学校に行く気になってくれましたか・・・

ハヤテはひとまず安堵する。ここまでくれば後は楽勝だ。自然とデ
ンションもハイになる。

うん、沖縄か。さすがお嬢様だ。沖縄はいいところですよね！

・・・

「って、沖縄っ——————！！！！！！」

突然叫びだしたハヤテにマリアとナギの視線が集まる。

何なんだという二人の表情にハヤテは、

「そんなの聞いてないですよ！いつ行くんですか！？」

ナギは朝からうるさいなと言う顔で淡々とハヤテに伝える。

「もうすぐGWだろ？そのときに行くんだよ」

しかしハヤテの冷静さはまだ戻っていない。

「いや、だって僕土日とか生徒会の仕事とかありますし、いきなり
そんなこと言われても困りますよ！GWって行ったら明日じ

やないですか！」

壁にかけられたカレンダーには4/28と記されていた。

一応ハヤテも生徒会役員になり、きちんと毎日のように残って仕事
の山をヒナギクとともに片付けている。

他の役員もいるけれど、処理能力の違いから書類関係はすべて二人の仕事になっていた。

いや、最近はずべての仕事になってきているが。

そんなわけで、いきなり沖縄になど行けるはずがなかった。

しかし、ナギはまったく動揺せず、めんどくさそうに、

「それなら問題ない。前もってマリアに生徒会へ伝えさせておいた」

マリアは白皇出身で、学校に親しい人もいるのでちよくちよく学校に顔を出している。

今回も、マリアは直接伝えに行ったのだが、マリアはある生徒会と名乗った三人に伝えたらしい。

三人はOKを出してくれたらしいが、とても愉快で明るい人たちだったと言う。

まさか、これがとんだ事態を招くことになるとはだれも予想しなかっただろう。

「まっ、そういうわけだから」

といって、ナギは自室へと戻っていった。

「沖縄か」

ハヤテもかばんを取りに自室に戻っていた。

実は、ハヤテはいろんなところに行ったことがあるのだが（いい思いではほとんどないが）、南のほうへは行ったことがなかった。

沖縄って何がとれるんだろうとか、北の海での出来事と照らし合わせながら考えていると、そろそろ学校へ出発する時間になった。

ていた。

ナギを遅刻させるなんて執事としてあつてはならない行為だ。

そして、今日もナギと自転車で学校へ向かった。

学校では、当然周りの人はこれから自分が沖縄に行くなんてことは知らないわけで、みな平然といつも通り暮らしていた。

けれども、わかりやすい性格のハヤテはハイにならずにはいられない。

なんとなく周りと違う雰囲気をかもし出しながら一日授業を受けていた。

もちろんろくに授業に集中できるわけもなく（一応聞いてはいる）、あつという間に昼休みになり、気づいたら放課後になっていた。

「さっ、帰りましょうか、お嬢様」

ナギはというと、旅行というか、外出は慣れっこなのでまるで普段と変わっていない。

ただ、ハヤテの機嫌がいいのはナギにとってもうれしいことのようにだ。

朝までの不機嫌さは、そよ風に乗ってブラジルあたりまで飛んでいった。

ハヤテはナギの荷物を持ち、教室を出ようとしたそのとき、後ろから声をかけられた。

聞き覚えのある三人の女子の声だった。

「ハヤ太君、君は私たちに何か言うべきことがあるのではないかな？」

「かな」

美希、泉、理沙だった。

しかし、まあ、ハヤテは考えた。いったい何をこの三人に伝えなければいけないのだろう。

ひょっとして休み時間とかに何か伝言とかを預かったのかと、必死に記憶をたどってみたが、それらしきものはない。

いつたいなんなんでしょう。

「我われはだな、世界中に展開している情報組織からある情報を得たのだよ」

これまたえらく大げさなものが出てきた。

ハヤテはうそだと確信して、それはスルーすることにした。

「君は、我われという何にも変えがたい友人をおいて、自分たちだけ沖縄に行こうとしているのではないかな？」

美希がキラーンという効果音が良く似合う感じで、ハヤテに迫ってくる。

調べるのが得意だからか、今の美希のセリフにはキマッている感があった。

「何でそれを知っているんですか！」

ハヤテはハヤテで、大げさにリアクションした。

実際、なんでこれを知られているのか不思議だった。べつに大統領がどっかの家に訪問に行くからとかで秘密にしているわけでもないのだが、話してもないので知られているのは気持ちが良いものではない。

もしかして、さっきの情報組織とかいうものは本当なのだろうか。

ここは白皇である。美希や泉も大金持ちだ。そんなものを所有して

いる可能性を否定しきれないところがある。

ハヤテがそんなことを考えて、顔から汗をたらしている中、ナギは全てがわかったらしく、やってしまったといった顔になっていた。

わかったならハヤテに教えてあげなさいな。

ナギは仕方なそうに解説を始めた。

「多分これであっていると思うがな。昨日、マリアが学校に直接、生徒会に沖縄のことを伝えたって話しただろう。そのときマリアが明るい三人に伝えたって言っていた。多分、それはこの三人のことだろう。違いますか？」

三人娘はさすがといった感じの表情だ。

しかし、驚いたりしている感じはない。当てられるのは予想済みのようだ。

「それがわかれば話が早い。我われと+@と一緒に沖縄に連れて行くんだ」

はあ、展開的に予想はしていましたが・・・

ハヤテは絶句するしかなかった。ちゃっかりにもほどがある。特にこの三人はラーメンのメンマのように簡単に追加できるものではない。来るからにはラー油のように入れすぎると大変なことになる。そもそもそんなこと自分に決定権があるわけではない。

まあ、その辺は三人娘もわかっているようで、ハヤテではなくナギ

に言っているようだ。

だが、ナギもそんな簡単にOKを出すはずがない。

せっかくのハヤテと二人つきり作戦が台無しになってしまふ。

しかし、それもまた三人娘には想定済みのもので、ナギを近くの茂みに連れ出し、なにやらひそひそと伝えている。

ハヤテは完全に蚊帳の外だ。

カップラーメンが一個出来るかできないか位して、ようやく四人は茂みから出てきた。

何を吹き込んだのか知らないが、ナギはどうかやう三人を連れて行く気になったらしい。

よかったらナギの手なずけ方を教えてもらいたいハヤテだが、そんなことを聞いている暇もなく、十分な成果を挙げられた三人娘はさつさと撤退してしまった。

屋敷に着くと、ナギはさつそく旅行の準備を始めた。

まあ、結局はナギが散らかしたものをマリアとハヤテが片付けるという無駄骨に終わるわけだが、本人が気づくまでこれは続くだろう。

食事前に、思い出したようにナギは帰りがけに起こったできごとをマリアに伝えた。

ハヤテは急に人数を増やすなんて無理だと思っていたが、予想に反してマリアは簡単にOKを出した。

マリアによると、飛行機も専用機だし、行く予定のあるところも一通り仕切つてあるので特に問題ないということだった。

まさにやりたい放題といった感じた。これによっていったい何人に影響が出てるんだか。

そんなこんなで、波乱の幕開けとなりながらも全員が就寝についた。それぞれ心の中に別々のことを思い浮かべながら舞台は翌日へと移っていった。

21話

「なんだこれ……」

舞台は翌日、某国内線最大の空港。ハヤテ一同はロビーの一部をVIP席として貸しきってたむろっていた。

まあ、これだけでも驚くべきことだが、ハヤテが驚いているのはこのことではない。

ハヤテが見つめる先には大きな窓があり、さらにその先には飛行機のターミナルが広がっている。

さらにピンポイントでハヤテの視界をお届けすると、待機している飛行機のひとつに”SANZENIN”という文字があった。

さらにその飛行機はつい先ほど、同じく”SANZENIN”とシヤッターにでかでかと、しかしなぜか上品さが漂う感じで書かれている倉庫から出てきていた。

あれ、ここって羽 空港だよな……？

毎度のことながら三千院家の財力には限界というものが見えない。

凡人のハヤテの想像し得ないことが当たり前のように行われている。城を持っていたり、練馬の半分くらい所有してたり……

ハヤテは今まで見てきたものの値段を計算してみて、その天文学的な額と、自分の一年暮らすのに必要な額の差に驚愕していた。

そんなハヤテを尻目に、続々と集まってきた今回のメンバーがだんだんと騒がしくなってきた。

騒がしくするというと三人娘のことを連想する人が多いと思うが、今回ばかりは彼女らだけではない。（結局入っているけど）

金髪ツインテールのちびっこいのと、桃色完璧超絶美貌少女が、いかにも子供っぽい感じで言い争っている。

「なんでお前がここにいるのだ！」

「あたしだって知らないわよ！美希たちに言われてついてきたらいつの間にかここにいたんだから！」

言うまでもないが、ナギとヒナギクだ。

どうやらなんでここにヒナギクがいるのかもめているらしい。このままある二人の描写をしていても解決するまで時間がかかりそうなので私がすることにしよう。

今回の沖縄の旅を三人娘たちがナギに飲ませたとき、契約内容は”我われと+@と一緒に沖縄に連れて行く”だったのだ。

しかし、ナギとしてはできるだけ少ない人数で行き、少しでもハヤテと一緒にいる時間を増やしたい。そもそもそのとき浮かれていて、誰か他に来るといふのは聞こえていなかった。

さらにヒナギクは、ナギを説得した後、新型新幹線をも越えるかのごとく猛烈な勢いで家に押し寄せてきた三人娘から、一緒にどこかへ行こうと誘われ、（ハヤテが一緒というのが味噌）とりあえず泊まれるだけの仕度をしてやってきた次第だ。

当然、ここまでやって来た以上、やすやすと帰るつもりはない。

そんな感じの理由で、彼女たちは争っていた。二人の性格は前に語られているように似通っていて、運の悪いことにツンの部分が似てしまっている。

一度買ってしまった県下は理由がなくても負けられないみたいなプライドが育ってしまったているのだ。

当然、この二人を手なずけるには相当なスキルが必要となる。しかし、この場にはそれだけのスキルを持ったスーパーメイドさんがいるのだ！

「はいはい、飛行機の席も旅館の部屋も余分にありますから大丈夫ですよ？」

文章にすると一見何の変哲もない言葉だが、実際に名まで見ると迫力というものがあり、なぜか逆らうことができなくなる。

顔は笑顔のままだが、中身は夜の歌舞伎町のやくざっていうたえが一番しつくり来るように思う。

ナギとヒナギクも、その一言で冷静さを取り戻し、その場はひとまず片付いた。

さて、なんだかいろいろあった気がするが、まだ飛行機にも乗っていない。

一応自家用ジェットといえどもあまり待たせるわけにも行かないので、とりあえず飛行機に乗りう。

こうして一同7人はそろそろと搭乗口へと向かっていった。

22話

「海だーーーー！！！！」

見渡す限りの青く、透き通った海は三人娘でなくてもはしゃぎたくなるほどきれいだった。

ここは、那覇空港から小型機に乗り継いできた小さな離れ小島だ。

しかし、本島からはそう離れてはなく、しかし海は百倍という数字も大げさではなく思えてくるほど美しい絶好の地理環境だった。

島は丸ごと三千院家が買い取り、一部リゾート施設として開放しているところでもある。

約一名を省いて、狭苦しい機内から降りて海の景色を楽しんでいる中機内で暴酔している人がいた。

想像は難しくないだろう。ヒナギクである。

2時間弱ほどの間、誰とも会話することもなくただひたすらに眠っていた。そうしないと精神的に持たないからだ。

他の人がヒナギクに気づかず外に夢中になっている中、マリアだけが起こしにいった。

着きましたよ、ヒナギクさん

「へっ、もう着いたの？」

起きてみると周りにはもう誰もいなかった。

しまった、置いてかれた？

寝起きで頭の周りが遅いのか、マリアがお越しに来ていることも忘れて一人で焦っていた。

マリアはかわいいなあと思いながら、ヒナギクを外へつれていった。

南の海を初めて見るハヤテは、ナギの手を引っ張り海ですよ海ですよとわかりきっていることを連呼するほどかなりテンションが高くなっていた。

ハヤテは今にも水着に着替えて飛び込んでいきそうだったので、マリアがすかさず止めに入る。

「まずは、お屋敷に荷物を置いてからこれからの予定についてお話ししますね」

浮かれきっていたハヤテはそれでようやく気がついた。

よく見てみると両手にはマリアとナギと自分の荷物がこれでもかというほど釣り下がっている。大事な荷物を海水浴させてしまうわけには行かない。

久々に沸いてきた子供心がまだうずいているが、ここは執事たるものの、己を優先しては話にならない。

ハヤテを引きつれ、まだ四月だというのにやけに肌に突き刺さる日差しから逃げるように、一同は空港から車で15分ほどの屋敷まで向かっていった。

「ここって、本当に沖縄なのか？」

練馬にある屋敷と外見が90%は同じ屋敷がそこに建っていた。

違いといえば、庭に整然と飾られている置物がシーサー中心になっているくらいだろうか。

マリアによると、伊豆でもそうだが、なぜかデザインのとかいうのがあって、同じデザイナーを起用しているとか。

なんでも同じほうが精神が落ち着くとかだそうだ。体の弱かったナギの母への心遣いだろうか。

そんな感じでさっそく旅行気分が薄れた中、一同は屋敷の中へと入っていった。

予想はしていたが、やはり中も同じ構造だった。違いといえばエントランスホールにでかでかと守礼門の絵があることくらいだろう

か。

中は外の景色が目に入りにくい分、余計に練馬にいる気がしてならなかった。旅行気分が一気に盛り下がる。

そんな気持ちを察したのだろうか、マリアは屋上に集まるようにいつて、さっそくお茶の準備へ向かっていった。

ちなみに屋上は沖縄限定だそうで。練馬にはそんなものはありません。

屋上に上がると、整然と世界を照らし続ける太陽が出迎えてくれた。

まだ暑いとはいえない空気と中和して、とても過ごしやすい。潮の香りも、しっかり引きこもってしまった気分を再びかきたててく

れている。

いつからか始まった世間話が盛り上がり、すっかりどれくらい経ったか忘れたころ、マリアがお茶とお菓子を持ってきた。

「じゃあ、これからの予定を話しますね」

一同はマリアも回りに丸くなって集まる。7人集まると自然とこうなってしまうのは人間の本能だろうか。

「今日はこれからレジャー施設で一日つくすということにします。そうですね、二班くらいに分かれて遊びましょう」

それから付け加えて、三千院家の経営するお店だからお金は気にしなくていいですよと言っていた。

さすがとしか言いようがない。

ちなみにこの島には小さい遊園地、カラオケ、ゲームセンター等、そこら辺にありそうなものはほとんどそろっている。

普通にぶらぶらしているだけでは到底全て回りきれないので、いかに効率的に回り、なるべく多く遊ぶかといういかにも貧乏症候群な考えにふけっているハヤテをよそに、ナギとヒナギクは再び対立の火花を散らしていた。ただ、今回は肉体的勝負ではない。

自分の望みをかなえるための強い意志が、お互いに反発し合い、目に見えないオーラとなって周囲に漂っていた。

そもそもなぜこの二人が対立するのか。それはさっきのマリアのセリフにある。

二班くらいに分かれて遊びましょう

そう、ハヤテと一緒にいられない可能性があるのだ。確立1/2・

彼女たちの目的はほとんどハヤテにあるといっても過言ではないので、これは今日一日の満足度に大きく左右する要素である。

おそらくマリアのことなので、自由に分かれることにするだろうが、それではあまりにも不確定要素がおおい。他の誰かがハヤテとくっ

つきたがらないという保証はないのだ。

とくに三人娘あたりは知っていて邪魔する可能性が高い。

ここは勝負で誰かが決める権限を持つようにするのが好ましい。

「とりあえず、何かゲームでもしてチームわけしないか？」

言い出したのはナギである。

他の人たちも別に不都合はないので同意する。

さて、ここまで決まったのはいいが次なる問題がある。どういうゲームをするかである。

スポーツ系であれば、実力さえあれば勝てるが、なければ勝ち目はない。

逆に室内系のゲームならば思考の働きのものをいう。まあ、これも一種の実力だがそれはどうでもいい。

ナギとしては、運動では確実にヒナギクには勝てないのでそれは避けて通りたい。

まあ、そこはフェアな精神のヒナギクなのであっさりと認めてもらえた。かといってヒナギクが不利になるかというと、そういうこともなく、十二分に頭の切れるヒナギクなので、ナギ同等に戦うだろう。

他の人も、メンバーはほとんど女の子で、運動好きでもないのだから賛成してくれた。

ということで、全員で大富豪をすることになった。

一位の人が班割の決定権を与えられる。

一同は、飽きずにに降り注ぎ続ける強烈な日光を受けつつ、マリアが用意してくれた飲み物に癒されながらカードを配り始めた。

さて、ゲームを始める前にルールの説明をしよう。

革命あり、8切りあり、階段あり激縛（ 1 ）ありのありありルール。

地方による特別なルールは一切なし。階段革命等もなし。二上り、ジョーカー上がりもなし。ジョーカーはスペードの2に負ける。

本ゲームはこれを基本に行うものとする。

長々と説明しているうちに、ハヤテが慣れた手つきですばやくカードを配ってくれたので、さっそく始めることにする。昔働いていた店の芸だろうか。

ちなみにこれにはマリアとハヤテも参加しているので総勢7人である。

「あつ、私いつちば〜ん」

一番手、ダイアの3を持っていたのは泉だった。

順番はそこから時計回りに回る。順番は泉 美希 理沙 ヒナギク
マリア ナギ ハヤテとなった。順番が最後のハヤテは見事な不幸っぷりである。

泉はまず、ノーマルにクローバーの5を捨てる。うん、実に普通だ。これなら革命する気があるとか、手札の強弱とかも読み取られる心配はない。

それを見た後続も、何も仕掛けずに無難に流していった。結局ナギのハートの13で流れた。

そんな感じで進んで進んでいき、時間は後半に入ったところ、勝負は山場を迎えていた。

今のところ、まだ誰も革命はしておらず、消耗戦になっていた。だが、ここに来て弱いカードのなくなった最強の手札の持ち主となった人が数人いた。

考え抜かれたカード選び、パスで、その人たちの手札は7人でやっているとは思えないほどすごい役でできていた。いかさまが疑われるが、そんなことをする人たちではないのはわかるだろう。なんと
いう強運だろうか。

まず、見た目でヒナギクとナギが手札が良いのがわかる。あきらかにこれは勝ったという顔をしている。本人は自覚していないのだから

うが。

見た目で負けそうなのもすぐにわかる。ハヤテ、泉、理沙は苦笑いが染み出している。手札が良くなかったのだろうか。三人とも特別へまはしていなかったのだが。きつと運のいい人たちに運を吸い取られたに違いない。かわいそうに。

さて、ここにきて表情からまったく何を持っているのかわからない人の一人マリアが勝負を仕掛けてきた。

クローバーの1、2、3のストレートだ。これでマリアの残り枚数は2枚。勝利に大きく近づいた。

しかし、この程度でくたばるほど弱い集まりではない。

ナギは余裕綽々といった感じでスペードの2、3、4のストレートで返した。

なんだかできすぎているくらいにできているが、それはナギの執念がそうさせたのだろう。人間は強い。

ただ、それにも負けない強さを持った人間がもう一人いた。

「あ、それ流さないでね。はい、ハートの4、5、6のストレート」
ヒナギクだった。勝ち誇った満面の笑みで、ナギの驚愕する顔を楽しんでるように見える。

カードが無事流れると、その笑顔は真夏に咲くひまわりのように弾けんばかりのものになった。

そして、勝利を確信しているのか、そのままの表情でハートのAを出した。決して決め手になるものではないが、十分にかつ確立のあるカードである。

しかし、浮かれてはいけない。次はマリアの番だ。マリアは無表情のまま、少しの間何もせずにした。

ヒナギクの望みどおり「パス」という言葉が出るのかとその場の全員が思った。しかし、その期待とは裏腹にあるカードが出された。

スペードの2。

ヒナギクの望みははかなく散った。マリアの振り下ろした冷酷な鉄斎によって粉々に砕け散った。どうもマリアは勝負事で手を抜くのは止めているらしい。おそろしく冷酷で強い。

その場の全員がマリアの勝利を確信した。ナギも2を持っていたが、同じ数字では意味がない。ハヤテや泉はそのカードと同等の強さを誇るカードを持っているかさえ危ぶまれる。

あきらめたように、ハヤテがカードを流そうとしたとき、

「私はまだパスとは言っていないぞ」

それを制止する人が現れた。その手札はまだ5枚も残っている。いたいこんな人に何ができるのか。

「これなら、それに勝てるんだろっ?」

白いランプに浮かび上がっている怪しい格好の怪しいポーズの人間が、そのカードを嫌でも識別させる。

その場に出しだされたカードは、どこから見てもジョーカーだった。

美希だ。

さっきまでの無表情から一転して、してやったという表情に変わっていた。

メンバーたちは久しぶりにやるということで、すっかりジョーカーという存在を忘れていた。そして思いだした。まだ勝つチャンスは自分たちにもあるかもしれない。

ジョーカーはスペードの3に弱い。

思い出すと同時に、メンバーは自分の手札にスペードの3がないかカードに穴が開くほど探した。手札が重なっていないかカードをこすってみたりもした。

だが、誰の手札にもなかった。

それもそのはず、ナギがストレートを出すときに、役として使ってしまったのだから。

「うおーーーーー！！！！私はなんてことをしてしまったんだーーーーっ！！！！」

まあ、それは仕方のないとき。きっと。

結局スペードの3がない今、最強のカードとなったジョーカーは流されていった。

そして、美希のターン。出されたカードはAのペア。

「そんなの出せるかーーーーっ!!!!!!」

まあ、ナギとヒナギクとマリアはカードの枚数上、2を2枚持っていることは絶対じゃない。持っていたら負けになるからだ。

手札の枚数に余裕のある方々の方は、今度は2なんて強いカードとはとうてい縁のない人たちだった。

そして、それも無抵抗に流される。

次の美希のターン。Jのペア。

「じゃあ、これで上がりだな」

あっさりと勝ってしまった。おそらく美希のことだ、後半で一気に上がるように作戦を立てたのだろう。大成功だ。

こうして、ハヤテをかけた熱い思いのかかった戦いは幕を下ろした。

1：通称ゲキシバ。カードをダブルで出すとき、前に出した人が

たとえば「スピード・クローバー」だった場合、自分も「スピード・クローバー」を出せば、次の人は「スピード・クローバー」しか出せなくなるルール。私の地域では一般化しています。

22話（後書き）

さて、沖縄編もいよいよ幕開けです。
自分でもどうなるかわからない不安定な作品ですが、面白くなるようにがんばります。

（祝五万HIT感謝読みきり小説）番外編：三千院ナギの後悔（前書き）

この小説の本家投稿サイトで10000HITを記録したので、記念に書いてみました。

私が見ていて一番人生が変わったなと思った作品をハヤテ化してみました。けっこう原作は感動できます。知っている人は知っていますよね？

とりえず、読んでみてください。

（祝五万HIT感謝読みきり小説）番外編：三千院ナギの後悔

三千院ナギの後悔

「お嬢様、朝ごはんですよ」

とある日の朝、なかなか着替えるといっってから部屋から出てこないナギをハヤテは呼んだ。

外は快晴、過ごしやすい気温の日なのだが、ナギは眠そうにずるずると部屋から出てきた。2度寝でもしていたのだろうか。

なにはともあれ、早く食べてもらわないとせっかく作った朝食が冷めてしまうので、とりあえず食べてもらう。

今日は、いつもと違って和食で、ご飯、味噌汁、魚の煮物などが美しくテーブルを飾っている。

いつから定着したのかわからないが、朝食担当はハヤテなので、これもハヤテお手製だ。だからなのかナギは前よりもちゃんと食べるようになった。なんかマリアがかわいそうな気もするが、ナギが食べるようになっただけで満足だという。さすがメイド。

ということで、ナギは今日もご飯を食べる。残さず食べる。

「いじさうさま」

どこに入るのか、朝にしてはやや大目のボリュームだったご飯を全て食べきってしまった。

まあ、量に関しては本当は朝に一番食べるのが体に良いということであれに配慮した結果なのだが。

そんなことよりも、前は昼間で寝て朝食は食べないのが日常茶飯事だったのに、これは驚くべき進歩だ。

ナギもそれを自覚しているらしく、どこか誇らしげな顔をしている。もっと他に威張ることはないのだろうか。

しかし、満足げに自室へ帰ろうとするナギに声がかかった。

「お嬢様、お茶碗にご飯粒が残っていますよ？」

見てみると確かに2・3粒お茶碗にくつついている。しかし、それがどうしたのいうのだろ。そんなのあたりまえだろ？

「ご飯は最後の一粒まで食べなくてはダメです。おコメ一粒一粒には農家の方の苦勞が沢山詰まっているんですよ」

だからなんなのだ？

「お米の気持ちを考えてみてください。苦勞して作ってもらって、やっと売れて炊いて、さあもうすぐ食べてもらえると想ったら自分だけ食べてもらえなくて残飯行きなんです。理不尽でかいそうだとおもいませんか？」

いや、思っけどね……

お米に感情なんて存在するほど複雑な神経組織があるわけないし、そんなこと考えてやる義理もないだろう。

ということで、ナギは適当に聞き流してスルーすることにした。

ハヤテはやけに必死そうに説得していたが、ナギが自室へ帰りだしたところであきらめて食器の片付けに移った。

そんなこともありながら、今日は平日なので学校へ行った。

毎度のことながら、ハヤテの愛用、お買い物自転車で二人乗り（違法です）で学校へと向かった。

宇宙人が学校を占領したり、ヤギが校舎内を駆け回ったり特別なこともなく、初めの一ヶ月で飽きたいつも通りの時間割を着々とこなし、今日も暇だったな〜と思っていたら放課後になっていた。

今日は特別にやることもなかったのでナギとハヤテは一緒に屋敷へ帰った。

今日という日は本当に何もすることがなく、某情報フレア創出女なら水色男を召喚する勢いであった。

ナギにはそのような特殊能力はないので、八つ当たりというか暇つぶしといった感じでハヤテとゲームをして、気づいてみれば日が暮れているという感じで3/4が終わった。

そんな感じで夜になり、三千院家は就寝の時間になった。

「おやすみ、ハヤテ」

眠い目をこすりながら、ナギは部屋の扉を閉めながらいつもの決まり文句を言う。ハヤテもそれに答えて、それを機に、三千院家は静寂に包まれていった。

夜空を見れば、東京だというのに、練馬の半分以上を所有した上、領土の半分以上を森林化しているため、星たちの姿は都会という場所を忘れるくらいきれいに見える。

あれは何座だろうなどと考えさせる暇もなく、星たちに淡い光は屋敷の主人を深い眠りへといざなった。

「ん？どこだここは？」

ナギの前には、一面の田んぼと、ところどころに点在する古ぼけた民家が広がっていた。

青々とした空は、高い建物にさえぎられること無くどこまでも続いている。悪くない景色だ。

しかし、いったいなぜ自分はこんなところにいるのだろう。

とりあえず、ここがどこなのか確かめようと、今たっている田んぼから出ようとしてみた。

しかし、体が動かない。

動かないのは体全体だが、とりあえず動くのに最低限必要な足に視線を向けてみた。

しかし、それを見ておもわずナギは絶句した。

「田んぼから生えてるのって、稲だよな」

自分の足があるはずのところには稲が生えていた。それだけではない。手のある場所には葉っぱが、体は茎になっていた。

何度見てもそれは変わらない。

「私、稲になった？」

なぜか、今の自分の状況を納得して受け入れることができた。

多分、ここが現実世界でないことを無意識に自覚しているからだろう。

とりあえず、ナギは動くことができないので、周りを観察していることにした。というか、それ以外にすることがない。

しばらくすると、時間がめまぐるしく過ぎていくような感覚にさらされた。

あつという間に昼になり、夜になり、気がつくと季節が変わり始めていた。

初めは小さかった自分（稲）も、すすくと成長していった。

しかし、何の努力も無く勝手に育ったのではなかった。

田んぼに生えた雑草を農家の人が毎日欠かさずに取りつけてくれた。そのおかげで隣の稲と十分なスペースが確保され、居心地が良かった。

また、梅雨に入ると、どこから勝手に出てきた害虫を農家の人が農薬を使わず、手で取ったりいろいろな対策をしてくれた。

この二つは文字にすると簡単のようだが、実際はすごく大変なことだった。ナギは稲となってそれをずっと見守り続けた。

「そんなにがんばらなくても良いものを……」

7月になり、いよいよ本格的に夏になった。

降り注ぐ日光を浴びて、稲は今まで以上にすすくと育つ。

同じようにすすくと育ってしまった害虫たちを、農家の人は一生懸命退治してくれていた。

見たところ、社会人なら定年していそうな方々だった。前傾姿勢で腰の負担は軽くは無いだろうに、一つ一つ丁寧に世話をしてくれる。ナギには親も同じ存在に感じた。

8月になると、ある事件がおきた。

台風の上陸だ。ようやくここまでぞだった稲たちを暴風雨が襲った。

「うわああっ！！！」

ナギも例外なしに襲われる。しかし、沢山日光を浴びてぞだった茎はそんなに柔ではなく、なんとか持ちこたえていた。

しかし、ナギの隣の稲から悲鳴が聞こえてきた。

「もうだめ・・・おじさん、おばさん、ごめんなさい・・・」

ナギの隣の稲は周りと比べると少しだけ細く、繊細な子だった。

細い茎は強風でしなって、もういつ折れてもおかしくない状況だ。

「何弱音を吐いている！ここで絶えなくてはいままでの努力が無駄になってしまふんだぞ！あともう少しだけがんばれ！！」

ナギは動けないので支えてあげることができなかった。そのかわりにありったけのエネルギーで応援した。

それこそ今まで経験したことも無いほどの体力を使った。声がかれるほどに。それしかできなかったから。

しかし、そんな努力も自然のパワーの前では通用しなかった。

「ごめんね、私の分まで、おいしく食べてもらってね・・・さようなら・・・」

その子は最後に微笑を浮かべると根元から力なく倒れてしまった。

その顔は申し訳なさそうに、静かに目を閉じていた。

「おい・・・・・・・・しつかりしろー！ーっ！！！」

ナギの投げかけもむなしく、その子から二度と返事が帰ってくることも無かった。

そのときナギは誓った。この子の分も自分はだれかにおいしく食べてもらって幸せにすると。

翌日、台風一過で温かく、とても過ごしやすい日だった。

しかし、昨日の今日とても晴れやかな気分にはなれない。

今日も農家のおばさんが草を狩りに来てくれた。しかし、いつも見えているおじさんの姿が見えない。

近所の稲に聞いてみると、どうやら昨日の台風の中、心配になって田んぼまで来てくれていたらしい。

それで風邪を引いてしまったというのだ。

「どうして・・・みんなそこまで・・・」

ナギはそのとき自覚した。自分は自分ひとりでできているわけではないことに。

農家のおじさんおばさんたちはもちろん、昨日のあの子の分まで自分には詰まっているのだ。

「お米一粒一粒には、大切なものがいっぱい詰まっているんだな」

そんなことを考えていると、収穫の時期がやってきていた。

結局、田植えのときの苗の8割くらいが無事に収穫された。

残りの二割の苗は、台風や虫や病気にやられてしまっていた。

あのこと同じことになった人がそんなにいると思うと胸が苦しくなる。

「私は、みんなのためにおいしくなる！」

ナギの決意は固いものになっていた。

自分にかされた責任は、果てしなく重い・・・

気がつくと、お釜に入れられる作業に入っていた。

その作業をしているのはハヤテだということに、今のナギは気づけなかった。無理も無い。ナギには大きな目的があるのだから。

みんな・・・私はこれからみんなへの誓いを果たす・・・

スイッチが入り、どんどん自分が水分を吸って大きくなるのがわかる。

やっと食べてもらえる

そう思うといても立ってもいられない気持ちだ。

そして、いよいよお茶碗へと移される。

他の米粒たちも、今のナギにはとても輝かしく見える。一つ一つにあるそれぞれのエピソード・・・

それはお米だからとか、そういう理屈では計り知れないものだ。

ハヤテによって盛り付けられたお米たちは、とてもおいしそうになっている。

お米たちもうれしそうだ。

そして、味噌汁や煮魚と一緒に食卓へと出された。

「いただきます」

いまから自分を食べてくれる主人はずいぶんやる気の無い声だった。

どこかで聞いたことのある声だったが気にしないことにした。

ナギは、お茶碗の下の方にいたため、いよいよ最後の一口というところでようやく姿を現した。

そして、箸にすくわれた。

そうだ、そのまま口に運んでくれ

そして心から思うがいい ああ、おいしかったな と

しかし、いよいよ口に入ろうとしたとき、悲劇が起こってしまった。

ナギのお米が箸から零れ落ちてしまったのだ。しかし、下に落ちることは無く、お茶碗の中に無事着地した。

「はー、本気で危ないところだった。まあいい。早く私を食べてくれ！」

しかし、主人は箸を置いて水を飲み席を立とうとしていた。

おい、何を考えているんだ！なぜ私を食べないんだ！私はここにいるんだぞ！

ここまで来て、みんなの分まで食べてもらえないなんてあったまるか！

そんな思いがナギの中を駆け巡る。

そんなナギの気持ちが伝わったのか、もう一人のご飯を作った人が主人を呼び止めた。

熱心にご飯を残さず食べるように説得してくれている。

しかし、主人は食べることなく去ってしまった……

ナギは、その恩知らずを睨みつけた。なぜ食べないのかわからないこんなにもみんなの努力が結晶して、すばらしいお米に慣れたというのに。

そして、その矛先にいる人物に気づいて絶句した。

「あれって……朝の私じゃないか……」

ナギは今気が着いた。朝、自分が何をしていたのかを。

丹精込めて作られたお米を残してなんとも思わずに出て行ってしまったことを。

私はなんてことを・・・・・・・・

主人に食べられることの無くなった食器は、そのまま流しへ持っていかれた。

私はこんなことをしているわけにはいかないんだ！

あのこのためにも、絶対にっ！！！！！！！！

しかし、願いは届かぬまま残飯入れに落ちていった・・・

「うわあああ——！！！！！！！！！！」

ドドドドドドドド

目を開けると、いつも365日見ている自分の部屋の天井が目の前に広がっていた。

「あれ、ここは………?」

いつまでもなり続ける目覚ましを止め、ようやく動くようになった体を確かめるように動かしながら周囲の状況を確認する。

窓に目をやると、柔らかな日差しと小鳥のさえずりが朝だということを知らせていた。

「夢……だっただのか?」

ようやく頭の中の整理がついてきた。今までの世界は自分の作り出した幻……

しかし、全てを幻と決めるけることはできなかった。今まで見てき

たものはおそらく本当にあることだろう。特別にありえない要素など得に無かった。

そして、また自分の侵してしまった罪を思い出した。

私はなんてことをしてしまったんだ……

身をもって知ったお米の大切さ。その偉大さがわかる今だからこそ、犯してしまった罪の重さもわかる。

もうやってしまったことの取り返しはできない。過去に戻ってやり直せるほど世界は甘くは無い。

「ならば……」

ナギは決意に満ちた目で、どこまでも透き通る青空を見上げた。

「おはようございます、お嬢様」

食堂に行くと、いつも通りハヤテが朝食を作って待っていた。

いつもは迎えに来るまで部屋にこもっているので、自分から来たことに驚いているようだった。

朝食のメニューを見ると、今日も昨日と同じ和食だった。

三千院家のメニューは一週間ほど同じタイプのメニューが出るのでこれは予想済みだ。

和食に欠かせない白米も、きちんと煮魚の隣にあった。

ナギはその姿を見ると、すこしほっとした。

朝食を食べている間、ナギは一言も話さず、黙々と食べた。

その雰囲気は、明らかに普段と違うもので、マリアとハヤテは少し戸惑った様子だった。

ナギは、そんなこと御構い無しに、丁寧に、味わって完食した。

ナギが席を立つのを見ると、すかさずハヤテがお茶碗やお皿を下げにきた。

そして、お茶碗の中身をみて驚いた。

「お嬢様！今日はご飯を残さず食べてくださったんですね！」

そう、米粒ひとつ残さず食べきっていた。

ナギはああとだけ言って、そそくさと歩いていってしまったが。

しかし、ナギの表情は硬い誓いにあふれていた。

もう、どの子（お米）も残しはしないさ

三千院ナギの後悔
　　く完く

（祝五万HIT感謝読みきり小説）番外編・三千院ナギの後悔（後書き）

どうだったでしょうか？

感想等がありましたらいただけると幸いです。

23話

「何なのだ――！！」

とりあえずナギとヒナギクはそう言っておくことしかできなかった。

こんなに大事な勝負だと言っているのに、こんなにあっさり負けるのは納得ができない。納得するものかどうかは気にしている場合ではない。それなりに頑張ったはずだ。

しかし、騒いだからといって事実が覆るわけではない。実際に美希は不敵な笑みを浮かべて二人を眺めたままだし、それは彼女たちも良くわかっている。

ということ、ささっと気持ちを切り替えて現実に効果のあることをしよう。こういうときに人生の勝敗が決まるといっても過言ではない。

さて、今一番やらなくてはいけないことは何だろう。

多分それはマリアを根回しして無理やり勝つとか、ハヤテに直接頼むとかではないだろう。

少女たちの頭の中に浮かんでいるのはただひとつ。

美希を落とすこと

ハヤテに悟られたくない、という乙女心が作用している中では、これ以外に良い選択儀が見つからなかった。見つかったなら教えてあ

げて欲しい。

かなり難航することが予想されるが、二人はこの作戦に移ることにした。

さて、決まったはいいが、作戦らしい作戦が決まらないのはヒナギクであった。

美希は、性格上弱みを握られるとあとで悪用することは目に見えている。今弱みを見せるとあとでどんなハンディを背負うか想像しなくてもわかる。

かといって、ハヤテと一緒に班にして欲しいという意思を伝えないわけにも行かない。葛藤だ。

こんなとき、ハヤテを見てみると、のんきというか、気ままに泉たちと世間話で盛り上がっていた。

こつちがこんなにがんばっているのにと言いたいところだが、それがいえないのは前記の通り。ここはがまんしてじっくり考えよう。

しかし、そんなヒナギクを尻目にナギが先に行動に出た。

「あの、花菱先輩。班分けの件なんですけど……」

ナギの提案はこうだった。

沖縄は四月末期といえども日差しも強く温かい。いや暑いというレベルでもあるだろう。

普段、日差しを浴びないナギはあまりこういう環境は得意ではない。ということで付き添いの使用人が一緒に班にいて欲しいというものだ。

それを横で聞いていたヒナギクは焦った。そんな手があったなんてことは予想も出来なかったし、さらにその作戦に穴が見つからない。

これはまずいわ！

さらに深く考え込むヒナギク。

美希はそんなヒナギクを、一般人には見たかどうかくらい微かに視線を送り、それからナギに返答した。

「いいだろう」

ガガガガン……………

まさしくそんな効果音がぴったりな感じのショックがヒナギクを襲った。もはやリアクションなどしている余裕は無く、シュンとして俯いてしまった。

しかし、美希はまだしゃべり終わっていない。

「じゃあ、ナギリんはマリアさんと同じ班で」

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

え？

ナギとヒナギクは同時に同じ言葉を放った。

ただし表情はまったく正反対となっていた。ナギは愕然と、ヒナギクは喜び混じりの驚きの表情だった。

「あの、ちょっとそれ、どういことですか？」

納得できないのはナギだ。だって、ハヤテと一緒にの班になるような言い方を・・・

あっ！！！！

ナギは気づいた。

「だって、使用人と一緒にいっていったじゃないか。だから優秀なマリアさんと一緒にいいんだろ？」

そう、使用人はこの場に二人いたのだ。あまりにも熱中しすぎていて、冷静に物事を見ていなかったようだ。それには例外なくヒナギクも含まれる。

ということ、こわいわれてしまっでは完全にナギは太刀打ちできない。作戦ミスだね。

これで、残る有権者はヒナギクのみとなった。このチャンスを生かすも殺すもヒナギクしだいだ。

しかし、

「じゃあちよつと集まってくれ。班割を決定する」

という美希の一声で、ヒナギクも考えているうちにタイムリミットを過ぎてしまった。

美希の指令に従い、一同は丸く集まって、静かに班割の発表を聞くことになった。

23話（後書き）

さて、時間が無いので今回は短めです（今まで基準だと普通？）

めずらしく後を引く感じで終わってますが特に意味はありません（笑）

とりあえず、次回も読んでください。

24話

「はい、じゃあ良く私の話を聞くように」

美希は、一度わざとらしく咳払いをし、よくあるえらそうな口調でそういった。家系がそうだからかわからないが、なんだかそんな態度が美希らしいような気がした。

しかしまあ、よく総理大臣の娘がこんな子に育ったものだ。いったいどんな教育をされたのだろうか。小さいころにヒナギクにでも影響されたのだろうか、想像を許さない性格である。

そんなことはさておき、美希はさつさと発表を始めた。

「二組に分かれてもらうから一組目は……」

発表された班分けはこうだった。

一斑：ナギ、マリア、理沙、泉

二班：美希、ヒナギク、ハヤテ

うーん、実に納得のいく組み合わせだ。仲のいいところを引き裂くわけでもなく、かといつてくつつけすぎているわけでもない。ナギの要求がある中では最適な組み合わせだろう。作者的には。

しかし、誰からも文句が出なかったところを見ると、どうやらみんな

なも同じ意見のようだ。ナギもしぶしぶ頭を縦に振っている。

「よし、じゃあ早速出発だ！」

それを見て、だれも余計なことを言い出さないうちに、美希はささっと歩いていった。

マリアが提案したレジャー施設というのは、擬似本家屋敷から車で雑談がちょうど一区切りつくくらいだった。具体的な数値を希望される方は、島が小さいという情報から推測するしかないでしょう。

高級車ではあるが、桁外れな値段の車ではない車から降り、一堂は施設の入り口に降り立った。

「おお、これは遊び概があるな」

遊びにシビアな理沙や泉がうなるほど、入り口からは大きな観覧車や建物の屋根が見えている。

話から予想はしていたが、やはり実際に見てみると凄みを感じる。というか、こんなにでかくて遊びきれるのかという不安が生まれる。まあ、そんなマイナス思考なやつはハヤテしかいないんですけど。

気がつく、うなっていた理沙や泉は我慢できずに入り口に駆け込んでいた。相変わらずだな、あの二人は。まるで小学生が田舎に帰ってセミでも捕まえに行くみたいな勢いだ。

さて、一応班行動なのであの二人を見失うわけには行かない。とい

うことで他の人たちも足早に入り口へと入っていった。

このときはまだ誰も気づかなかった……

美希があのに混じってはしゃいでいないことに……

その態度が示すことに気づくのはまだ先のことだが……

三千院グループの施設ということで、入場料を払わずにゲートを通
過した後、一同は広場で一度集まった。

「じゃあ、とりあえず6時にここに集合ってことで」

結構な広さを誇る施設なので、帰りたくなってもなかなか全員そろ
わないという事態は容易に想像でき、尚且つなるべく早くハヤテと
再開したいナギはとりえず時間を設定した。

ただいまの時刻は1:30。作者が書くことは無かったが一応昼食
は屋敷で済ませている。ということで4時間半を存分に使って遊び
まわれるわけだ。

さすがにこれだけあれば大体の施設は回れるだろう。ひそかにそれ
に喜びを感じるハヤテを尻目に、一同は班ごとに分かれてそれぞれ
都合よく左右に分かれている道を反対方向へと進んでいった。

「うわぁ、これ結構おもしろそうじゃないですか？」

ハヤテは黒い建物の前で入りたくてうずうずしていますというオーラをこれでもかというほど出していた。

「うん。いいんじゃないか？」

美希も首を縦に振って大いに賛同している。しかし、一人だけはどうしても納得できないでいる。

「なんでそんなのが面白いのよ！第一なんで一番最初がお化け屋敷なの！」

班のメンバー的には彼女しか残っていないが反応的にも彼女である。いつもは強そうにしているがこういうのは普通の女の子並み、いやそれ以上に苦手なのだ。

ちなみに本当はメリーゴーランドが一番のはずだった（地理的に）が、美希がいろいろ話術を駆使してここに連れてきた。ここに何かあるかは知らされていなかったのでヒナギクが文句を言うのは筋違いではない。

「ヒナギクさんがそういうなら、僕は別にいいですが……」

嫌がるヒナギクを見てハヤテはかなり残念ですと無言で伝えながら次はどこへ行きましょうかと美希に聞く。

その落ち込みようは見るに耐え難いもので、見ているとこっちまで不幸な気がしてくる。極限の不幸を体験したもののみ放てるオーラ

がにじみ出ている。できれば一生手に入れたくないオーラだ。

ヒナギクは、ハヤテをみてはっとした。自分のわがままのせいでハヤテを傷つけている。そこまで深刻なものでもないような気もするし、本当に自分はそんなものに入りたくは無いが、ここはハヤテのために誘いに乗ってあげなければいけない気がする！今までの経験から！

「わかったわよ、ちょっとだけだからね！近くにいないとダメなんだからね！」

お化け屋敷にちょっともさつちもあつたものではないが、恥ずかしさを自分なりに隠してなんとか自分の意思を伝えられた。いつもここで失敗するのだ。今回の成功はきつと大きな成長だと確信するヒナギクであつた。

ということとで、その一言で劇的に明るくなったハヤテと一緒に三人はお化け屋敷へと入っていった。

25話

「うわぁー！ー！ー！なんなのよ、これ！！」

ヒナギクは引きちぎらんとばかりの力でハヤテの腕を引っ張って逃げ出そうとする。

ハヤテは必死に落ち着かせようとしていて、美希はそれをにやけ顔で見ている。

とりあえず、これが進入30秒後の光景だ。

客観的に見るに明らかに美希の作戦が予定通りに進行しているが、該当者たちはそんなことを気にしている余裕はなさそうだ。

おもしろそうなのでこのまま観察することにしよう。

「ちょっとヒナギクさん、そんなにひっぱったら危ないですよー！」

見た目以上に力の強いヒナギクに袖を引っ張られ、そろそろ繊維の強度の限界が見えてきた。そろそろ離してもらわないと真剣にちよん切れる。

「だって、こんなに怖いなんて思わなかったんだもん！何とかしてよ、ハヤテ君！」

何とかしてといわれても困る。そういうことは係員か運営者に言っ

てもらわないと設備の変更は出来かねる。

というか、そんなに怖いなら入らなかつたら良かったのに。とりあえず言いながらさらに強く引つ張らないで欲しい。

「怖いんだつたらまだ入り口も近いですし、戻っててもいいですよ？」

空気の読めない男の代名詞ハヤテなので、こんな発言も出てきたしまった。

もちろんヒナギクはそんなことが出来るはずも無い。30秒間の怖さに耐えた精神力が無駄になってしまう。

でも、それ以上に一緒にいたいし……

「そんなこと言っただって、入り口まで一人じゃ怖いじゃない！それに……」

その後の言葉は誰にも聞くことはできなかった。もしかしたら口には出していないかもしれない。

けれど、後の言葉は創造するにたやすいですよね？

ヒナギクはそういうと、これでもかというほど引つ張っていた袖を離し、今度は優しくハヤテの手をとった。

「怖いから出るまで離さないでね……／＼」

まるで、少しでも力を加えたら割れてしまうガラス工芸品を扱うような、すこし怖がっているような感じがヒナギクからは漂っていた。きつと、今の幸せが続かないかもしれないと心のどこかで思っているのだろう。

そんな彼女だからこそ、今を楽しもうとまだ恥ずかしがりながらも元気に歩き出した。

ハヤテはやっぱりなんだか納得のいかない展開のようだが、悪い雰囲気ではないので触らずにそのままにしていることにした。

こんな、どこからどう見てもカップルにしか見えない二人組みを、よりにやけどが増した顔の美希が後ろから眺めていた。

「ここまででは作戦通りだな」

お気づきの方は多いだろうが、どうやらこれは美希のトラップであるらしい。いったい何を考えているのやら。

というか、ヒナギクがいちゃいちゃしているところを見逃している

のか？小さいころからの大好物じゃなかったのか？

「ふん、私は一応健康な一女子高生なのでな。あいにく同性愛者ではないらしい」

そうだった。ごめん、君を何か勘違いしていたみたいだ。

と、こんな感じで話していると、美希もハヤテたちの後を追って屋敷の中心部へつながる闇へと消えていた。

「そういえば、なんでヒナギクさんってこんなに怖いものが苦手なんですか？」

近づくとも反応する原始的なお化けを2・3体通り抜けたところで、ハヤテはふとヒナギクに聞いてみた。

普段は完璧人間に見えるヒナギクがこうも分かりやすい弱点を持っているのが納得できなかったのだ。

しかし、この質問はヒナギクには不満なようだ。

「何よそれ、私だって普通の女の子なんだからお化けとかそういうのとか怖くて何が悪いのよ」

その普通の女の子に入らなかったからハヤテは聞いてみたのだが、それは言っではいけないと本能（作者）が告げていたので心の中にとどめておいた。

もつとも、小さいころのがき退治は普通の女の子のすることではないし、完璧な生活も一般的なことは違った生活だろう。本人が気づいていないだけで。

そんなことを思っていたら、ヒナギクはまだ不機嫌そうな顔をしていたのでフォローを入れておくことにする。

「いえいえ、なんでそのたまたま苦手なものがお化けなのかなと
思っただけですよ」

ハヤテの言いたいことは、誰にでも怖いものとか苦手なものがあったて、なんでそれがヒナギクはお化けなのかと思ったという意味だ。紛らわしい情報伝達の齟齬がおきそうなことは使いはやめてもらいたい。

ヒナギクは、ハヤテの適当な返事に満足したようで、ふんと言いながらまた周りを注意深く詮索し始めた。

先に仕掛けを見つけておけば怖くは無いという戦法である。

しかし、まあ、お化け屋敷側もそんな簡単に見破られる安っこい仕掛けでは今の時代は生き残っていけないのでそう簡単には見つからない。

見つけてもやっぱり怖いものは怖くて毎回ブルブルしていた。

そんな感じでゆっくり、入場料分はきっちり堪能して、二人はお化け屋敷から出てきた。

「はぁー、怖かった」

ヒナギクは早くも疲労困憊（精神的に）で、すぐそばにおいてあるベンチに倒れるように座る。

苦手なものに囲まれているのはかなり精神力を消耗する模様である。

ハヤテは、ヒナギクが休んでいる間に飲み物を買ってきて、ヒナギクに差し入れた。

二人で一緒に冷たいジュースを飲みながら、人気の少ない施設を見渡して、次の行き先を考えることにした。

ねずみの王国のように乗り物に乗るのに待つ必要はまったく無いので（人がいないから）、とりあえず近くのものから制覇していくことにする。

偶然にも、すぐ近くに案内板（地図が書いてあるやつ）があるので、それをみて決めることにした。

「うーん、こんなにいっぱいあるとさすがに迷うわねー」

地図によると、お化け屋敷の周りにはボーリング、カート、お土産屋（休憩所、売店込み）、水を使ったコースターなどがある。

ヒナギク的には、説明のところに本格的勝負が可能と書かれている

カートに惹かれたが、さすがにこれはいいお年頃の女の子の選ぶものではない。残念でしょうがないけど、ここは選択からはずす。

ボーリングはどうだろう。

いや、ボーリング場がある建物は地図によると泉たちがいる班が進んだ道ともつながっている。あの子達の性格を考えるとぱったり鉢合わせとか言うことにもなりかねない。そうしたらせっかくの班分けの意味がなくなってしまう。これも選択からはずすのがベターだろう。

お土産屋はどうだろうか？

いや、行くタイミングが早すぎる。こういったのは最後に取っておかなくては盛り上がれない。きっとハヤテもその気持ちは同じはずだ。ということは……

コースターが消去法で導き出された。

都合のいいことにハヤテもそれに乗りたそうにしている。なんだか自分にもものすごく合わない気もするがとりあえず他に選択儀は無い。ということで決まったらささっと行くことにする。時間は限られているのだ！

ヒナギクはハヤテの手を引っ張り、乗り場へと走っていった。

「やったー ストライク！」

ちなみにいま泉のいるナギ班はボーリング場。ヒナギクの感はあたっていました。

今回、あまりこの方たちの出番が無いので少しここで様子を見てみることにしてみましょう。

泉と理沙の勝手な先導で四人が入ってきたのはボーリング場だった。

はじめてみると、意外とみんな投げられるようだった。

ある人を省いて。

「ヴヴ・・・重い・・・」

おいてあるもので最軽量の6ポンドもろくに投げられなかった。

さて、時間が無いので一気にスキップして最後の結果発表と行きましょう。

一位：マリアさん 280

二位：泉 181

三位：理沙	178
四位：ナギ	20

マリアさんの万能っぷりはもはや突っ込むところではないでしょう。
さすが自称17歳。

さて、ナギはボールを投げたは良いけど、勢いが弱すぎてピンまで
ボールが届かないトラブルが連発。結果こうなりました。まあ、最
後まで飽きずにやったので大きな成長でしょう。

さて、切りも良いので今回はここまで。

25話（後書き）

悪霊さんからさっそく挿絵をいただきました！

とっても上手でびっくりです。皆さんも見てくださいね！

http://img2.bloggs.yahoo.co.jp/
ybi/1/d1/c3/hbdj8810/folder/91
9042/img|919042|11978729|0?123
6592204

26話

「これに乗るわよ！」

怒涛の100mダッシュを決めて、ハーフ1分も経過せずにウォー
ターコースターの乗り場にたどり着いた。

ハヤテは、なんとか鍛え上げた体を使いこけずに着いてきたが、や
や息が上がり気味である。人間の力の80%は使ってるんじゃない
かと思うほどの（通称火事場の馬鹿力。人間は普段20%の力しか
出せないが、それを超えて力を出すこと）体力だ。

ハヤテは着いた施設を見上げてみた。これから自分がどんなものに
乗るとかは確認しておかなくてはならない。

（ぬれたくない人は乗っちゃダメ！みんなで楽しめる爽快アトラク
ション！その名もビションダー3号！）

・・・。

ハヤテの視界に真っ先に飛び込んできたのは、入り口にある大きい
ゲートに書かれてあるこの文字だった。

ハヤテはあまりの突っ込みどころの多さに絶句してしまった。

「これに乗るわよ！」

怒涛の100mダッシュを決めて、ハーフ1分も経過せずにウォー
ターコースターの乗り場にたどり着いた。

ハヤテは、なんとか鍛え上げた体を使いこけずに着いてきたが、や
や息が上がりがちである。人間の力の80%は使ってるんじゃない
かと思うほどの（通称火事場の馬鹿力。人間は普段20%の力しか
出せないが、それを超えて力を出すこと）体力だ。

ハヤテは着いた施設を見上げてみた。これから自分がどんなものに
乗るとかは確認しておかなくてはならない。

（ぬれたくない人は乗っちゃダメ！みんなで楽しめる爽快アトラク
ション！その名もビションダー3号！）

.....

ハヤテの視界に真っ先に飛び込んできたのは、入り口にある大きい
ゲートに書かれてあるこの文字だった。

ハヤテはあまりの突っ込みどころの多さに絶句してしまった。

しかし、すこしすると頭が回ってきた。

待てよ、初めにぬれたくない人は乗るなっていってるのに、なんでみんなで楽しめるんだ！！どっちを信用すればいいんだー！！

一応ヒナギクの前なので心の中で叫んでみた。モノローグってやつですね。

いや、待てよ。よく考えれば最後のネーミングから想像が出来る。ビションとかいう気持ち悪い擬態語を使っていることを考えると、前者のパターンが確率が高いのか。

っていうか、そのネーミングはなんだよ！三号って前にも一号と二号がいたのか！？なんか不具合とかあって修正当てられたのか！？

考え始めるときりがない。とりあずこの謎に満ちたアトラクションは避けるに越したことはなさそうだ。

そう思っで、ヒナギクに視線を向けてみると、ちょうど前に乗り込んだ人たちの乗ったコースターが水に向かって落ちて始めるところを熱心に見つめていた。

これはちょうどいい。これでこれがどんな感じのものか下見が出来るし、ヒナギクも何も言わずに他のものに変えてくれるに違いない。ハヤテが言っただけではきつとすぐには意見を聞き入れてはくれないだろうし、これは最善の選択かもしれない。

ということでアトラクションの敷地と外を隔てる柵越しに観察する

ことにした。

ここからはハヤテの実況中継をお聞きいただきたいと思う。

ガラガラガラガラ

人を乗せたコースターはチェーンで引つ掛けられて位置エネルギーをためられるだけ待っています。

あっ、頂上まで上りきりました。

そのまま数メートル平らなところを走ります。ちなみにコースターには水よけのバイザーが360度全方位に人の高さくらいまであって、見た感じでは水の浸入はなさそうな感じです。

おっと、コースターが落ち始めました。

これは、普通のジェットコースターの最後が水になっている形のもので、最初はジャットコースターとやら変わりはありません。

グルグル無駄に回りながらいよいよ最後のウォータージェットが迫ってきました。

結構高いところ（10mくらい）から落ちていきます。

高いだけあって結構なスピードで落ちてます。これは結構な水しぶきが出そうですね。これなら上から水が入ってくるかもしれせん。

あつ、ついに鼻先が水に到達しました！

すごい水しぶきです。3mくらいはあがっていますよ！これは濡れますね。

そしてそのままコースターはどんどん落ちていきます・・・・・・？

あれ、、、、？

コースターが消えました・・・・

なんかあがった水しぶきと水中からの気泡しか見えないんですけど・・・・

・・・・

あつ・・・・行方不明のコースターが帰ってきました・・・・

水中から・・・・

・・・・

実況終了。

とりあえず、今起こったことをおさらいしてみよう。

普通のジェットコースターとして走る　水に突っ込む　水の中まで
突っ込む　浮いてくる

・・・

ありえねえーーーー！！！！！！

いままでの突っ込みの中でもっともきついのお見舞いしてやった。
誰につて？そんなのジョンにでも聞いてくれ。

っていうか、これは乗るのは決定的にまずい！これほどあからさま
に危険を感じるのは久しぶりな気がする！

いや、でも良く考えてみると大丈夫な気がする。ここまであからさ
まな危険なら、ヒナギクも危ないと感じてくれるかもしれない。と
いうか感じるだろう。常識的に。

そう思つて、”どこか違うところにいきましようか”とでも苦笑い
しながら言うてくれることを期待しつつヒナギクに声をかけた。

「あの、ヒナギクさん・・・」

「ちょっと、これは……」

予想通りの反応だ。”ここまで”は……

ハヤテは勝手に自分の都合の良いように次の言葉を予想し、さつさとこの行き過ぎたマシーンから離れようと来たほうへと歩き出した。

しかし、それはヒナギクの一言ですぐに止めなくてはならなかった。

「とっても面白そうじゃない！」

ヒナギクはそういいながらハヤテの手を力強く引き止める。

ハヤテはそれにおもわず苦笑いする。

「えっと、これに乗るんですか？」

ハヤテはまったくもってヒナギクの言っていることが信じられない。ただ、なぜか分からないが怒りに近いオーラを感じるので安易に反論することが出来ない。

ところで、ハヤテは怒りのオーラを感じているようだが、実際は結構近いのだがヒナギクから出ているものは少し違うものだった。どちらかというと固すぎる決意という感じのものだ。

なぜかというと、いわずもがな原因はコースターとハヤテである。

このコースターを諦めれば、他に行けそうなものはこの周辺にはない。少し歩けばあるが、なんとなくそれは止めておきたい気分だ。

ということで、これにのらなければいけないということもある。

もうひとつは、ここまで嫌いな高いところを意地悪しているとは思えないスピードや動きで回るものに乗る決意をしたというのに、それを簡単に壊したくないということだ。

せっかく自分の苦手なものを克服するというのに、やっぱり止めたというのはヒナギクの性格上許されない。生徒会長の名が廃ってしまふのだ。

ということで、目の前で起こった悲劇を目の当たりにしながらも、あまり気にならずに、というか気にせずにこれに乗ろうと言っているのだ。ハヤテが感じたオーラはこの決意にある。

ということで、ハヤテは相変わらずしゃべりだせずにいるので、ヒナギクはハヤテを強引に入場口へと連れて行く。

「大人二人お願いします！」

ヒナギクが、係員のおばさんに声をかけたとき、ようやくハヤテは金縛りっぽいものに開放された。

と、同時にさっそくこの場からの離脱を試みる。

「ちょっとヒナギクさん！さっきの人たちを見なかったんですか！
？湿るとかそういうレベルではないですよ！？」

ハヤテの必死の説得にヒナギクが返事をしようとしたとき、横から
良く通るガラガラ声が聞こえてきた。

「それなら大丈夫だよ、彼氏君」

係員のおばさんだ。

っていつか、どこが大丈夫なんだ？

「だって、ねえ？」

おばさんはわかってるようにヒナギクに目線を送る。ヒナギクはそ
うですよねえと言った感じでハヤテに目線を送る。

「だって、カッパ持ってきてるもん」

ウワァーオ。

カッパとか水に突っ込んだら意味ないし。っていつかなんでおばさ
んがそんなこと知ってるんだか。

っていかうか、ヒナギクさんがかばんから出したカッパは一着しか
ないんですけど……

僕はぶぬれ覚悟ですか……

ハヤテがどこから突っ込もうかと0.5秒ほど考えていると、いつの間にか係員のおばさんにヒナギクと一緒にコースターの座席に座らされていた。

ハヤテは最後の抵抗にそこからの脱出を試みてる。

しかし、横で見えていたおばさんに気持ちのこもった言葉を送られた。

「逃げたら・・・殺しますよ?」

ウワァーオ。

なんか脅されちゃってますよ、僕。

ただならぬおばさんの殺気で結局離脱作戦は失敗し、二人だけを乗せたコースターはゆっくりと発車していった。

27話

ゴゴゴゴゴゴ

二人を乗せたコースターは、不気味な振動と共にゆっくりと上へと体を持ち上げていく。

その無駄に遅いスピードの性で、これから自分に降りかかってくる惨劇を余計に考えてしまう。

あー、僕はこれからあんな不衛生なところに飛び込まなきゃいけないのか・・・

考えても仕方が無い。脱出できないことも無いが、今ここから逃げ出すのは現実的ではないだろう。一般的には。

そんなことより今考えるべきことはヒナギクのことだ。

となりでなんだか意気揚々とカップをかぶって座っているが、このままいくとヒナギクもただではすまないだろう。何しろカップだから。

なんとかヒナギクだけでも逃げさせたいが、なんといってもヒナギク自身が乗りたがっているのがどうしようもない縛りになって、ハヤテにはどうしようもなくなってしまっている。

いったいどうしたらいいんだ・・・

しかし、考えているうちにコースターは頂上まで上りきる。

あゝ、もうどうしたら良いんだー！！！！

ハヤテが決死の心理戦（自分だけの）を繰り広げる中、コースターは下降体制に差し掛かる。しかし、初めはまだ普通のジェットコースターなので焦るけど焦る必要は無い。

何もアナウンスされていないが、一応このアトラクションも高さが30mもあり、結構なスリルがある。下手な遊園地よりハイレベルなほどに。

ということで、スリル十二分満点なコースをコースターが下りだす。

ハヤテは上記の通り決死の死闘を繰り広げているので、もはやコースターがどんな様に動いているかなどもはや関係ない。

が、関係ある人が一人いる。

「ううううう………キャー！！！！！！！！」

ヒナギクさんですね。

一応、固い決意によって頂上まで上るところまでは平気だったのだが、さらに恐怖をあおる回転やらGやらでついに緊張の糸が切れた。目の前の景色の流れについていけず、ただただハヤテの腕を抱きしめる（無意識に）だけである。

あーあ、だからハヤテがとめてくれたのにねえ。余計な猪突猛進は

後悔と絶望を呼び寄せるだけだったことを少し学習しただろうか。

まあ、幸いにしてコースターが動いている時間はそれほど長くはない。普通に考えたら損をした気がするが、今のヒナギクには大助かりだ。

泣き叫びまくっていたら、あっという間に最後のウォータージェットが視界に入ってきた。

やった！これで地面に足が着くわ！

これからどんなことが起こるかなんて関係ない。テストが早く終わるなら全部空欄でもいい気がするように、次の結果なんてものは端から考えていないのだ。

唯一、考えていそうなハヤテは、考えすぎで結局何も出来ずにコースターの動きに身を任せるのみである。

こんな感じで、コースターは水の中へと勢い良く飛び込んでいった。

「はぁー、遊園地には絶対あつて欲しくないですね」

無事に（！？）完走して全身しつとりになったハヤテとヒナギクは絶対的に重くなった体をいやいや動かしながら、同じ施設内の休憩所へと向かっている。

「ちょっとこれは予想外だったわ」

そういうヒナギク的には予想以上のしつとりだったようだ。一応、水につけたタオルくらい飽和してるんだけど。

今のセリフから分かるように、やはりヒナギクはコースターの悲劇を考えていなかったようだ。しかも乗る前から。猛進するもの良いところである。

しかし、まあ、濡れてしまったものはしょうがない。考えていれば乾くというものでもない。

それよりも、早く着替えないと風邪を引いてしまいそうだ。一応温かいとはいえ、女の子の体は冷やしてはいけないものだ。

どこかに服はないかと考えながら、ようやく歩きついた休憩所の中に入ると、目の前には値札の着いた洋服が沢山置いてあった。

（ご購入になった方限定！全品10%OFF！）

入り口にはでかかどこんなことが書かれている。

あれ、これってぬれた人から洋服台をぼったくるっていう計画的犯行……？

ハヤテの考えどおり、あきらかに巻き上げようとしているが、今は服がないとヒナギクが風邪を引いてしまうかもしれない。仕方が無いのでヒナギクに適当に服を選んでもらう。ついでといっては何だが自分のも選ぶ。

状態が状態なのでささと選び、会計に持って行った。

レジのおばさんがバーコードにレーザー光っぽいものを当てると、レジのモニターに値段が表示された。

「二着で¥35000になります」

やられたーーーー

ヒナギクは自分の分は出すと知っているが、乗るのをとめられなかった自分のせいで買うので自分が出すと言って押し切った。

ハヤテにこんな高額が出せるのか？と思った方もいるだろう。実は今はマリアから預かったクレジットカードがあるのである。もしものとき意外は使うなどいわれているものだが。しかしまあ、マリアには何とってこの出費を説明するか、今から考えておかなければならぬ。事実をそのまま言って信じてくれるほどマリアは馬鹿ではないからだ。

そんな感じで洋服を無事に買い、二人はようやく一息ついた。だってあとは着るだけなのだから。

「じゃあ、どこで適当なところで着替えましょうか」

ヒナギクはとりあえず休憩所の中を見回してみた。しかし、着替えられそうなトイレやスペースはありそうに無い。洋服の試着室もない。

「ここではダメみたいですね」

仕方が無いので、あまりやりたくは無いがどこか少しはなれたところまで探しに行くことにする。

服まで買ったというのにこういうのはもどかしい。

足早にとりあえずこのコースターのある施設内を一回りしてみた。ところが、着替えられそうなどどころどころか、トイレひとつ見つからない。なんて設備の悪いところだろう。

仕方が無いので今度はさらに離れたところまで探しに行く。

「へくちよんつ」

後ろを歩いていたらヒナギクもそろそろ寒そうにしてきた。かれこれ15分は経ったから無理も無い。早く着替えさせてあげなければならぬ。

「おつ、あれはいい感じじゃないですか」

来た道と反対側へ進んだところに、小さな集会所を見つけた。いまは使われている気配はなく、みたところ鍵もかかっていない。ここで着替えろと言わんばかりのしろものだ。

さっそく二人は中にはいつて着替えられそうなところを探す。なぜ建物の中でさらに探すかと言うと、着替える人は二人いるからである。同時に同じところでは着替えられないですよね？

ということ、せまい8畳ほどの部屋をくまなく探してみたが、他には部屋ひとつ何も無かった。トイレすらない。

「もー、なんでここにはトイレも一台もないのよ！経営者おかしいんじゃないの！？」

ヒナギクが起こるのも無理は無い。ハヤテは、次に来るときはお手洗いは先に済ませておいたほうがいいとみんなに言うことを決めつつ、今自分がどうするべきか考えてみた。

とりあえず、ヒナギクは先に着替えてもらわなければならぬ。自分分は別に後でもたいしてかわらない。

ということ、ここは自分が外に出てヒナギクに先に着替えてもらうべきだろう。ハヤテにはこれ以上最善の手が思いつかない。作者も同じだ。

ということで、この意向をヒナギクに伝える。

しかし、ヒナギクの反応は予想外のものだった。

「何言ってるのよ！ハヤテ君だって早く着替えないと風引いちゃうわよ！自分だけ特別扱いなのはごめんだわ！着替えるならハヤテ君からでいいわよ」

あくまで生徒会長のヒナギクである。考え方が民主的だ。けど、紳士なハヤテはそれを簡単に受け入れるわけにもいかない。

「何言ってるんですか！さっきまで寒そうにしていたんですから早く着替えちゃってください！」

そんな感じで言い合いになってきた。

このままでは意地の張り合いでちが明かないのでヒナギクが究極の和解策を提案してきた。

「だったら二人で着替えればいいじゃない」

それにハヤテは思わず赤面する。何か不健康なことを想像したに違いない。ちなみにヒナギクは肝心にのりでいったので自分の言ったことの重大さに気づいていない。なんだか最近この傾向が多いぞ。こんなこといたら一帯何人の男子が飛びつくことやら。まあ、相手がハヤテだから言っているのかもしれないけどね。

「なななななっ、何を言ってるんですかヒナギクさん！！？そんなのダメに決まっているじゃないですか！！」

ハヤテは赤くなった顔を隠すように、早く着替えちゃってくださいねとだけ言い残して部屋を出て行ってしまった。かわいい反応するじゃないの、ハヤテ君。これだから君はもてるんだよ。

「まったく、ハヤテ君も子供よね。それがかわいいんだけど」

そんなこといってないで早く着替えてあげるのがハヤテのためだと思えますよ。外で待ってるんだから。

そんな感じで、ようやく自体は収まった……ように思えた。

しかし、本当の事件はこれからだった……

28話

ヒナギクの着替えは、なんということもなく順調に進んだ。まあ、ここでてこずるようなら日常生活などやっていけないだろう。

しかし、事件は起こってしまった。ちょうどヒナギクが新しい服を着ようとした時のことだった。

ガタガタガタガタ……

誰もが一度は経験のした事のある振動がヒナギクを襲い始めた。地面はその広大さを無視して振動し、建物や物を容赦なく揺らす。

俗に言う地震というやつだ。

ガタガタですんでいるときは良かった。しかし、初めのガタガタはP派だった。P派とは初めに来る弱い振動のことで初期微動とも言われる。伝わるのが早いが揺れは弱いというのが特徴だ。

通常、P派の後にS派がやってくる。今回も例外ではなかった。S派とは伝わるのが遅く揺れが大きいというのが特徴だ。

ガタンガタンガタン！

S派の襲来と共に、部屋の中にあるあらゆるものがヒナギクのいる

ところめがけて飛んできた。震度は5以上は軽くありそうだ。

ちょっと、何なのよ、これ！

冗談ではなく危険な状態だった。初めは振ってくるものを手で払いのけていたが、だんだん立っているのも困難なくらい揺れが激しくなってきた。

今、すぐ横にある棚が振ってきたら確実に下敷きになるだろう。

ハヤテ君・・・助けて・・・

ヒナギクが心の中で助けを求めるのとほとんど同時に、ドアを開く音が聞こえた。

「大丈夫ですか！ヒナギクさん！！」

ヒナギクの思いが通いたのか、ハヤテが急いでヒナギクの元へ駆け寄ってきた。ハヤテは、すでに立っていらなくなっているヒナギクを支え、自ら盾となってヒナギクを守った。

そのまま何秒くらいそうしていただろうか。絶対的にはそんなに長い時間ではなかったが、ヒナギクはハヤテに守られているという実感で、時間が止まっているように感じた。そのまま目を閉じてハヤテの優しさに浸っていたからだろうか、ハヤテに声をかけられるまで地震が去ったことに気がつかなかった。

「もう大丈夫ですよ」

あれからどれくらい経ったのだろうか。地震はすっかり収まり、部

屋の中はすっかり静まり返っていた。

目を開けると、目の前にハヤテが優しく微笑んでいた。

ハヤテはやさしくヒナギクに手を差し伸べている。

ヒナギクは、手をとって立ち上がる。お礼を言ってから部屋の中を見回してみると、さっきまで整然とならんでいた棚や本が部屋中に撒き散らかっていた。

はっとなって部屋の中を見渡すと、地震の激しさを今もって知る。

ハヤテが守ってくれなかったらたぶん本とかに頭を打たれて怪我をしていたかもしれない。実際、足元には沢山の本が落ちている。そばにある本棚のせいだ。

「ありがとう・・・、ハヤテ君」

ヒナギクは、感謝の気持ちを込めてお礼を言った。

しかし、ハヤテは自分の姿を見ると、急に後ろを向いてしまった。

なぜだかまったく理由が分からない。

頭に？マークを浮かべながら、今の自分の状況を整理してみた。

服がぬれたので着替えた　途中で地震が来た　ハヤテに助けてもらった　今に至る

・・・。

気づいた方もいらっしやるだろう。今のヒナギクの状況に。

ヒナギクの左手にはまだ来ていない新品のＴシャツがある。いつでも着れるような万全の状態だ。そして足元には濡れた服が落ちている。これは家から着てきた一番おしゃれな服だ。

ということは……

「っ！！！！／／／／／」

声にならない叫びとなってこみ上げる羞恥心。ヒナギクは全力でハヤテから見えなさそうな一番遠いところへと逃げる。しかし、残念なことにこの部屋は正四角形な上に狭くて、どこにいても全てを見渡せてしまう。つまりそんな行為はまったくの無駄なわけだが、精神的にそうでもしないと生きていけない。

「大丈夫ですよ……僕は何も見てませんから……」

ハヤテはそういい残して、決して後ろは見ませんという覚悟をかもし出しながらぎこちなく部屋を出て行った。

「もう私……お嫁にいけない……」

きつと君はハヤテにもらわれるから大丈夫だよとか、そういう言葉をかけられないほどヒナギクは落ち込んでいた。いや、正確に言うと恥ずかしがっていた。

当然、それはハヤテも同じことで、表でぶつぶつと念仏のようにある言葉を唱えていた。

「僕は何も見ていない。僕は何も見ていない。僕は何も見ていない。僕は何も見ていない……」

ちやっかりマリアさんフラグありまくるくせに、今回はやけに対応が下げさだ。

というか、いろいろとばればれた。それは心の中にしまっておくんだぞ！他人に言ったら殺されるどころじゃすまないからな！

そうこうしているうちに、時刻は3時を回った。

あれから、二人を川を極力合わせないように行動したため、ハヤテが着替え終わるまでずいぶん時間がかかった。

お互い、離れると永遠に合流できる気がしないので離れはしないが、くつつきもしないみたいな微妙な位置関係を保っている。お互いの姿を見るとまだ顔が赤くなるので仕方が無いのだ。

一番心理的ダメージの大きいヒナギクはハヤテを見ないように先頭を歩いている。ハヤテはぎりぎりお互いの足音が聞こえるくらいの距離を保ちながら着いていく。

はあ。何かまたヒナギクさんに嫌われちゃったな。前にもこんなことがあった気がするし……

考えてみれば、前にも同じく地震でヒナギクとは事件があった。良

く考えれば今のよりも重大な事件だったのかもしれない。

あの時・・・僕はヒナギクさんと・・・キスを・・・

考えると重大な事件だ。きっと人生で数えられるくらいの大事なイベントをあの時行ってしまったのだ。

でも・・・あの時はそんなに恥ずかしいとか今より思わなかったのにな・・・

なぜだろう、たかがとはいえないがこれくらいでこんなに恥ずかしいのは・・・

もしかして、僕は前よりヒナギクさんのこと・・・

・・・

「ハヤ太君。お久しぶりじゃないか」

次の言葉は、話しかけてきた女子の言葉によってすぐに記憶から消え去った。

聞きなれているけれど、そういえば最近聞いていないような気がする水色力チューシャが特徴の顔が頭に浮かんできた。

「ヒナとのデートは楽しんだかい？」

若干からからかい気味のしゃべり方で話してくる。

しかし、今はそんな小さいことを気にしている余裕はハヤテには無かった。

「あれ……今までどこに行っていたんですか!？」

そういえばというほどすっかりハヤテは美希のことを忘れていた。読者さんの中でも結構いるのではないですか？

「ひどいな、ハヤ太君。私だって結構登場回数多いほうなんだけどな」

皮肉をたっぷり混ぜて言う。

「私がどこにいたかだって？ふふふふ。それはね……」

次回に続く！

28話（後書き）

いかがだったでしょうか。

今回は自分にしてはめずらしく、あからさまに後を引く終わり方になりました。

特に意図はなく、気分です（笑）

最近、執筆の調子が悪くなってきたので感想とか感想とか待ってます！

29話

「私がどこにいたかだって？ふふふふ。それはね．．．．．」

不敵な笑みを浮かべながら美希は続けた。

「それはね．．．」

教えない」

•
•
•
•
•
•
○

えー！ー！ー！ー！ー！ー！

ハヤテは絶句した後、世界の中心で叫んだ。

「それだけ振ってためておいてそれってどういうことですか!？」

無駄としか思えない展開に、ハヤテはただただ突っ込むことしか出来なかった。

しかし、それは美希の思惑通りの行動だった。

「いやー、ハヤ太君なら絶対そういうと思ったよ。ありがとう」

ハヤテのリアクションはまさに美希の想像したものと同じものだった。逆に美希がハヤテに心を読まれたかと思っ**て**びっくりしたくらいだ。

「とまあ、これは冗談で・・・

とりあえず自分は満足したので本題に入ることにした。自分の冗談発言にまたハヤテが何かリアクションしているが、もうお腹いっぱいだから大して興味はわからない。とっとと話を始めることにする。

「君たちのことだからね、目の前からいなくなればすぐに私のことなんか頭からなくなるのは分かりきっていた。万が一のことを考えて一応暗くて分かりにくいお化け屋敷のときに君たちを二人にしてみただ。まあ、ばれたときのプランもあつたんだがな」

たんたんと語っていることにハヤテが思うに間違いはなさそうだった。なぜかという**と**、思い返してみれば最後に美希を見たのはお化け屋敷に入場してすぐのときで、それからまったく姿を見ていないからだ。そこで分かれたとしても何の不思議も無い。さらに考えてみると、なぜ美希がお化け屋敷に連れてきたのか、その理由も分かった。

しかし、それを納得してもなお残る疑問がある。

「なんでそんなことをしたんですか？」

こればかりはハヤテの頭ではまったく想像できなかった。考えてみるとハヤテの頭は想像できないことばかりだが、それが仕様のので仕方が無いのかもしれない。

シャーロック・ホームズもびっくりな難題に困っているハヤテに、美希はまったくばかだなあとかいろいろ言ってからこう言った。

「理由なんて簡単さ。だって、二人つきりにしたら面白いこととしてくれそうだったから」

美希は最後にこれだけはヒナギクに内緒にしておいてくれ、絶対フルボッコされるからとだけ付け加えた。

まあ、ハヤテはこんなこといわれても何が面白いのかとかいろいろわからないことばかりで、逆になぞが増えたただだったが、大体の読者様には分かっていたただけでしようか。

ちなみにハヤテ君は考え中なので突っ込みはなしの方向で行きます。

「まあ、他にも理由はあるんだがな……」

ハヤテが悩んでいる間に、美希はひっそりとそうつぶやいた。が、声が小さかったのと一番聞く可能性が高いハヤテが聞く体制でなかった。ので誰もそれを耳にすることは無かった……ように思えた。

そんな感じで、ハヤテとヒナギクの間に仲介役が加わった。

これによって、二人も少しずついつもどおりに話せるようになってきていた。

まあ、ぎこちない二人を見て美希の鋭い洞察力が働き、いろいろいじられたたのは言うまでも無いことだ。でも、それを必死に二人で反論しているうちにまた普通に戻れたことも事実だった。

三人でそうやって騒いでいると、時計に目を向けると時刻は4時を回っていた。

「あと、2時間しかないのね」

気がつけば集合まであと2時間。さすがにもう全てを回るというのは無理な話になった。それ以前に地震の影響で全ての施設が動いているというわけでもなくなっている。

残り時間はゆったりと適当にすごすのがベターだろう。

「だったら、あれに乗らないか？」

美希が指差す先にあるものは、空高く聳え立つ円形のゴンドラ回転装置。通称観覧車。耐震性は抜群で、点検もすぐに終わりすでに運転が始まっている。

落ちかけた太陽の光を横から受けて、地面に動く円の影を描いている。

これまた孤島に似合わぬ大きさで、高さは80mはあるようだ。影

の長さも相当なものだ。

美希は、これに乗る同意を求めヒナギクとハヤテの顔をのぞいた。

ハヤテはいいですよといった顔をしている。これは美希の予想通りだ。もともと特別な理由でもない限り多少の不都合があっても他人に合わせる性格なので（美希の手帳を参照）こうなることは分かってきている。

しかし、ここで美希の予定を狂わすものがいた。

「いいんじゃない？観覧車」

風になびく桃色の髪を手で押さえる少女H・K。美希のデータによると高いところは苦手なはずだ。こんなものに乗りたいがるはずもない。

「ヒナ・・・お前いつから平気になったんだ？」

自分が知らない間にヒナギクが進化していたことに美希は愕然とした。ヒナギクのことだけは全て知り尽くしていると思っていたのに・・・

そのとき気づいた・・・

自分の気持ちの矛盾に・・・

美希は、力なくヒナギクの手に引かれ、観覧車の乗り口までつれてこられた。

29話（後書き）

さて、実はこの後の展開はかなり気合が入っていたりします。

まだまだ沖縄初日ですがイベントいっぱいです。これからの展開にご期待ください。

感想とうがあればいつでも気軽に書いてくださいね！

とっても作者の励みと参考になります。

30話

「大人二人でお願いします」

ヒナギクは、入り口へ着くと、すぐにチケットを販売員のおばさんのところへと買いに行った。なんだかコースターのところにいたおばさんとそっくりな気がしたが、きっとそれは錯覚だろう。

しかし、ヒナギクが買って帰ってきたチケットは手元に二枚だけである。ポケットとか二枚重なっていないかとかも調べたがそれはなかった。本当に二枚しか買っていないようだ。

ハヤ太君と二人で乗るのか？

さっきの精神的ショックをいつもの無表情フェイスに切り替えなんと隠しつつ、美希はそんなことも考えたが、その予想はまったくのはずれだった。

「美希、二人でこれに乗りましょ」

ヒナギクは美希に手を差し伸べて一緒に行こうと誘う。

横で、ハヤテがわけも分からずにひたすら自分が省かれた理由を考えていたが、ヒナギクが耳元でささやくと納得したように首を縦に振った。

私にはわけが分からない・・・

美希はいまだにわからないヒナギクの考えを想像しながらも、ヒナ

ギクの誘いを受け入れた。

ハヤテがなぜ納得したのか、ハヤテも納得できることなのかなど納得できないことも多いが、ヒナギクが苦手な高いところに一緒に行こうと言ったのだ。きっとわけ

があってそれなりの重さのあることがあるんだろう。

そうやって自分を強引に納得させ、さつきから地味にショックだった予想のほずれも忘れることにした。

そんなことと一緒に、これから起こるであろう、いろんなパターンのイベントを想像しつつ、係員の指示に従ってゴンドラの中へと乗り込んだ。

係員は二人が無事に乗り込んだのを確認すると、ガチャッと手馴れた手つきで扉をしめ、この空間を完全なる密室にしてまた次のゴンドラに人を誘導していった。

閉ざされたこの狭い空間には、今まさに二人だけしかない。

静かにゴンドラは夕日が輝く空へと引き上げられ、徐々に島の全景が窓から見えるようになってきた。

それは、言うまでもなく美しいもので、しばらくの間何もしゃべらずに見入ってしまうほどのものだった。

しばらくの間、そうして沈黙が続いていたが、半分くらいの高さまであがったところで、ヒナギクが口を開いた。

美希はついに来たのかと柄にもなく緊張していた。こんな緊張感が生徒会選挙の演説を全校生徒の前でしたくらいだ。今ならどんなに小さい声でも聞き逃さないと

いうほど神経をヒナギクに集中する。

しかし、ヒナギクから出た言葉は意外すぎるものだった。

「た、たたた高いところって一度行っても慣れないものね・・・」

ヒナギクは恐怖のあまり声が強張ってまでいる。

美希は、ヒナギクのことだから本題から来るかと思っていたら、出鼻をくじかれて座っているのいつもの癖でこけそうになった。

たまに思うが、ヒナギクって結構先を読めない人間だ。

「なんだ、誘ってくるくらいだからもう克服したのかと思っていたのにな」

いつものおどおどしたヒナギクを見ると、さっきの緊張はどこかへ跳んで行ってしまった。そのあどけなさは心を癒してくれ、見ていると和んでくる。

前に違う人と乗ったときはそうでもなかったのになとか言っていたが、ヒナギクのことだからきつと子供だましでだまされただろうと思った。

「でも、どうして観覧車なんだ？」

ハハハと笑いながら、なんとなく聞いてみた。

乗る前からの最大の疑問点だ。高いところが苦手なのに乗る理由がどこにあるんだろう。まあ、二人つきりというところで何かありそうなのは分かるんだが。

このままではヒナギクがかわいそうなので、少しでも高いところにいることを忘れられるように話のネタを振った意味もこれにはじつはあったりする。

ところが、話しかけてもヒナギクはすでに失神しそうなレベルに達していて、まったく聞いていなかった。いや、この場合聞けなかったといったほうが正しいだろう。

う。弱点もここまで来ると欠点だ。同じかもしれないが。

まったくしょうがないな……

美希はとりあえず、さっきからどんどんひどくなっていくヒナギクをなんとかすることにした。まあ、それ以外に選択肢など無かったが。

ふう、と軽く深呼吸してからヒナギクの目をじっと見つめて話す。

「ヒナ、これから私の質問することに答えてくれ。好きな食べ物は？」

実は得意だったりする精神論の活用で、ヒナギクに話を聞かせている。

「・・・ハンバーグ」

もはや意識外でヒナギクは答える。

「好きな動物は？」

「・・・ネコ」

それじゃあと、美希は少し笑いながら言う。

「好きな人は？」

「・・・ハヤ・・・って！！！！何言わせるの！！！！！！
！！！！」

元気になった。

まったく、本当に分かりやすいやつだな

美希の言うとおりだ。人間とは簡単に出来ているものだ。そこら辺のケータイの取り扱い説明書よりずっと分かりやすいんじゃないだろうか。

しかし、なんだか元気になりすぎてしまったようだ。怒り狂ったヒナギクはダークなオーラを発しながら美希に攻め寄ってきた。美希は思わず焦りながら必死の弁明に入る。

「いや、だってな、あまりにもヒナが元気なかったから搾り出してやろうと思って・・・」

へえ・・・だから？と、さっきまでの静けさはどこへいったのやら、有り余るパワーを放出しまくって美希を威圧している。美希の弁明に聞く耳は端から無いようだ。

しかし、そんな美希にも反撃の手が無いわけでもない。

「そういえば、さっき好きな人ってハヤ『ちょっと待ってっ！！！！』」

最強のストッパーだ。さすが美希といった感じで、さっきの発言から見事に弱みを見つけ出し、適所で使っている。

これは効果絶大で、ヒナギクは頭から蒸気を出す勢いで赤くなり、しょぼしょぼと小さくなって自分のいた席へ座った。

やっぱり弱みは握っておくものだな

こうなれば美希の勝ちだ。とりあえず、こんなことしているうちに観覧車は頂上まで来てしまったので降りなくてはなくなる前に話をしなくてはならない。

さてと、と美希はわざとらしく言う。

「それで、本当の話っているのはなんなんだ？」

本当の話し合いは今始まる・・・

30話（後書き）

えっと、実は気合を入れる宣言をしたのはこの次の話からです・・・
・これは書き溜めてあったので。

とりあえず、次回に続くのでそれまでお待ちください。ぐだぐだでしたが楽しんでいただけたら幸いです。

31話

「本当の理由が知りたかったのよ」

ヒナギクは真剣な目つきで美希を見据えている。

でも、美希には言っている意味がまだつかめていなかった。もちろん、そういわれて思い当たる節はいくつかあるが、これだというのが思い当たらない。ひごろからいろいろし過ぎている罰だろうか。

「どうしてハヤテ君と二人っきりにしたのかってことよ」

ちょっと言葉が足りなかったことに気づき、後から言った。

美希も、的確に的を捉えた付け足しのおかげでヒナギクの言いたいことがつかめた。

「それならさっき言ったじゃないか。面白くなりそうだからって」
「嘘でしょ」

突然ヒナギクに話をさえぎられて美希は思わず えっ という声をもらしてしまった。いつもの冗談交じりの言葉とは迫力が違っていたからだ。

「聞こえたのよ。他に理由があるって。それに見ていてそれくらい分かるわ」

美希は驚きを超えて驚愕していた。というのも全て図星だからだ。誰にも言った覚えはないのにヒナギクには気づかれている……

「いつからバレたのかな……」

こういうことはヒナギクには隠し通せないことは経験から学んだ。ここまで勘付かれていてはもうしらばっくれることも出来ないだろう。

できればずっと心のうちに秘めていようと思ったが、やはりいうべきかヒナギクにはそれは無理だったようだ。潔く白状するしかない。

「単刀直入に言うと、私はヒナを応援したいんだ」

そう。これが美希の本当の気持ち。今回のことの全ての理由はここにある。

ヒナギクをハヤテと二人つきりにしたのも、何か進展があるかもという心遣いからだし、そもそも班分けの段階からこのメンバーにすることで二人だけになれるように配慮している。

今までヒナギクに迷惑をかけていた分、少しでも恩返しが出来たら
なと思ったのだ。

ただ、純粹にそう思っていると自分も思っていた。でも、実際はそ
うではなかった。

ヒナギクが”観覧車に乗る”と言ったとき、自分の知らない間にヒ
ナギクが変わっていることに気づいた。そして、同時に言葉に出来
ない感覚に襲われた。

それはとても嫌な感覚で、自分のおもちやがどこかへ行ってしまう
たような、そんな感じだった。

ヒナは自分のもの・・・

きつとそんな風に思っている一面があるのだろう。

正直な話、今こうしている間もそういう感情は消えていない。

けれども、ヒナギクに幸せになってもraitaitoという気持ちのほう
が、ずっと大きく強いものなのだ。

誰でも素直には生きれないけれども、素直になれることはできるか
ら、精一杯自分の出来ることをするのだ。

だから、ヒナに幸せになってもらう

そう決められたのだ。

「まったく、もっと素直にやってくれたらよかったのに」

ヒナギクは、初めて美希の本当の気持ちを聞いて、やっと心の底から話ができるようになった気がした。

本当は優しい子だということが、なんとなくじゃなく正確に知ることが出来た。

ちょっと、やり方はひねくれているところもあるけれど、ここまでしてくれるなんて優しいとしか言いようが無い。感謝の気持ちでいっぱいだ。

だから、ヒナギクも腹を割って話すことにした。

「でも、私あなたにハヤテ君のこと言っていないわよ」

ヒナギクは、確信も無いのになんでここまでしてくれるのか、それも疑問だった。今まで意地でも隠し通してきたから、それがばれているはずはないんだが・・・

その質問に、美希は自信ありげに堂々と答えた。

「私がヒナの気持ちに気づかないとも思っただのか？」

その言葉に、ヒナギクは啞然としている。

まったく、何年間親友やっていると思っているんだ。

そんなこと、ヒナギクを見ていれば分からないはずなんて無いんだ。だって、初めて私がハヤ太君と会ったとき、その隣にいたヒナは今までとはまるで別人になっていたんだから。あんなに幸せそうなヒナは初めて見たんだ。

他の人は気づかなかったかもしれない。けど私はこれでも小学校時

代からの付き合いなんだ。お互いの考えていることくらい筒抜けなのさ。

「いつも世話をかけさせているお礼なんだよ。ヒナは幸せにならなきゃいけないんだ」

観覧車からは、遠のいていた地上の景色がはっきりと見えるようになっていた。もう、降りる時間は近いらしい。

「だから、今日はがんばってみてくれ。私からのお願いだ」

窓から係員の顔が見えた。

そろそろ降りる時間だ。

「わかった。がんばってみる」

ヒナギクも、力強く”うん”と首を縦に振った。

二人は、ゴンドラから降りると、ヒナギクはハヤテのほうへ、美希は近くのベンチのほうへそれぞれ反対に進んでいった。

がんばれよ、ヒナ・・・

夕焼けに染まる空の下、美希はただそれを願いつづけた。

32話

「もう、用事は済みましたか？」

ハヤテはヒナギクの言いつけを守って、勢いで乗り込んだ観覧車の入り口の近くの分かれたところで一人で待っていた。

相変わらずの忠誠心で、他人の言いつけは絶対のように守り抜く。人一倍のやさしさと人一倍の強さができないことだ。

でも、そんなことは微塵も感じさせない普通の笑顔で、ヒナギクに話しかける。

ちなみに、ヒナギクが何を言ってハヤテを待たせたかは秘密だ。

「ええ、でね、ちょっと話があるから海のほうに行かない？」

いつもとは違う、真剣なまなざしのヒナギクにハヤテは断るはずもなく黙ってうなずきヒナギクの後についていった。

一応小島なので、少し歩けばすぐに海辺に出ることが出来る。

ヒナギクたちがいるところは海に近かったこともあり、ものの数分で着くことが出来た。

「きれいな海ですね」

砂浜に出ると、ちょうど太陽が水平線に沈みかけているところだった。

オレンジ色に輝く太陽は、沈みかけてもなお、ハヤテたちを明るく照らし続ける。その光は海に反射し、神秘的なほど美しい景色を作り上げていた。

もともとこの島に人が少ないということもあり、誰もこの雰囲気を壊すものはいなかった。今、まさに二人つきりだ。

ヒナギクも、その海を見つめながら話を始めた。

「人って、自分ひとりじゃ何もしていけないと思うの。いつも誰かがそばにいて、お互いに手伝いあわなきゃいけないと思うの」

ハヤテもすごくそう思う。

小さい頃、親がいなくてどんなに辛かったかのか体にしみこんでいる。

「そうやって、誰かと一緒にいるとずっとその人といたくなったりすることはない？」

もちろんハヤテにだってある。学校に行けば優しく自分と接してくれる人がいた。

疲れきった心の唯一休まる瞬間だった。ずっとそうしていたいと何度思ったことか。

「ハヤテ君は、こういう人といると楽しい？」

そんなの全員とに決まっている。白皇にきて、みんなが優しく接してくれたから自分はここまでくることができたのだから。

だれも僕を遠ざけたりする人なんかいない。そんなみんなといて楽しくないはずが無い。

ちょっと気が強かったりひきこもったりしてるけど、命を救ってくれたお嬢様。

根は優しいけどちょっと笑えない冗談が多いマリアさん。

いたずらが過ぎるけど明るい三人娘たち。

頼りになつて、沢山お世話になつてるヒナギクさん。

みんな良い友達だ。

「そうじゃないのよ!」

ハヤテの言っていることは間違つてはいない。

けど、ヒナギクの言いたいことはそうじゃない。

すごく微妙なことだけど、楽しいってそういう意味じゃない。

もっと、奥のほうで何かが違う。

「たとえば……一緒にいてくれるとうれしくなるような、そんな女の子とかいなかった……?」

「
.
.
.
.
.
.
.
」

しばらくの間、沈黙が続いた。

何もだれがいなかったか探しているわけではない。

重い口を、ハヤテは開いた。

「確かに、僕にもそんな人がいま”した”。その子とはいつも一緒にいました。その子も僕と一緒にいてくれました。

いつからかわからないけど、その子と一緒にいるのが僕の楽しみになっていました。

いろんなことをして遊んだし、いろいろ教え込まれたりもしました。そのときは本当に楽しかったです。

でも、それも全て過去の話です」

話はまだ続く。

「でも、その子はある日僕の元から去ってしまいました……」

理由なんてわかりません。

ただ、彼女を怒らせてしまったことだけはわかります」

だから・・・

「苦手なんですよ、女の子は・・・」

ヒナギクは、話をしている間、ずっとハヤテが悲しい顔をしていたのがわかった。

それは、今ままで見せたどんな表情よりも見ていて辛いものだった。

どれだけハヤテを傷つけているか想像するのもたやすかった。

「ヒナギクさんは、僕が西沢さんに告白されたのは聞いていますよね。」

その時、一瞬だけお付き合いらしてもいいかなって思ったんです。一緒のクラスになってから仲が良かったし、とってもいい人ですし、ちよつと幸せになれるか

なつて思つたんです。

でも、すぐに昔のことを思い出したんです。大事な人を失う辛さを。

もちろん、他にも借金のある身ですし、お嬢様のお世話だけで精一杯なのもあります。

でも、やっぱりダメなんです。失う怖さを知ってしまったから・・・

僕ってダメな男ですねってハヤテは言つてきた。

でも、そんなことない。

私だって大切な人をなくす怖さを知っている。

私だってそれが怖くて人を好きになれなかった。大切な人ほど失う大きさが大きいから。

でも、それってすごく苦しかった。

自分の気持ちを無理やり押さえつけている、そんな感じだった。

でも、それからハヤテ君は抜け出させてくれたんだよ？

そのおかげで私は自由になれたんだよ？

だからね・・・

「確かに、私もそう思ったことがあるの。

でもね、ある人のおかげでそれを越えることが出来たの。それはとってもすばらしいことだった。

今まで生きてきた世界がまるで別物になったの。いつもの生活の中で幸せを見つけることができたの」

ヒナギクはハヤテをまっすぐに見つめた。

「それを、ハヤテ君にも教えてあげたいの。

・
L

私
が
ね
・
・
・
・

ヒナギクもそうだったように、すぐできることじゃないかもしれない。
い。

教えてあげられるものじゃないかもしれない。

けれど、そのヒントをいつも出してあげることが出来る。

いつもそばにいて、ずっとずっと一緒にいればきっと分かってくれるかもしれない。

それを、ハヤテも分かってくれたのだろうか、ニョっとわらって返事をしてくれた。

それから、二人は輝きだしてきた星を見たり、透き通った海を見たりしていた。

特に話はしていない。

そんなことをしなくても伝わるものがあつたから。

そんなこんなしていて時計を見ると、時刻はすでに5時半を回ったところ。

そろそろ集合場所に向かうころあいだ。

「そろそろ、帰りましょうか」

二人は、いつもと変わらぬ調子でまずは美希の待つところへと向かっていった。

結局、告白することはできなかった。

けれど、きっと二人の仲で何かが変わったに違いない。

ハヤテは変わるのだろうか・・・

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

32話（後書き）

さて、シリアスシリーズでした。

個人的に力を入れたつもりでしたが、読んでみるとそうでもなかったですね（汗）

書くときは気合を入れてみたのですが・・・

シリアスが苦手な作者ですので、アドバイスや感想等がありましたらいただけたら幸いです。

おまけ

新作の作成始めました。そこそ長くなる予定です。公表するかはわかりませんが、編集して短編で発表するかもしれません。

まあ、頭の片隅に置いとくか通り抜かしても問題ないですね。

以上、最新情報でした。

33話

「朝ごはんが出来ましたよ」

マリアの声を聞いて、そろそろとみんな食堂へと集まってきた。

ヒナギクや理沙はすでに準備万端といった感じで自室からでてきたが、残りのメンバーはいかにも寝起きですといわんばかりの顔でだらだらと出てきた。

ヒナギクはともかく、理沙は家柄上早起きは必須なので実は得意だったりする。

一緒にトランプをして遊んでいた美希や泉は眠そうなのにたいしたものだ。

こんな感じで始まった4月30日、沖縄二日目。

さすがにハイな娘たちも夜中のはしゃぎすぎでおとなしく朝食は始まった。

ちなみに、昨晩はヒナギクと美希は美希の説教で、そのほかのメンバーは夜通しゲームなりトランプなりで過ごした。

罰ゲーム制で、いろいろハプニングがあっただが、またそれは別の機会に語ることにしよう。

「今日は何をしようかな」

泉は何か楽しいこと無いかなといった顔で考える。

でも、他のメンバーは何を言ってるのという顔で泉を見る。

「沖縄って行ったらね……」

泉以外、アイコンタクトで通じ合っているようだ。みんなで泉をニヤニヤしながら見つめる。

ほえっ、といっているあたりから、まだ寝起きで頭が働いていないのかもしれない。

沖縄にきたら、やっぱりあれしかないでしょう……

「海だーーーーっ!!!!!!」

はいはい、皆さん、ちゃんと準備運動をしてから海に入りましょうね。足をつつたりしたら危険ですからね。

というわけで、海に来ました。

マリア、ヒナギク、ナギ、美希はパラソルの下で観察、ハヤテと三人娘は元気に海ではしゃぎまわっていた。

ハヤテは、海で遊ぶのが初めてということもあり、いつもよりもハイテンションだった。三人娘と遊んでいる姿を想像していただければ、だいたいは想像が付くでしょう。

「まったく、ハヤテは元気だな」

ナギは、かんかん和照りつける太陽の光などなんのその、パラソルの下でP Pをやりながらつぶやく。

「ナギも、せっかくなんですから遊んだらどうですか？」

マリアは、ここまで来ても引きこもり思考のナギに苦笑いしながらも、慣れは怖いものでナギのグータラも気にしないでのんびり景色を眺めている。どうやら自分が楽しむことのほうが優先事項になっているらしい。

若い人なら遊びたいところだが、さすがマリアさん、大人の趣味です。

「え？それってどういう意味ですか作者さん？私、17歳のピッチピチなんですけど、どこが大人っぽいんですか？」

い、いいいいいや、ちょっとそう思っただけで……

あっ、そういえばヒナギクさんもなんで一緒に遊ばないんですか！？

（逃げましたね、作者さん……）

そういえばといっっては何だが、いつも元気なヒナギクはおとなしくマリアと一緒に座っている。らしくないといえる。

「なんだか疲れちゃいました。ちょっとだけ休憩しようかなと思って」

顔には少しだけ不安の情を感じることが出来る。マリアはそれを見逃さなかった。

けれど、それをダイレクトに聞くほど考慮の無い人間ではない。

「何かあったときには、思いっきり遊ぶのもいいですよ」

あえてヒナギクの目を見ずに、海を見ながら言ってみた。余計なこととはせずに聞いていることを示す為だ。

一瞬、ヒナギクは話すかどうか悩んだが、自分の中に潜む不安に耐え切れず、オブラートに包みながら少しだけ相談に乗ってもらおうと思った。

「とある人と話をしたんですよ。とっても大事な話です。けど、その人には大きい壁があって近くまで入れてもらえないんです・・・」

ちよつとぼかしすぎたかもしれない。何の話だかマリアに分かってもらえてないかもしれない。けど、分かってもらっても困る。微妙な乙女心なのだ。

しかし、マリアはなんとなく分かったようで、柔らかな表情で答えてくれた。

「人って言うものは不思議なもので、ずっとそばにいてくれる人にはいつの間にか心を許しているものなんですよ。」

だから、ずっとその人のそばにいてあげてください。そうすれば、きっと変われますよ」

マリアは、そういうと立ち上がってヒナギクに手を差し伸べた。

「さっ、遊びましょうか！」

二人は、いつの間にか海から上がってビーチバレーを始めていたハ

ヤテたちと思いつきり遊ぶことにした。

「さあ、行くぞハヤ太君！！！」

チームに分かれてビーチバレー勝負になった。ハヤテ、ヒナギク、ナギチームと、泉、美希、理沙、マリアチームに分かれた。なぜ三人娘のいるほうが人数が多いかというと、ハヤテとヒナギクの運動神経は常人の域を脱しているのでハンデとしてナギを入れる＋人数を少なくするという事になったのだ。

多分、ナギを入れるのはそうとうなハンディになっているだろう。狙われたら返せるかどうかわからない。

しかし、そんな心配はよそに、初めはいたって普通にナギばかり狙われることなく進んだ。ただ、ヒナギク、ハヤテの弾丸アタックで

「う、うわああああーーーーー」

とか、

「ひいえええ、怖いよーーーーー」

とか、そういうことにはなっていた。得点的には大差は無いのだが、精神的ダメージのさは大きく開いている。いや、肉体的ダメージも結構ある。

二人にはちょっとは手加減するとかそういう精神は無いのだろうか。

「手加減しているつもりなんですけどねー？」

ハヤテとヒナギクは顔を見合わせる。どうやら二人ともそのつもりだったらしい。力がありすぎてセーブしてもまだ大きすぎるということを感じた。

「仕方ない。こうなったら、アレを使うしかないな……」

美希は、泉と理沙を呼び寄せて作戦を話し始めた。彼女らの性格上負けっぱなしは気分が悪い。少々卑怯でも勝たなければ面白くないのだ。

「ふふふ……じゃあそういうことでいいな」

三人ともにやけ顔になっている。

ハヤテは不気味な予感をそれを感じながらも試合はまた始まった。

33話（後書き）

皆さんお久しぶりです

さぼっていたわけではないんですよ。ちょっと風邪で一週間ほどぶつ倒れていました（汗

一応まだ学校には行けてないです・・・

いやー、久しぶりに風邪にかかる能耐性が薄れているのかずいぶんひどくなりました。

まあ、そんなことはともかくとりあえず更新です。どおでもいい伏線もなにもない回ですが楽しんでいただけるようにがんばります。

それではー

34話

「僕の負けです……」

試合は惨敗に終わった。もちろん、ハヤテ側のである。

「あんなの卑怯よ！／＼／＼」

ヒナギクはやや顔を赤くしながら抗議する。どんなことがあったかはそこから判断してください。とにかく、死闘が行われたようです。

「ふふ。勝負の世界は甘くは無いのだよ、ヒナ。どんなことをしても勝つ。漫画でもお決まりのルールだろう？」

そんなことヒナギクの知ったことではない。漫画なんて読まないし、それにフェア精神がそんなこと許すはずも無い。ヒナギクは正等進化の主人公柄なのだから。

まあ、美希はそれを承知の上で言っているのは当たり前で、なんともいやらしいことだ。

「僕は……どうやって生きていけばいいんだ……」

一方被害者１のハヤテは力尽きていた。三人娘による徹底的な利用が行われたようです。使えるものは徹底的に使う。そんな感じで使われたようです。

砂浜に手を着き、一向に立ち上がる気配の無いところを見るとダメージは相当なものようです。

「わ、私、もうお嫁にいけないです・・・」

被害者２。マリアさんも味方にかかわらず犠牲になったようです。三人娘の計画ではそれほどではなかったようだが、乙女なマリアさんにはダメージは大きかったようだ。

何はともあれ、これで試合は幕を閉じた。じりじりと肌を焼く太陽もそろそろ邪魔に感じてきた。

時計を見るともうすぐ昼時だった。熱中していたせいで時間をすっかり忘れていた。

「ご飯をつくってきますね」

そういうことなので、マリアとハヤテは屋敷へと帰っていった。さすがに使用人ということですがすぐにダメージのことはどこかへ行き、

仕事スイッチに切り替わった。こちら辺は一般人とは違うところだろう。

泉たちとしては帰って欲しくなかったが、さすがに仕事ということでは仕方なかった。自分たちのご飯もかかっているわけだし。

ということに残りは5人になった。ちょっと何かするには多すぎか少なすぎかという中途半端な人数だ。

「何しよつか」

初めはそんな話をしていたが、結局やることが見つからず自然と各自やりたいことを赴くままにするという感じになった。

まとまりがないとよくなる典型的パターンだ。

リーダーの代名詞ヒナギクはどうしていたのかというと、まだダメージから立ち直っていなかった。いろいろと上の空状態だった。

「あゝもう、なんなのよ！！／＼／＼」

こんな感じです。

そんな感じで、三人娘はまた海遊び、ヒナギクはそれどころじゃないので休憩、ナギは暑いのがいやなので木陰で涼んでいた。

「まったく、紫外線を浴びて肌年齢を上げて何が楽しいのだ」

そんな曲がった考え方で何が楽しいのかこっちもわからないが、とりあずナギはSOYのノートパソコンのクリアブラック液晶を楽しむことにしていた。

「香霖堂の裏の桜が異常に白くなっているぜ。あれの方が危険な異変の様な気がするんだ」

液晶のなかのシューティングゲームのキャラクターはそんなことをしゃべっている。ちなみにボイスは無い。なつかしいインベーダー式だ。

ナギは相当やりこんでいるようで、敵の弾幕をいともたやすく潜り抜け、確実にダメージを与えていく。ゲームパットなしで出来る極

限レベルを習得していた。

その技は思わず見とれてしまうほどのもので、ちょっと気晴らしに移動途中に偶然見つけたので見に来たヒナギクも同じく画面に釘付けになっていた。

「よし、クリアした〜」

はアー、っとナギが大きく安堵の息を漏らすと、つられてヒナギクもはアーっと息を吐いた。

「どうだヒナギク、私の腕は！」

何回か失敗したステージだったからクリアできたのがよほど嬉しかったのだろっ、柄にもなく声を張り上げて自分の腕を自慢している。

「すごいわね、でもその努力をもう少し勉強に向けられたら良いのね」

正論である。しかし、その現実的な台詞がナギを我に帰らした。

「っぬおおおお！ヒナギク！！！！いつからそこにいたのだ！！！！」

パソコンなんてほっぽりだし、後ろに飛んでいった。集中していた証拠だろうが、まったくヒナギクの存在が脳に伝わっていなかった。戦場だったら死んでいるところだった。

ナギは液晶が割れて無残な姿になったノーパソ姿なんかはまったく気になどせず、なんでそこにいるのかとか、そんなことをヒナギクに言いつけているがヒナギクはまったく聞いていない。

作者的にはそのノーパソに何をしてくれたんだと叫びたい心情だが、金銭感覚の違いを理解しているつもりなのでそこは我慢しておきます。

でも、やっぱりお金持ちなのかヒナギクもノーパソには触れずに話は進んでいった。

34話（後書き）

期待を裏切ってみました

さて、今回はなかなか更新できなかったので長めに書いてみます。
これを書く暇があるなら本編を進めるとかいうツンデレな突っ込み
はなしにしてください（笑）

まあ、更新が遅れた言い訳をしますと、まだ引いた風邪が治らなく
て夜執筆できないことが最大の原因ですね。他にもあるのですが書
くときりが無いので興味のある方は個別にお答えします（笑）

とりあえず、時間と暇と体力が無いのでなんだかこんな話になりま
したが、これから実は作者も忘れていたイベントがある予定です。
多分作者が忘れなかつたらそのうちおきます。それまでは軽く読み

流しちゃってください。

それでは、発作が起きる前に寝てしまうのでまた今度！

35話

「これからずっとそうしているつもりなの？」

ナギの暴走なんてヒナギクには関係ない。猫が喧嘩してくるようなものだ。

ナギの必死の抵抗もいつも通りの態度でそつなく話していく。

しかし、それはナギには不愉快だった。なんだか馬鹿にされている、というか見下されている気がするのだ。周りから見たら見下されていると断言できるのだが、そこは自分のことなので今のナギには理解できないということにしてみらいたい。

実際、年のもずいぶん離れているので高校生が小学生を見る目になっても致し方ない気もするが、微妙なお年頃ゆえ、些細なことも気になる。そこは理解してあげよう。

「もー、うつさいな。私はいま忙しいんだ」

抵抗が無駄だと分かったので、どこから出てきたのか新しいノーパソを抱えてどこかへ行くことにした。

これ以上負けっぱなしでいるのはつらいし性にあわない。いらいるのでこういうときは某巨大掲示板サイトでゆとりを馬鹿にするに限る。

そそくさとノーパソ片手に歩き出そうとすると、ヒナギクに手をつかまれて止められた。

「せっかく沖縄に来たっていうのに何かしないともったいないわよ？」

ヒナギクはどこまでも純粋な心の持ち主だ。せっかく遠くまで来たんだから楽しまなかつたらもったいない、そんな一般人の考え方がいい。

しかし、その言葉はどうもナギには不快だったらしく、

「私が屋敷からこんなに離れたところに来たんだ！何もしないで帰るわけが無いだろう！！」

と、不機嫌に怒鳴りつけた。

しかし、ヒナギクはそんな状況においても今の台詞に含まれるキーワードを聞き逃さなかった。

「じゃあ、いったい何をするつもりなの？」

それを聞いてナギは我に返った。

沖縄に来て何をするのか・・・それは自分の中でひっそりとはあるが、ずっと前から考えていたことだった。沖縄という条件自体は最近ぱっと思いつたことだが、これからやるうとしていることはずっと前からいつかしくはなくてはとずっと考えていたことなのだ。

それはとっても重要なことで、ヒナギクどころかマリアにすら話していない。自分だけの秘密だった。

それがなんということだろう・・・こうも簡単に口が滑ってしまふとは！！！！

「いやっ、別に大したことじゃないんだ。そんなことより・・・」

とりあえず必死に話をそらそうとしたが手遅れなのは自分でも分かっている。必死さがあだに出て焦っているのがバレバレだ。こういうときこそ冷静にしなければならぬ。

こうなったら後はない。ヒナギクも興味を持ったらしく引いてくれそうに無い。むしろどんどん押してくる。

こうしてナギは簡単に追い詰められた。

「さっ、白状なさい」

なんてドSなやつなんだ・・・

ナギはそんなことを考えたが、それで状況がどうこうするわけでもない。

仕方がない。こうなったら少しかだけ適当なことと言ってこの場を切り抜けるか・・・

「本当はマリアとハヤテとだけで来るつもりだったんだが・・・
まあ、それはいいか。

実はな、ちよつとハヤテに話があったんだ。ちよつと重要なことだからふたりつきりになれそうなところに行くことにして、それはいま沖縄にいる」

このとき、ナギはヒナギクの様子の変化を見逃さなかった。

”ふたりつきり”というワードを聞いたとき、わずかだが動揺したような感じだった。

ナギにとってこれはチャンス以外の何者でもない。

「今だ！」

その一瞬の隙を突いてナギはこの場から逃げ出した。ベン・ヨンソンもびっくりする速さで逃げ出した。

「あつ、こらっ！待ちなさい！！！」

しかし、油断していたせいで、ヒナギクが追いかけてようと思ったときにはすでにナギの姿はなかった。この逃げ足に使っている体力を普段使えるようにしたらきつと常人以上の体力はあるだろうに、どうしてこんな無駄なことになしか使わないんだろう。

そんなことも考えながら、良く考えれば追いかける理由も特に無いことに気づいた。

「まったく・・・あんなに必死に逃げることもないのに・・・」

本人は気づいていないが、ダークフォースをメラメラ出しながら攻められたら誰でも逃げたくなる。気づいていないところがさすがドS（ナギ談）。

なんとなく悲しくなったヒナギクは、とりあえず、座って木によりかかった。

日陰の外では、かんかん照りの太陽が砂浜を焼くように照らしている。しかし、意外にもこの場所は日陰で風通しが良いせいか快適だった。

「案外こういう生活も快適ねー。こういうのも幸せかも・・・」

って、何を言ってるの私！！！！　　しっかりしなさい！！」

ついつい、こうも世界が平和で快適だと甘い考えに浸りそうになる。これが世の中の怖いところである。これに打ち勝てなければ……待っているのは死のみである。

「危ないところだったわ……」

こんなところでナギは何を考えているのかしら」

平和な世界では、時間はほとんど自由に使える。しかし、こういう状況下では何もすることが無い、俗に言う”暇な時間”が出来ることが多い。

そういう時は、人は何か考えること以外にはやることはない。

ヒナギクもそれで危ない思想に走りそうになったわけだが、ナギは学校に行っていないときのこういう時間はこういうことを考えているのだらうとヒナギクは思った

のである。

「そういえば、ハヤテ君に何か話があるとか……」

ナギがハヤテにしそうな話……いくつか例を上げてみた

1：新作のゲームの話

2：自分の漫画の話

3：同人誌の話

4：アニメ関係の話

・
・
・

・
・
・
・
・

「大事な話・・・じゃないわね」

こんなことしか思いつかない自分に愕然としていると、頭に何かぶつかってきた。良く見るとビーチボールのようだ。

「あゝ、ヒナちゃん、こめんごめん！ボールとって」

三人娘たちのものだった。

というか、さつき頭にぶつかったときやけに強く当たってきた。痛くは無かったけどきつとあの三人の誰かが狙ってぶつけたに違いない。

そう確信するとなんだかいらだってきた。

「あんたたち！わざと狙ってぶつけたでしょ！」

そう言いながら走って向かうと三人は逃げ出した。これはもう事実で間違いないようだ！

「待ちなさい！！」

こうして四人で仲良く（？）遊んでいるうちに、時間は夕暮れ時になった。

35話（後書き）

お久しぶりです。本当にお久しぶりです。

えっと、今回の言い訳はというと、前回と同じく風邪です。しかも全快の風邪をまだ引きずってました。

とりあえず、それも治り、テストも終了したのでまた執筆を開始します。個人的に待たせている方もいるので早く書きます。できるだけ。もうダッシュで。

だからそんなに物を投げないで下さい・・・
怒らないで・・・

・・・

なんて、皆さんがそんな野蛮な方だとは思ってませんがwww。それではまた！

See you

36話

「うーん！今日も楽しかったねー！！」

みんなで夕食を食おわり、とりあえずリビングに集まっている。屋敷はとてつもなく広いので部屋はいくらでもあるのだが、なぜか分らないがリビングに集まると

というのが習慣となりかけていた。

「そして、今からもっと楽しくするのだー！」

日ごろ家の中にこもりがちなお嬢様方三人娘は、慣れない直射日光で焼けた肌の痛みなんかすっかり忘れて次なる遊びに取り掛かる。相変わらずハイテンションだ。

当然のごとく、ナギは日向にいなかったたので焼けていないが、なぜかヒナギクも平然としているのは誰も気がつかなかった。

三人娘は各自持ってきた鞆からおもちゃを取り出し、どれにするか決めている。ちなみに鞆の中身の80%は遊び関係だった。としごろのお嬢様方にはもっと他のもの

もあるかと思うが、彼女らの娯楽への執着心は並ではない。比喻で表現するならばその大きさは北極星にもなろう。

まあ、そんなことはどうでもいい。こういう時だけ機敏な動きをする三人娘によりもうゲーム大会開催が宣言された。

「さあみななもの！今夜も遊びつくそうぞ！！」

「・・・・・・・・」

右は・・・・・・・・誰もいないな

左は・・・・・・・・いないな

上は・・・・・・・・いかんいかん、この前メタ ア4やりすぎたせいか
そんなことまで考えてしまうとは。バーチャルとリアルは区別せん
とな。

皆には・・・・・・・・気づかれてないな。

金髪の小さな少女は忍び足で、誰にも気づかれず、その場から消え
ていった。

いや・・・・・・・・

一人だけ気づいていた。ヒナギクはその択一した能力のおかげで気
づいてはいた。だが、

「おいヒナ、よそ見るなよ。順番飛ばすぞ」

すぐに注意が他に行き、そのままそれを思い出すことはなかった。

「今日も皆さん楽しそうでしたね」

変わってここは調理場。ハヤテとマリアはここで後片付けをしている。いつもはハヤテ一人でやるところだが今日は人数が多いので二人で手分けして作業している。

ちなみに、三千院家が出すような料理は無駄に皿を使うので皿洗いは一般人には意外と大変だったりする。

しかし、そこは三千院家使用人。一般人なんていないのだ。二人とも慣れた手つきで目にも止まらぬ速さ・・・は言いすぎだがさくさくと進めていく。

「お皿洗いはいくら手馴れていても時間を短くはできないんですよ。汚れは時間をかけてしっかり落とさないと一流の使用人とは・・・」

「誰に言ってるんですか、マリアさん・・・」

マリアは慌ててまた作業を始めた。人のしゃべってる途中に勝手に入ってくるからですよ。

ほら、そんなことするからハヤテ君に気味悪がられてますよ。

「そういえば、家の中で普通にメイド服を着ていられるのは心をや
つてしまつてないと出来ない（ ）とか・・・」

ハヤテ君・・・そんなこと思ってたんですか（怒）・・・

その瞬間、確かにハヤテは不気味な音を聞いたという。プチッとい
う何かが切れる音を。

「ハゝヤゝテゝくゝん？」

ゴゴゴゴゴゴ・・・

そんな音なっているはずはないのに変な音が聞こえる。

あるはずがないのにマリアさんの背後にダークフォースが見える。

「あら、ハヤテ君も何言ってるんですか？そんなものあるわけない
じゃないですか。ハヤテ君、心が病んで『し、失礼しました！！』」

「

ハヤテはマリアの攻撃に耐え切れず逃げ出してしまった。とにかく

全力で、マリアから遠ざかった。

まあ、迫力もすごかったし致し方ないだろう。

「あつ、まだお片づけ終わっていないですわ．．．逃げるタイミングが悪くないですか．．．」

マリアは後からそんなことに気づいたが、もうハヤテがどこに行ってしまったかなんてわかりっこない。きっとマリアの視界に入らないどこか遠くに避難しただろう

。

「仕方がないですね．．．一人でやりますか．．．」

自業自得だということは一切認めずに、一人さびしくまた作業の続きを始めた。

「まったく、二人は何をしているのだ？」

ナギがこっそり二人をのぞくと、なにやらハヤテがマリアにいじめられていた。

これ自体はハヤテのことなのでまた地雷踏んだなと納得できたのだが、そのあと目にも止まらぬスピードでどこかに走っていったのだ。あまりの速さだったので隠れ

損ねて鉢合わせしたのだが、ハヤテはそうとう必死だったようでナギに気づかずにそのままどこかへ走り去ってしまったのだ。

ハヤテに用があつてきたのに、肝心のハヤテがいなくなつてはしょ

うがない。

「まったく、仕事中に遊んでるなんてたるんでるな！東京に帰ったらまた一から教育しなおさねば」

そんなことをつぶやきながら、ナギもハヤテの後を追って屋敷のどこかへ消えていった。

コミックス16巻参照のこと

36話（後書き）

いい加減更新しなくてはとは思っていても意外とかけてない隣のマニアです。

レコーディングでPCを使っていて意外と書く時間が取れないこのごろです。

それでは！

37話(前書き)

最近コードギアスにはまっています

News

新作投稿しました！

URL: <http://ncode.syosetu.com/n7236e/>

37話

「はあ、また人を怒らせてしまった・・・」

全力でマリアから逃げてきてたどりついた場所、もともとマリアから遠く天に近い場所。分かりやすく言うと屋上にいる。

優しくもさびしくもあるつくの光に照らされて、ハヤテは遠くを見つめながら反省する。

「いつもいつも怒らせてばかり・・・ヒナギクさんもお嬢様も、絶対に迷惑をおかけしてるだろうな」

ハヤテだって能天気 to 毎日生きているわけじゃない。反省をして、次はこうならないようにがんばろうと思う。けれどもなぜかいつも怒らせてばかり。

そもそも、なぜ怒ったのかわからない場合が多い。それに気づけない自分が悔しかった。

「僕って、鈍感なのかな・・・」

深くため息をつく to 、突然後ろから声が聞こえた。

「まったくその通りだよ」

後ろを振り向くと、汗だくになったナギがいた。まったくいつからいたのか分からなかったが、それよりもなんでそんなに汗だくなのかが気になった。

「ハヤテがあんなに急いで走るから、その後について走ったらこれだよ。屋敷の中だって広いんだから私のペースを考えて走るべきだよ」

なんで走ってまでこんなところに来たんだろう。

また新しい疑問が生まれた。さっきまで皆と一緒に遊んでいたはずなのになぜここにいるのか。そして何をするのか。

考えたところでまったく分からない。いつもの地雷パターンといっしょだ。

「それだからハヤテは鈍感だっけって言うんだよ」

ナギは海が見えるほうへと歩き出した。ハヤテもそれについていく。

「女の子って言うのは、とても繊細で、男の子が思っている以上に

いろんなことを考えているんだ。わかるか？」

それはわかっている、わかっているつもりだ。昔は、それができなくて、大事な人を傷つけて、怒らせて……

もうこれ以上にも失わない

そう決めたのに

「だ・か・ら、それだから鈍感だって言ってるんだよ」

何を言っているんだろう。さっぱり意味が分からない。

「がんばって他の人を考えているのは誰から見てもわかるさ。でも、そうやって必死になって逆にお前は表面しか見えていないんだ」

表面だけ……

そうなのかもしれない。いや、きっとそうなんだろう。本当の気持ちには表情じゃなくて心にあるんだ。

今まで心の奥底でつかかっていたものが取れた気がした。いままでどうしても気づけなかったことによろやく気づいた気がしたのだ。

「まあ、それって難しいことなんだけどな。ハヤテは特にそれが苦手だからさ」

じゃあ練習問題だといってナギは言った。

「私のハヤテへの気持ちは分かるか？」

これは練習にしてはちょっと難しい問題だ。ハヤテからしてみればいつも突然怒り出したり女装させられたりまったくわけの分からないことをナギはしてきているの

だ。もちろんそのときのナギの考えていることなんて分かったことがない。今でも良く分からない。

それでも大体は予想できなくもなかった。

一緒に初日の出を見に行かせてもらったり、自宅の遊園地にも行った。ゲームだって最近はお相手をさせてもらえるレベルになった。

まだまだ至らない事だらけだけど、いつかは”家族”のような存在になれたらいいなと思っていた。

「まだまだだけど、家族……みたいな感じに受け取ってもらえていれば光栄です……」

それを聞くと、まるで分かっていたかのようにやっぱりなとナギは言った。

「まだまだだな・・・私はな・・・お前が・・・」

そのとき、確かにナギは何か言っていた

聞けたはずなのに、それはできなかった

下の階でトランプをしていたはずの皆が突然現れたから

「ニャー……！！！！／／／／美希ちゃん！！！！未成年が見てるこの小説でそれはまずいってばああ！！！！／／／／」

屋上へと続いている扉を力ずくで押し開け、壮絶な叫びと共にまず三人娘が現れた。

どうやらランプで負けた罰ゲームで泉がいじめられているらしい。とってもはしたない格好になりかけた泉が助けを求めてやってきた。

泉の左右に取り付いた美希と理沙が思いつく限りのいたずらを泉にしでかしている。

けっこうやばめの格好の泉は最後の見方、ハヤテにしがみついて二人を追いつけてもらった。

「おおい！お前ら！なんでここにいるのだ！」

この予想外の展開にナギは大慌てだった。誰にも聞かれていないことなんて大前提で話していたからだ。しかも、せっかく考えていた雰囲気は台無しだ。

しかし、ナギのそんな思いなんて微塵も知らず、世の中は無常にも

勝手に回っていく。

「さあハヤ太君、泉をこっちに渡してもらおうか」

ゲーム大会をやっていたこともあり、皆いつもよりテンションが上がっている。もうナギなんて視界に入っていないし、面白そうな展開が始まった今、美希と理沙の

やるべきことは決まっていた。

ハヤテはもちろんダメですよといったが、そんなことはとくに予想済みだ。

「それとも、やっぱり嫁は私たちになん渡せないか？」

「んっ ￥（ ） / ひゃ！？ / / / /」

理沙の鋭すぎる攻撃にハヤテは対応し切れなかった。言葉にならない叫びが台地を伝わっていった。

ハヤテとしては、泉は守ってあげたいけれども、そうすると理沙にいじられること間違いないし、でも泉を二人に渡すのは人として許せないし……

ハヤテが頭の中で葛藤しているとき、階段からマリアとヒナギクが現れた。急に皆飛び出していったのでついてきたといったところだ

ろっ。

このとき、ハヤテは名案を思いついた。

（マリアさんに頼ろう！）

しかし、それはバッドエンドフラグ発生ポイントだった。

マリアさんが視界に入ると、すぐにハヤテは駆け寄って助けを求めた。経験が豊富なマリアさんほど頼りになる存在はない。しかし、返ってきた答えは冷酷なものだった。

「ハヤテ君がメイド服を着ればいいんじゃないですか？」

「・・・マリアさん、お酒入ってます？」

普段のマリアからは想像も出来ない答えが返ってきたので、思わず思ったことがダイレクトに口からアウトプットしてしまった。

今のマリアさんはランプ大会で優勝してとってもハイなのだ。顔には出ないが心は躍っているのだ。ハヤテはそこまで読みきれなかった。

プチっ

確かに、ハヤテはこの日二度目のこの音を聞いたという。

「誰がお酒が入ってるですって、ハヤテ君？私、17歳なんですよ？未成年なんですよ？」

いつもの癖でまた大人っぽいところいうことをしていそうという発想がいけなかった。もう完全に怒らせて閉まったようだ。いつものパターンになると必ずハヤテ

ではどうすることもできなくなっている。

今回も例に漏れず、マリアは不気味な笑みと共に、何か名案を思いついたようだ。

そしてすぐにSPにあるものを手配させて、それを手に持ちハヤテを捕まえて皆に高々と宣言した。

「さっ、皆さん。ハヤテ君にこれを着せますよ」

さっきより冷酷になったマリアさんスマイルだけがハヤテの視界に入った。マリアの手の先にある服は怖くて直視できなかった。

「さっ、ナギちゃんも手伝うよ」

黙って見ているしか出来なかったナギも、いつの間にか着替えを手

伝わっていた。

「キャーーーー！！！！！！！！」

ハヤテの悲痛な叫びは、深夜まで続いたという。

37話（後書き）

マニア Secret bad end 1

「ハヤテ、お前が好きだ」

というのはまだ早い

38話

「はあ、昨夜は疲れた……」

あれから、ずっとお着替えごっこの人形役をさせられていたハヤテだが、今回はいつも以上にバリエーションが豊富で、ゴスロリ、巫女、和服、コスプレなどよくまあ、こんな集めたなというほどだった。

深夜遅くまでにぎやかに進んだわけだが、いつの間にか皆寝ていて、仕方なく皆を運んであげたわけで、当然一番遅くに寝たわけで、当然執事が寝坊するわけもなく、当然一番寝不足なわけだ。

無理やり着替えさせられた服などがまだ散乱しているので、まだ皆が寝ている横で片付ける。

服を見ているだけで昨日の様子を思い出すので素早く済ますことにする。なかなか悲惨でもしろいことになっていたのでハヤテと読者さんの許しがあればすぐにでも載せたい。

「まあ、何変なこといつてるんですか！」

怒られてしまった。でも面白かったのになあ。

まあ、そんなことはどうでもいい。ハヤテが大声を出すから皆がおきそうになっている。

おっと、美希が何か言っている。

「さあハヤ太君、最後はこれを着てみようか」

美希の手に握られていたのは………もはや服ではなかった・
……隠すべき最小限しか覆われない、服という名詞が当てはまら
ないものだった。

「い、、、嫌だーーーーー!」

ハヤテはそれを見ると真っ先に逃げ出した。まあ、しょうがないだ
ろう。

だが、

「んゝ、逃げたら駄目だ・んゝ、むにやむにや……………」

美希はまた寢息を立てていた。要するに、さっきの寢言だったのだ。
迷惑な寢言である。そうだとはい知らず、ハヤテは全力で逃げていっ
てしまった。本当にどこまでも不幸な少年だ。

こんな感じで、沖縄最終日の朝は始まった。

この日は、東京に帰るのがあまり遅くなるわけには行かないので日が暮れる前にはここを出発することになっていた。ただ、最終日だけあって完全にフリーにしてある。予定があまり機能していなかったのでフリーはいつもと同じかもしれないが。

海は昨日実際はそうではないが嫌になるほど遊んだし、また遊園地に行くのも微妙である。だから、今日は自分たちで何かをして遊ぶ日ということなのだ。

と、いうことで、朝ご飯を食べ終わったところで皆で作戦会議が始まった。

ところが、遊びのプロフェッショナル三人娘も今日はいいいアイディアが思いつかないというまさかの事態が起こった。台風でも来るんじゃないだろうか。

「我々もいつも遊んでいるわけじゃないからな」

「私たちの本性がでてしまったな」

なんて嘘を言っているが、ねたが尽きているのは本当らしかった。なので、美希はとりあえずナギにでも振ってみた。別にいい答えが来るとか期待したのではなくなんとなく振ってみたのだ。

そうしたら、予想外の好回答が帰って来た。

「コイの話でも・・・する?」

えっ!?!というざわめきが部屋に響いた。それもそうだろう。まさかナギからこんな修学旅行で普通の女の子が言うような言葉が出てくるなんて誰が予想していよう。あのマリアさんですら開いてしまった口を手で押さえている。

でも、これは結構いいかもしれないと思った。もともと何もねたがない上、外で思いつきり遊ぶほど時間もない。朝っぱらから話すことでもない気がするが、きっと盛り上がることだろう。

ということで、反対ゼロでコイバナ大会が開催されることになった。

「さあ、ついにやってまいりました、三千院家主催、第一回コイバナ選手権が開催されます！」

「偶然居合わせた七人のアスリートたちによって激しいバトルが繰り広げられます！」

「解説は私、朝風理沙と」

「花菱美希でお送りいたします」

つながっはいないけど一応本物のマイクで実況が始まった。雰囲気盛り上げているわけだが、その二人も選手なので油断は出来ないむしろ、二人は大会から逃れるために実況をやっていると思われるが、このメンバーではそれは通用しない。この二人の選択が今後どう出るか、どうにもならないのか、今後に期待がかかる。

一応大会なのでルールがあるので説明する。いたって簡単なので読者の皆さんも覚えてお友達やご家族、兄弟姉妹でやってみるといいでしょう。その先の結果は責任を負いかねますが。

初めに各選手さいころを2回回し、出た目の一番小さい選手から時計回りに回っていく。

初めの選手は、自由にどんな話からでも切り出してよく、ある一定（ある程度恋話が局面に達するところ）のところで、次の選手にパスする。パスするタイミングは自分で決めてかまわないが、回りの空気を考えて行うこと。

次の選手は、自分の前の選手の話の最後から連想されるところから話を始める。こちらでもパスするタイミングは自由。

これを繰り返していき、ねたが尽きた人が外れていき、最後まで残った選手が優勝となる。

今この場で考えられたルールなので多少の無理はあるかもしれないが、とりあえず今回はこれが適応される。

ということ、さっそくルールに則って、

『ダイス　ール！』

皆で仲良くサイコロを振った。用意された台の上をコトコトと小気味良い音を立てながら次第に回転を弱めていく。まさしく運試しというにふさわしく、逆らいようのない何かによって数字が決められていった。

さて、一番数字が小さかったのは……………

「あれ、これってなんて読むんだ」

美希だった。彼女の手には”1”を示したサイコロがあった。ご愁傷様です。美希の額には今までに見たことがないくらいの冷や汗が浮かび上がっていた。そうとう焦っているだろう。

「これ（１）って、７だよな。一番大きい数だよな？」

しかし、いいえ違いますという目が皆から向けられた。もう逃げ場はないようだ。

「さあ、さあさあさあ！」

追い詰められた美希の明日はどっちだ！？

38話（後書き）

お久しぶりです、皆さん。

ここでひとつお知らせがあります！

なんと、この小説も先日100000HITを達成いたしました。
現在は102000HITほどです！

これもひとえに皆様が読んでくださっているからです！ありがとうございます。
ございます。

ということで、10万ヒット記念に以前からプロットだけあった未
発表作品

「ハヤテのなく頃に」（ひぐらしのなく頃にクロス）

を記念に一部期間限定公開することにしました！

ひぐらしを知らない方でも楽しめるものにしてあります。前半部分
のみの公開ですが、是非楽しんでいただけたらと思います。

次回投稿時に掲載予定です！

それではまた！

ありがとう20万HIT!特別読みきり ハヤテのなく頃に プロローグ(前書

この物語は「初恋物語」とはまったく関係ありません。
全くの別の物語です。

ありがとう20万HIT！特別読みきり ハヤテのなく頃に プロローグ

ハヤテのなく頃にの掲載は終了いたしました。

感想等がありましたら、感想または作者メッセージから送っていたけると嬉しいです。

せっかくですので、この話を書こうと思った経緯を書こうと思います。

漫画版、ひぐらしのなく頃にシリーズは全巻そろえているのですが、もともとアニメをみていたのですが、アニメで省略されていたところを書いてあり、またヒグラシという作品のすばらしさを体感しました。

原作ももっていますが、残念ながらプレイしている時間がまだ十分に取れていません。

そんなわけで、とても奥深い話に深い感動を覚え、この感動を私の作品でも再現できないかと思い、書いてみたのがこのハヤテのなく頃にです。

今回投稿したのはプロローグ部分のみですが、アバウトにですが最終回までできています。ただ、原作並みの完成度を出せているかという、否です。

もっと煮詰めて、もっと奥深く出来れば、連載するに足りると思いますが、現時点では時期尚早だと判断したのでお蔵入りしていたのですが、せっかくの20万HITということで、書き直ししながら投稿させていただきました。

ブログだけでは、これからの展開等がわからないので、正直な話よくわからないかもしれませんが、オリジナルの展開を含んだ形となっています。

作者自身は、この話をとても気に入っているので、フルにいつかは掲載したいなと思っています。

そんなこんなでしたが、いつまでもブログを掲載していても仕方がないし、そもそも初恋物語とはまったく関係がないので、期間限定とさせていただきます。

しばらくは、初恋物語を完成させるほうを優先して、もっと頻繁に更新できるようにがんばっていきます。
これからもよろしく願いしますね！

39話

「ううう……」

めずらしく本当に困っている美希がそこにはいた。もちろんそんな滅多にない光景を三人娘のメンバーたちが見逃すはずがない。きつと執事あたりから手配されたであろうカメラをパシャパシャと容赦なく光らせる。

しかしまあ、困った姿の美希もなかなかかわいいものがあつて、さらにカメラのシャッターを押すスピードを加速させる材料となっていた。じゃっかん頬を赤らめているところがまたいい。

「あれー、美希ちゃん？もしかして恋の話、ないのかなー？」

いつもと違う美希を前にして若干テンションがあがっているらしい泉が、いつもよりも強めに美希に仕掛けてくる。その姿はなんだかりミッターが外れた子供のようでなんだか怖い。

（くそっ、何で私がこんなめに！いや、待て。今は冷静になるんだ私。今はどうやってこの場を切り抜けるのが重要だ。泉の挑発に乗って変なことでもしゃべったらそれこそあっちの思う壺だ！考えるんだ私！）

「あれー、変なことでもしゃべったらって、しゃべれること、あつ

たつてことー？」

やってしまった。モノローグのつもりが声に出ってしまった。何でもこ
ういうときに限ってドジが出るのか。自分を恨んでも恨みきれない。
っていうか、なんで自分がこんなことにあっているのだろう。今ま
でそんな罰を受けるようなことを私はしたのか、いや、してないだ
ろう！（してますよ）だいたいいつも私はみんなの笑いの為にどれ
だけ自分を犠牲にしていることが皆分かっていないんだ！（楽しん
でるだけです）私がうじうじしてる理由なんて何もないじゃないか！

「あー、あるとも！私も健康な一女子高校生だ、体をもてあます事
だつてあるさ！」

キラーン

待っていましたといわんばかりに泉と理沙の目が光った。いや、実
際には光っていないが、何か視線から殺気というか、それに近いも
のを第六感で感じ、視覚が具現化したとったところだろうか。

話がそれだが、二人はこの瞬間を待ちわびていたのだ。美希がぼろ
を出すそのときを。じつと地道なつみあげを繰り返して。その達成
感と喜びに浸りつつ、新たな展開を想像して二人の表情はさらにに
やけていく。

反対に、美希はというと顔が青ざめていた。たとえるならラーメン
屋の店長が客にラーメンと間違えてそばを出してそれに気づいた瞬
間くらい青ざめていた。もっと分かりやすく例えるなら、外で働か
なくても儲けられるじゃんとかいって下調べなしで始めた株取引が、
最終的に200万の赤字になった二トくらいだ。

「ハヤテ、ああやって熱くなりすぎて人生に失敗するやつって結構いるって聞いたが、あながち嘘じゃないのかもな」

「うるさいわ！」

あまりにも痛いところをナギに突かれ、柄にもなく声を張り上げることくらいしか思いつかなかった。っていうか、本当にそういう失敗をしないようにと心の中で誓ったくらい本人はさっきのことを反省している。

さて、こんな感じでナギと戯れたりして時間を稼いで見たが、どうやらそろそろ限界らしい。ついに壁に隅に追い詰められてしまった。

「さあ、さあさあさあ！」

こうなったら話すしかないのか……
あれを……

「分かった話そう」

重い口を開いた。

「あれはずっと、ずっと前のことだ。ふつ、私もまだそのころは未熟でな、不覚にも男子に揚げ足を取られたりする場面があったんだ。ふつ、未熟な私はまだ反撃するすべを身につけていなかった・・・いや、身につけていてもそれを実行できるほどのスキルを得ていなかったんだ。」

そんな時だった。そいつはどこからともなく見ず知らずの私をかばってくれた。それどころか圧倒的に人数の多い敵をけちのめしてしまった。そのときだった・・・私が始めて人というものを意識したのは・・・」

おーという声が上がった。しかし全員からではない。テンションが上がりまくって頭が回っていない泉ともともとあまりこちらには詳しくないマリアやナギからだった。

「美希ちゃんすごーい！それでそれで!？」

それにしても泉がハイテンションだ。こういうテーマだから乙女としてやはりモチベーションが上がるのだろうか。そんな泉を押さえ、

「もうこれで終わりでもいいだろう？私としては結構しゃべったんだ。交代してくれ」

事情を知っている方ならばこれがこの場にいる誰かを指していることにお気づきだろうが、わかっていない泉には真新しい情報が入っ

てきているも同然だ。ということで満足したということで交代OK
ということになった。

「ちょっと美希、どういふことなのよ」

やっと開放されて、美希が騒ぎの中心から帰ってくると、ピンク色
の美しい髪（髪）の少女が話しかけてきた。

「いいじゃないか、なんかそれっぽくなっただし。泉もなんか妄想を
繰り広げて信じ込んだし。まあ、嘘じゃないだろ？」

「まあ、それはそうだけど・・・」

今となつては遠い昔のことだが、そのころから二人はとても仲が良かった。今もそうだが、なんとなく歯車がかみ合う存在なのだ。それを少しでも意識しているからなのか、二人の顔は少し赤くなっていたという。

39話（後書き）

まだまだ続きますこのシリーズ。
次に犠牲になるのは……（笑）

1 / 26

なんだかなかなか更新できていないのでちょっと思いつきで書いた短編をひとつ書きます。くだらないので飛ばしてしまってもOKな感じです（笑）
暇つぶしにどうぞ。

短編：マジック

「ハヤテー、ちょっとそこのV IO取ってくれ」

三千院家はただいま調べ学習の真っ最中。自分の気になることを調べてみんなの前で発表する例のあれだ。

なぜ学校嫌いの風がそんな面倒くさいことをやっているかというと、

「こういう発表はね、意外と授業態度に響くの。今度の発表に出ないといくらテストが良くても授業態度の欄、Aから下げるわよ」

と成績を人質に取られたのだ。負けず嫌いの風なので、すべてAでないとヒナギクに敗北したことになるらしい。ということとでただいま全力投球中。こういう無駄な努力をもっと普通に使えていればもつとこの子は偉くなるに違いない。

「ホレ風、そこ書き漏らしがあるで」

ちなみに、偶然遊びに来た昨夜さんもお手伝い中。といってもこんな様に指示をなんとなく出すだけだが。

「あー、疲れるなー。いつそのことすべてデジタル化してパワーイントで・・・」

「そんな事言っていないで早くやってしまわないとだめですよ、お嬢様」

珍しく風が精を出しているが、あまやかしてばかりでは一流の執事にはなれない。きちんと注意もしなければ。

そんな感じののどかな日。室内には窓の近くの木に止まった鳥の聲が響き渡る。

「あ、字がかすれてきた」

もくもくと作業を続けていたところ、どうやらマジックペンのインクがなくなってきたらしく字がかすれてきてしまった。

「おー、風ががんばった証やな」

目に見える努力の成果があってうれしいのか、めずらしく昨夜の言葉で満面の笑みを浮かべた。

さて、それじゃあ新しいペンでも見つけてまた書き始めようかと近くに散らばっていたマジックをあさる。

「あれ、黒がないじゃないか」

どうやら偶然黒を切らしているようだ。

と、そこへちょうどいい具合にハヤテがお茶を持ってやってきた。

ここでペンを頼まずにどうして執事が必要だろうか。いや、ハヤテの主であろうか。

ペンが出なくなるほどの努力をした気分のよさが残っていて、とても済んだ気持ちで高らかに言った。

「ハヤテ、マジック！」

「・・・耳がおっきくなっちゃった」

・ ・ ・ ・ ・

とあるのどかな一日でした。

どうでしたか？久々にやっちゃった作品でした（笑
ちなみに、実際にこれをやった人がここにいます（それでこの小説
を書く気になりました

40話

「で、次の人は……」

美希による熱もさめてきたところでそろそろゲームの続きを再開する。なんだかさっきの様子はゲームをやっているような状況ではなく、半分いじめが入っている気もするが気づかなかったことにしよう。

ゲームのルールでは、時計回りに回っていくことになっている。指名にすると悲惨な事態に陥る可能性があるからだ。それで、美希の右側には誰がいるかというと……

「あら、私ですか？」

マリアさんだった。

「なんですとー！？」

マリア当たったとわかった瞬間、ほぼ全員の顔に焦りの影が見えた。なぜかって？マリアさんに恋の話などできるはずがないからだ！17歳にしてメイドをするというありえない生活がら、恋愛など二の次だったのだ。もちろん、それは周りの人間は誰もが気づくことなわけだ。

なんだか悪口を言われているようだ。マリアは気づいたが、まあ、

自分でも自覚しているらしく口に出して反抗するのはやめたようだ。というか、今更ながら、ここにいる全員が恋話などあるのかという疑問に全員がぶちあたった。この企画は間違いだったのではないか……

しかし、今からやめるというのも何か乗り切らない。やるしかないか。それに、意外とマリアは平然とした顔つきをしている。もしかしたら取って置きのおねたがあるのかもしれない……などと思わせてくれる。

「それではマリアさん……お願いします」

さつきまでとは打って変わって、話を一声たりとも聞き逃さないようにするような緊張感の中に始まった。

今までシークレットとされてきたマリアの過去。だんだんと学校での成績や振る舞いが明かされてきたが、いまだなぞに包まれたところが多い。少しでも情報が手に入るだけでも興奮mのなのに、さらに恋愛について知れるなら……鼻血ものだろう。ちなみに鼻血をたらしているのは今のところは作者だけであることを伝えておこう。

（なんだかまずいことになってしまいましたねえ……これってどうするべきなんだろう。冷静に大人の対応を試みたんですけど、なんだか逆効果だったような気がしてきましたね……どうするべきなんだろう、教えてゴッド！）

今日は忙しいのー）ゴッドの声

当然ゴッドは教える気があっても耳に届けてはくれないので自力で何とかするしかない。

（こうなったらコミックス18巻のネタを使うしかありませんわね・
・・）

まさかの最新刊情報だが、マリアにそれ以外の経験がないので許していただきたい（執筆時1/18）

「あれは、とある人の用事に付き合って町に出たときなんです、その・・・男の方と一緒にショッピングとかしながら徘徊したことがあるんです。」

ギャラリーからはお〜という声上がる。若干1名顔が赤くなっているのがいたり思考中の顔になっているのがいるが、今は気にしない。

「正直な話・・・結構恥ずかしかったですけど・・・私が高校生の時も何度か勢いに乗せられて一瞬仲良くなった人がいたんですが、そういう人たちともまた違う気分になったというか・・・いや、あのっ、決して変な意味ではないんですよ！本当ですよ！」

余計なことまでしゃべってしまった。本人も激しく後悔しているほどに。どうやら、こういう場面は口をやわらかくする効果もあるら

しい。いや、本当のことを言うとこの状況ではこういうことを言わざるを得ないのだが、なぜか言わなくてはいけない気分ではなく、言いたい気分だった気がしたのだ。それがまた最高に恥ずかしくて……。

今の話を聞いて、さっきまで顔が赤かった少年はさらに赤くなり、それでも済まないのか咳き込んでいる。

唯一少年の変化に気づいた少女も、なんだか自分がかかわっていて自分のミスを今更になって気づいたような表情をしているのだった。思案顔だった桃色の方は、何かひらめいたあと、急に難しい顔になった。まるでもしかしたら戦う相手が増えて、しかも強敵であるかもしれないといった感じの顔だ。

しかし、そんなような顔をしているのは4人だけで、ほかのメンバーは始めて聞く話にはしゃぎまくりの妄想しまくり。まだ冒頭部分なのに話はあつという間に結末の予想まで飛んでいった。

年頃の少女たち特有の行き過ぎたまったくの事実無根の妄想は収まるところを知らない。

「まっ、まさか！あのマリアさんが……」

ときどきそんな声が聞こえてくる。マリアにしてみれば、いったい自分のことがどんな様に言われているのか非常に気になるところだが、よけなく口をはさむと厄介な自体を招きかねない。ここは大人の17歳の我慢。

しかしながら、健康な少年少女が読む小説ではかけないようなことまで妄想は広まってしまったようだ。

「なにー！？ハヤ太君とベッドに『ちよつとなに言ってるんですか

ああー！！』」

もうごちゃごちゃだ。

ハヤテが加わったことによりよりカオスフィールドが広がったので、もはや私に描写でいる状況ではない。ということでこの場は割愛。

「なんだか助かったようですわね。別な意味では負けている気がします」

そんな感じでマリアが平静を取り戻してどこかへ消えていき、戻ってきた時には昼食の時間だったという。とうぜんマリアは昼食を持ってきて戻ってきた。
しかし、

「もういい加減にしてくださいーい！」

一番の被害者はハヤテになっていたという。

完

「いやいや、まだ終わりませんよ、終われませんよ――――！！！」

40話（後書き）

さてさて、コイバナ編も終了です。やたら時間がかかってしまいました。作者の経験が少ないこともあるんですが、だいたいこれでも考えて書いたんですが、何も思いつかなかったのであえて何も書かなかった次第です。うーん。愛って難しい。

ということ、もう少しで本土に帰還ですね。なんだか疲れてきましたがもっと面白い展開を期待してくださいっ！

41話

長かった戦闘は終わった。

何も戦闘ということはなかっただろうという方もいるかもしれないが、今のこの有様を見てくれたら納得してくれるだろう。

「あー、やってらんねー」（美希）

「もう、いいです」（理沙）

「ニートになってやろうか」（なぎ）

悲惨だ。状況的にも人間的にも悲惨なことになっている。

なぜこんなことになったのかというと、先ほどのコイバナ大会で燃焼したからなのだが、完全燃焼ではなく若干の不完全燃焼が混じっているからまた面倒くさいことになっている。

やたらと盛り上がって見たは良いものの、あとから冷静に考えてみると自分たちが勝手に盛り上がってしまっただけで、肝心なおいしい部分を聞き出せていないことに気づいてしまったのだ。

特に、普段からS路線を走っている彼女らは今回の失敗は特に許せなかった。普段の自分だったらもっと弱みを握れたのにと考えると悔やんでも悔やみきれない。

（まったく、そんなことばかり考えているからわしは助けんのじやよ。まっ、いい子でも助けんがな！ほっほっほ！） ゴッドの声

そんな雰囲気の中、どよどよした感じで昼食をとり終わり、ナギの言ったような二トつばい疲れきった感じでだらだらソファに座っている。

（いかん、なんだか皆さんお疲れ気味だ・・・ここは僕が何とか一発芸で！）

「いらん事はしなくて良いからな、ハヤテ」

まるで心を読み取られたような感じでとめられ、ハヤテは言葉が出ない。ナギを見てみると目を閉じて寝ているようだった。心眼でも開いたのだろうか。

「あらあら、皆さんお疲れみたいですな」

マリアさんがお茶を飲みながら言う。なぜか彼女から勝利のオーラが出ているような気がするが、気のせいだろう。別にさっきまで散々いじつてくれてありがとうございましたねとかいやみしたらしく心の中で言っていたりはしない。きつと。

ハヤテは意気込みが頭から碎かれてしょぼしょぼとどこかへ行ってしまった。おそらくキッチンかどこだろう。

「ハヤ太君はどうしたんだ？」

突然元気をなくして出て行っただのを見て美紀がナギに聞く。まあ、外から見たら何が起こったかわからないのも無理は無い。

「いや、なんか余計なことをしてくれそうな予感がしたから止めただけですけど」

簡単に言うと”勘”というやつだ。身近な例で言うと、視線を感じるときなどはおそらくこれに分類されるだろう。人には聴覚でも視覚でもない第六感というものがあるといわれている。普段から咲夜に教育されているせい、ナギはこの手の勘はわりと研ぎ澄まされている。

しかし、せっかくこの墮落した雰囲気を変えるチャンスであったのだが、つぶしてしまった。後悔はしていないが。

「そろそろ・・・帰るか・・・」

暇なのでナギがつぶやいてみた。実際、もうそろそろ沖縄を出ないと夕方までに関東につけない。

そんな何気ない一言から、また新たな乙女の戦いが始まるうとは、作者でさえわからなかった。

T
O

B
E

C
O
n
t
i
n
u
e
d

41話（後書き）

終わるところを知らない乙女の熱い戦い。

その行方は作者ですらよそう不可能です（笑）

明日はどっちなんでしょう

42話

「よし！決めた！」

ナギが威勢良く立ち上がった。先ほどまでの墮落した雰囲気はまるでそこにはない。

背後からは”じゃじゃーん”という字幕が出そうなほどの勢いで、もはやナギなど気にもしていない女子メンバーを見渡す。

その希薄は、窓のそばにある木にとまっていた鳥が驚いて逃げ出すほどだ。

（ちょ、いきなりなんなんだあのgurrlは） 鳥の声

さてさて、今度は何をやらしてくれるんだか。

部屋一帯がそんな空気に満たされている。だがナギはそんなことを気にも留めず（むしろ気づいていない）、高らかに声を張り上げる。

「飛行機の座席争奪戦の開催だ！」

修学旅行を経験した方ならば誰もが知っているはず、隣の人是谁になるのか決めるあれである。

三千院家専用ジェットで行くんだからそんな関係ないんじゃないかと思う方もいるかもしれないが、帰りは直接三千院宅まで行くので割と小型で、座席はエコノミーほどではないが割りと接近している。

そして、ナギはハヤテの隣に座りたい。これで競わないで何が恋だ

というのがナギの言い分だ。

冷静な方の、こっそり隣に座ればいいジャンとか言う意見は受け付けてはいない。それに、行動派の誰かが席を横取りしないとも限らない。正式に決めておくにこしたことはないだろうという考えだ。

「っ！！」

ナギと同じ考えをしている人がいた。泉である。

特に彼女は、メンバーの二人が気まぐれで余計なことをしでかしてくれることをよく知っているので、ナギ以上に横取りに警戒している。何も横取りに限った話ではないが。

「ふむふむ……」

二人のやる気（どちらかというと裏のほうの）を捉えた美紀がなにやらおいしい話題をかぎつけたようだ。二人の行動の理由を順をたどって原点へとさかのぼっていく。

そこから得られた答えに納得したように、美紀はさっきまでの重苦しい身振りなど嘘だったかのようにノリノリで立ち上がった。

それにつられて、理沙も自体はわかっていないようだったがとりあえずのってきた。

「さあ、いったい何で勝負する気かな、三千院君。モン、ポケンなんでもOKだぞ？」

「ふ、何回 ボタンをつぶしたかわからないほどやりこんだ私たちに勝てるかな」

理沙、美紀は例のゲーム機を構えてナギを誘ってきた。彼女たちからは、ゲーム機を持っているとなぜかしつくりくるほどのやりこんでますオーラが出まくっている。もちろん、それはナギにもいえることだが。

しかし、ナギは別の案を思いついたようで、余裕顔でその案を否定して見せた。

なんでもお互い、やりこんでいる同士でやっても醜い戦いがあるだけで、素人が明らかに不利で、そんなアンフェアな戦いでは満足できないのだそう。事実、参加するであろう、ハヤテ、マリアは苦戦を強いられることが予想できる。ただ、二人とも適応力が高いので問題ないかもしれないが。

そんなわけでナギが提示した案は、あまりにもハヤテにはつらいものだった。もっとも、実力差はほぼないに等しい公平なゲームではある。

その名も・・・

「落ちるまで 口説いてみよう ハヤテ編」

この場にいなかったハヤテにこれが伝えられたのは、キッチンでひっそりと心を癒すように料理をしていたところを無理やりつれてこられたときだった。

42話（後書き）

名前が5 - 7 - 5調になっているのは偶然ではありません（笑
実はこういう話を書くのは得意ではないのに、なぜか無駄に引つ張
ってしまうのはなぜなのでしょう。疑問です。

ちなみに、期間限定公開としていたハヤテのなくことには42話投
稿時点で公開終了とさせていただきます。

何かご意見等がありましたら、感想欄かメッセージからどうぞ。

43話

「っ・・・なんなんですかっ、その破廉恥なルールはっ」

あえてマリアさんの本音じゃないから恥ずかしくない台詞から入ってみました。

ということで、マリアさん驚きのルールを持つ、ハヤテ落としゲームが始まったのでした。

「それではルールを説明しよう」

いつの間にか実権を握っている美紀が、また無駄に知恵を搾り出し

て立派なルールを作ってくれた。この頑張りを勉強にまわせたらなんて、言う側の口が疲れるほど言っているので誰も口にしない。

いつの間にかセツトというのがデフォルトと化している各種装備品を手に、美紀がルール説明を始めた。

そのまま書くとかわりにくくなってしまいそうなので（やたらとわかりにくく言ってくれている）、わかりやすくまとめてみた。

・ルールは簡単、ハヤテを落とす（ここで言う落とすは、気絶の類ではなく、恋愛やそれに準じるような感情にさせることである）こと。

・方法は問わない。ただし、年齢にスラッシュが入るような行為は×。ぎりぎりを狙うもよし。正規路線で行くもよし。

・じゃんけんで順番を決める。一巡回ったときに、誰か一人だけ落としたらその人の勝ち。複数落としたら勝ち残りでもう一巡。誰も落とせなかった、もしくは全員が落とした場合はもう一巡。

・女として今までの人生で培ったものをすべて使うべし。手加減をして勝てる相手^{ハヤテ}ではない。

その他にも、

「現在の競争弱者脱落型社会で生き残っていくには、女とても人間としても日々逆境に立ち向かい、困難を打ち負かす力をつけなければならぬ。そのためにはたとえどんな手段でも使う決断力や、冷静な判断力など……。世の中には例1のような突っ込みどころ満載の話もある。しかし甘やかされてはいけない。たとえどんな満たされた環境でも……。」

あまりにも長いので省略したが、そんな感じの話もあった。

まあ、関係ないので飛ばしますが。

「ということで、早速いつてみよう」

掛け声とともに、散り散りになっていた参加メンバーが集まってきた。ちなみに中心にはいずに縛り付けられたハヤテがいる。逃げ出さないように特殊強化型の縄で縛り付けられたのだ。

「ちょっと！いったいなんだっていうんですかー」

こんなことをされる心当たりがないハヤテは、必死にもがいてみる
がまったく体が動かない。

（これはっ！ただの縄かと思っていたら何か特殊なものが織り込んである・・・これは厄介だ。力でちぎろうかと思っていたがそれは無理そうか・・・）

つい情景反射でそんなことを思ってしまうが別に命の危機に瀕しているわけではない。あくまで癖だ。

ハヤテが勝手に命の危機に瀕している状況を仮定して必死に脱出手段を考えているうちに、ゲームは始まった。

「せーの！最初は！」

「グー！」（泉）（マリア）

「チョキ！」（理沙）（美希）

「パー！」（ナギ）

なぜかはもるはずの最初の一言であいこになった。

「さっ！先読みしすぎたー！」

美希と理沙のチョキはいわずもがな、あれである。

読み間違えは、いい子にグーを出す人がいることである。まあ、ずるしようと思えるからいけないんだけどね。

じゃんけんで勝った人から順番を決めていくということに今なったので、最終的に勝ったナギから決めていって、最終的に次のようになっ

美希 泉 理沙 ナギ マリア

ナギが最後ではないのは、ナギいわく「最後は最後でねたが出尽くして不利だからなのだ」だそうだ。もちろん、最初なんて恥ずかしくなくてやっ

実際、このゲームは順番というのが勝利に大きくかわる要素ではある。ハヤテという”人”が対象なので、気持ちというものがかわってくる。おそらく、はじめのほうは慣れないので恥ずかしが

て落ちる可能性が大きいだろうが、みんなに見られるというダメージが自分に重くのしかかってくる。自分が倒れるようでは勝負に勝てるはずがない。

「それじゃあ、いつちよ始めますか！」

複雑に絡み合った（！？）乙女たちの戦いは始まった。

例 1

振り込め詐欺撲滅のために戦う謎のヒーロー軍団がいる。東京都・葛飾警察署に所属する「防犯戦隊フリコマン」だ。構成員は、コスプレが趣味の巡査「本田あやめ」、特技は「口座凍結」という隊長「フリコマン」など5人いるらしい。

同署のサイトによると、防犯戦隊は防犯啓発イベントなどに登場するキャラクター。昨年11月結成し、「笑いをとる」「犯罪者と闘わずに勝利する」などを理念に掲げ、年中無休で働いている。

フリコマンは、額部分に「ふ」と書かれたマスクをかぶり、金色のマントにグレーのスーツを合わせたちぐはぐな格好をしている。長所は「ポーカーフエース」、特技技は「口座凍結」だ。

本田あやめ巡査は緑色の瞳でネクタイを締め、制服を着ている。「大阪府出身で22歳くらい、身長は160センチメートルくらい」というアバウトな設定で、ライバルは「もちろん両津さん」だ。2次元キャラだったが「隊長にスカウトされ、無理やり3次元の世界に引っ張り出された」という経緯があるらしい。

同署のサイトによると、防犯戦隊には2人のほかに「ゼネラル・スタッフ」や「チーフ」「プロデューサー」がいるが、詳細は不明。結成当初は、女性隊員「手渡さなイーヌ」がいたが、一時帰休中という。謎は深まるばかりだ……。

44話

「ハヤタ君・・・どう・・・かな・・・？／／／」

スク水を着た美希がそこにいた。小中学生のプールの授業のときに着るあれだ。ご丁寧に名前を書いた布まで刺繍してある。しかし、今のハヤテにそれはどこから持ってきたのかとか、何のために持っていたのかとかそんなことを突っ込んでいる余裕はない。

「っ！どっ、どっつて！？」

ハヤテに効果抜群だ。動揺しまくっている。50のダメージ。しかしまだ決定打ではない。ハヤテはこの程度の攻撃で落ちるほどやわなやつではない。

「どっつて、決まっているじゃないか・・・　かわいい・・・
？／／／」

ごぶっつっ！

ハヤテから血が飛び散った。心の血だ。まるで巨人に殴られたかのようにぼろぼろの姿でその場に倒れ伏した。

「んー、はや太君にはまだちょっと刺激が強すぎたかな」

美希としては限界ぎりぎりまで攻めたつもりだったのだが、少しやりすぎてしまったようだった。倒すことが目的ではない。落とすことが目的なのだ。

「と、とにかく・・・」

ハヤテがひょこっとおきてきた。見た目よりもダメージは少なかつたらしい。そして早く服を着てくださいとそこら辺にあったジャケツトを持ってきた。

と、ここで美希は新たな策を思いついた。

(っ！背中が悪寒が・・・)

その瞬間、一瞬だけだがハヤテは何かを感じた。いやなことが起こるときの前触れのようなものを。しかも、前例がないほどのいやなものを感じた。その感じを裏付けるように、美希が若干の笑みを浮かべて近寄ってきた。

しかも、ただ近寄ってきたのではない。一挙一動に”色気”を感じさせる動きだ。その仕草にハヤテが動けなくなっている間に、美希はハヤテにほぼ密着するくらいの距離まで擦り寄ってきた。

そして、ハヤテの胸に顔をうずくめて言った。

「さあ、着させてくれるんだろう・・・？それとも・・・脱がせたい？」

そういつて水着をすこしはだけさせた。

ごふっつ

とは今回は行かなかった。美希がさらに頬に手を回してきたのだ。二人の顔は少し動けば触れるほど近くにある。その仕草はまるで大切なを愛でるようで……

「ちよっ！！！！それ以上はダメー！」

ここで選手控え室から顔を真っ赤にしたナギが調停に来了。言うまでもなくこれ以上のことをハヤテにされるのは許せないからだ。それにこれ以上は年齢制限がかかってしまいそうな雰囲気さえあった。ここでとめなくては作品が変わってしまう。

「ちえっ、全年対象じゃあここまでか……」

なにか確信めいたことをつぶやいて美希は惜しげもなく選手控え室へと戻っていった。

ということ、これで美希のターンは終了だ。

「いったいこれはなんなんだ……」

ハヤテはまだ汗だくでひとりですつとそうつぶやいていた。

「さて、美希選手はいつたいどのように難攻不落のハヤテ氏を攻略するのでしょうか」

「ファーストアタックなので、まずはどういったところが弱いのかをじっくり分析してくると思いますねー」

理沙とマリアさんによる司会が別室の選手控え室で行われていた。理沙はこういうことをして遊んでいたいと暇で死にそうになるのでやっているのだが、マリアはちよつとでも大人なところを見せるため見栄を張って参加してみた。後悔はしていない。

「ハヤテ君は意外とほかの男の子より幸せな目にあっているのですね。ういうことに耐性はあるそうですねー」

考えてみれば自分もハヤテにいろいろと恥ずかしい思い出があるマリアだった。

「おっと、美希選手が入場するようです」

ハヤテがいる部屋の扉が開いた。

「・・・・・・・・」

絶句だった。スク水姿の美希が出てきたのだから無理はない。マリアはもう少し子供のやることかと思っただけに、レベルの高さに驚きを隠せない。

一方の理沙はというと、なるほど、そうきたかといった感じでうなずいていた。最初は少し驚いた様子だったがすぐにその手方を理解したようだった。

「だいぶ一点集中型の攻撃で着ましたね、マリア選手」

「えっ、ええ」

絶句していたマリアは、理沙の大人の冷静さに驚いた。そして見栄を張って参加してみたはいいが、実力の差を自覚させられただけな気がしてきた。
っていうか、スク水ってじゃっかんアウトじゃないだろうかという気がしてきた。

「おっと、美希選手ハヤテ氏に何か話しかけてますね」

んー、ここで少し大人のたしなみを披露しないと・・・
”ハヤタ君・・・どう・・・かな・・・？／／／”

「プハーーーーーっっっ」

マリアの口からお茶のようなものが飛び出した。正確に言うとお茶95%残りマリアさんのだ。

（どどどどどっ・・・どっつてええ？そんな発言ゆるませええん！）

動揺しまくりだ。画面に映っているハヤテよりもひどいかもしれない。今までこういうシーンを見たことがないことも影響しているかもしれない。そもそも、友達が少なかったマリアなのでこういう話もしたことがないのだ。

（そりゃいくらそういう勝負だからって・・・だからってっ！）

”どうって、決まっているじゃないか・・・　　かわいい・・・
? / / / ”

「プハーハーハーっつっ」

お茶なんか飲まなきゃいいのに、マリアさん。しかしそこはメイド。目に見えぬ速さで後片付けを済ませる。そしてまた考える。

（かかか、かわいいとかそういうこと聞くの反則じゃないんですか！？）

ハヤテもマリアと同様にかなり動揺しているように見えた。という
かお茶の代わりに赤いものが飛び散ったように見えた。

「これはハヤテ選手大ダメージですねー」

理沙はというとこれまた冷静だった。この展開は予想できたとしても
言いたそうな顔だった。それどころかいよいよぞもつとやれとテ
レパシーを送っているようにさえ見える。

（最近の子供はこれだから悪い事件に巻き込まれたり・・・）

そんなこと思っているが実は悔しいだけだったりしなくもない。

”さあ、着させてくれるんだろう・・・？それとも・・・脱がせたい？”

.....

もはや絶句。というか、いったいどうしてこんな言葉が思いつくのかその発想が理解できない。マリアにはもっとこう、かわいらしいことしか思いつかない。

「なんであんなこと言えるんですかね」

「ああ、美希選手はエーゲーもやりますからねー。きっとそのまねでもしているんでしょう」

何ですとー!?

マリアとナギの叫びが同時に響いたという。

44話（後書き）

挿絵を描いてくださった心優しい方が現れました！

http://photos.yahoo.co.jp/ph/w
inpc1125/vwp?.dir=/98bc&.d
nm=3bd.jpg&.src=ph&.v
iew=t&.hires=t

ぜひ見て下さいね！

なんと300000HIT!感謝の読みきり小説(前書き)

この小説は、はやてのごとく!とは一切関係ありません。

尺者による完全オリジナル小説になります。初めてのオリジナルなので温かく見守ってください。できれば感想、評価もいただけると感激です。

なんと300000HIT！感謝の読みきり小説

チュンチュンチュン……

鳥のさえずりを聞いて少年は眠りから覚めた。窓からは心地よい日差しが出迎えてくれている。今日も良い日になりそうだ。

「はあゝあ」

盛大にあくびをしながらも、すばやく寝巻きから学校の制服に着替える。その手つきは男の子というよりは几帳面な女の子のような感じだ。決して服を脱ぎっぱなしにしたりしわくちゃにしたりはしない。よく本に載っているようなその服に合ったたたみ方をしてる。これを見ただけで家事が得意なのがわかる。

着替えが終わると、今度は弁当の準備を始めた。フライパンを暖めて卵を焼いたり、お肉を焼いたり野菜をきつたり。これまた手馴れた手つきだった。

そんなことをしながら、洗濯物やらいろいろと支度もしていると、ビビビ―と威勢良く呼び鈴が鳴った。

「誰だ？こんな朝早くに」

そんなことをつぶやきつつ、呼び鈴を押した人を確認すべく、玄関ドアを少しだけあける。ちなみに、ドアフォンとかそういう類の便利なものとは少年家には装備されていない。

覗き込むように数センチだけドアを開けてみると、少年の視界の中に人のものらしい”目”があつた。どうやらドアの近くから向こうもこちらをのぞいているらしい。

「何しにきたんだよ、さく」

さくと呼ばれた少女は、名前を呼ばれて無表情な顔を少しだけ緩ませるとステップでドアから少し離れて言った。

「今日は一緒に学校に行きたいなと思っただけ」

普段から気分屋な彼女の性格はよくわかっているつもりの少年・・・前原優一はまた何か企んでいるのかとでも言いたげな表情をして、でも何も言わずにちよつと待っててと言つて家の中へと走つていった。

優一とさく・・・泉咲実が学校へ行くには必ず通らなくてはならない坂を歩いている。いつもは二人ともべつべつに登校するのだが、今日は咲実と一緒にいきたい気分だったらしく、そういうことになった。

二人は同じ自宅近くの公立高校の1年生のクラスメート。ついでに最近の席替えで隣の席になった。中はなかなか良いほうだと思う。よく勘違いかれるがべつに咲実とは付き合っていない。いや本当。

「なんで今日はわざわざうちに来たんだー？いつもは面倒くさがりなのに」

さくは本当に面倒だと思うことは徹底的に人に任せるようなタイプ

だ。なぜか普段そばにすることが多い俺が任される役に回るわけで。そんなやつがわざわざうちに来るなんて、きつと何かあるに違いない。さくの家から学校まで行くのにうちによるのは割と遠回りだし。

「あら、ちよつと朝の優の顔が見たかっただけよ」

うそっぽい。強烈にうそっぽい。顔が笑ってるし。普段何があるうと無表情なさくだけど、長く一緒にいるせいかな、さくの微妙な表情の変化が読めるようになった。多分ほかの人たちじゃあこの変化には気づけないような微妙なものだけだ。

「何か言いたいことがあるんだったら素直に言ってくれたほうが嬉しいんだけど」

だいたい小さい子供がするように、何かをしてほしい時に何かいいことをしてあげるといのがさくには多いパターンだ。わかっているなら面倒なことから逃げられそうなものだけど、なぜか彼女の強い気のようなものに縛り付けられて逃げられないことが多い。ついでに何かをしてもらってそのまま逃げるといのもどうかというプライドの問題も少々。

そんなこんなでなんかさつきから逃げたら殺すわよ的なオーラを放たれていて逃げられない俺だったのだ。

「あら優って優しいのね。実は明日までの古文のレポートがあるの。さすがに当日じゃ厳しいだろうから今のうちに渡しておこうと思つて。はい」

ほんと手の上にレポート用紙と問題の紙が置かれた。これをやっつけてか。ちなみにさくは文系コース、俺は理系コースだから必ずしも同じ宿題が出るとも限らない。これは文系側にだけ出たものだ。

でなければいくらさくでも写させてというだけでやってこいとまでは言わない。

あ、そんなこと考えてたらいつの間にか横にいたのにはるか先で手を振ってる。

「がんばってー」

そんな声が聞こえてくる。はいはい、わかりましたよ。

大体の方には俺とさくの関係がわかっていただけただろうか。あの子が俺に付きまとうのは大体はああやって楽しむためだ。まあ、たまに変なこともしてくるけど・・・それは多分このあと書くことでわかってくれると思う。

普段無表情なさくは、やっぱりというかなんと言うか友達を積極的に作るタイプじゃあない。けど顔がいいせいか、寄ってくる人は男女を問わず結構いる。それでもなぜかさくはあまりほかの人と関わろうとはしていないように見える。昔そのことについてさくに聞いてみたけど、話するのは面倒だけど、無視しても面倒なことになるから適当にやってるのよとか言ってた。実際のところ、彼女が何を考えているのか俺は良くわかってるわけじゃない。

ただ、ひとつだけいえることは、彼女はもてるということだ。今まで何人の男に告白されたかわかったものではないらしい。らしいというのは、直接本人から聞いた話じゃなくて、俺の男友達から聞いた話だからだ。この学校ではさくは難攻不落のかぐや姫扱いされているみたいだ。

たしかに、俺は今までさくがほかの男と仲良く話しているところを見たことがない。確か最後に男と話しているところを見たのは先月部活のことについて先輩が何か伝えに来た時くらいだ。そんな性格だけど、割と俺には心を開いてくれていることは俺もわかっていて、よく勉強を教えたり、面倒ごとにつき合わされるといいういような条件だが二人でどつかに出かけることも多い。こんなことしてるから他所から付き合っているだろとか言われたりしてるんだけど。別にそんなんじゃないんだけどね。

実は今日も渡された古典の宿題でどうしてもわからないところがあったから俺の家でちよつと教えてもらうことになっている。それくらいやらせればいいと言われるけど、俺としてもわからない問題があるって言うのがなんとなく気持ち悪いから解けるようにしておきたいし。全教科勉強できるに越したことはないわけだ。って言うわけで時間は放課後、我が家に移る。

「おじゃましまーす」

いつもの学校での振る舞いのようにすました感じでさくがやってきた。一応俺も玄関に出迎えに行く。何回もうちには来ているけど、部屋の中からどうぞ〜とかいうただだとあとで怒られるから最近はこちらした習慣になっている。

それよりも、最近夏服に模様替えしたときから夏特有のスカートの短さが気になってしょうがない。靴脱ぐ時とか後ろ確実にアウトだと思っただけ。その、なんていうかもとと素質があつて足とか長くてきれいだしなんか目のやり場に困るというか。いかんいかん。

変なこと考えているとさくに見破られる。

ちよつとこのままだと流れが良くないからさくには先に俺の部屋に行ってもらっておいて飲み物でも出しにいく。このワンクッションはあるかないかでだいぶ後が違ふもんで。適当に冷蔵庫にあるスポーツドリンクとイチゴ牛乳をコップに入れてリビングに持っていく。ちなみにイチゴ牛乳はさくが来た時にないと機嫌が悪くなるから常にストックしてある。

「はいよーつつつつとっ！」

部屋に着いた俺は俊足と呼べるスピードで手に持っているコップをテーブルに置き、さくの下のおられる足部を全力で引っ張る。なぜかって？俺のベットの下にもぐりこんでいるからだよ！

「ちよつとー、何すんのよー。えっち」

何すんのよってそれはこっちの台詞だつてーのっ！なんでそんなところにもぐりここまれたら何かいやでしょ！普通。てかえっちつて・・・っつ

俺は自分がしでかした失態に気がついた。女子高生（制服「スカート」）がベットのしたのもぐりこんでいる。足を引っ張って引きずり出す。あるものがあらわになる・・・・・・

いや！　だから恥ずかしいから！

っていうか、完全にこのあとこき使われる動機になった。やっちまった。っていうかあつちもなんか妙に演技っぽく顔を赤くしたり恥ずかしそうな顔してるんじゃないよ！こっちまでなんかそういう気分になるじゃないか！

「見た・・・の？」

つ　いやいやいや　ととつさに否定してみたものの、むしろ肯定の意味に取られていることはその場に自分にもわかつている。けど、仕方ないじゃない。この場合冷静な判断なんて無理だって。っていうか、なんかさくの顔が面白いものを見つけたように感じになっっているんだけど。今はつつこめないけど。

これはまずい。とりあえず話題転換だ。っていうかこつちから攻めよう。とりあえずそんなところにもぐってるからいけないんだとか言ってみる。

「だって、エッチな本が隠してあるかと思って。なんでないのよ」

なんでって、そんなものありません！だいたいなんでそんなものを他の男の人は読むのか俺にはさっぱりわからないんだから！てか、大体なんでさくはうちにくるたびにその手のものを探がすんだよ。ないものはないの。

さ、そんなことよりさっさと勉強終わらせるよと俺が言うと、さくはここならあると思ったのにか、見たのは高くつくとかぶつぶついいながら俺の向かいの位置のテーブルに座った。

「で、ここなんだけど・・・」

すこしさくのことを意識してしまうけど、なるべく目をあわさないようにして対処する。ちなみに、さくは成績は優秀だ。むしろ俺より優秀だ。成績もあつちのほうが高いし、テストも点数じゃ勝ったことはない。いつも校内ベスト10に入っているほどのだ。べつに俺も悪いほうではないと思っているけど、どうしてもさくにだけは勝てていない。

なのになんでこんなことしているのかは俺にもわからないけど。そういうわけで、わからないところを指すと、ああそれはこういうことで　とか言っであつという間において俺を感嘆させる。そん

なに簡単に解けるなら本当に自分でやればいいのにと俺も少し思った。

「ゆうもまだまだね。もっと修行しなさい」

偉そうにそんなこと言うてくる。向こうに言わせればこの宿題の山も修行だってか。まあ俺はそれを有効に使わせてもらっているからいいけど。なんでもこうは課題をやらないのにあんなに成績とテストがいいのか今の僕には理解できない。こっちが勉強してるといつも無駄なメール送ってくるし。本当に向こうは勉強しているんだろうか。

てか、偉そうにするのは許すからそうやって寝転んでスカートをはひらさせるのはやめてくれ。集中できないから。てか見えてるから。はずかしいから！

「うふふ、ゆうもまだまだお子ちゃまね」

……うるさーいっ

そんな感じで若干の妨害も入りながらも、それなりのペースでわからないところをこないしていった。ちなみに、今日は学校が午前授業のため時間はかなりたっぷりとある。すべての問題を終えた時、時計はまだ二時半を指していた。

「あゝあ、疲れた」

俺はその場に寝転んで大きくあくびをした。外は6月なのにしばらく拝めなかったお天道様が気持ちよい光を窓の外から注いでくれている。それを一緒に感じているのか鳥のさえずりまで聞こえてくる。うん、気持ち良いよね。つついっついそんな届くはずもない言葉を送ってみてしまう。

「ああ、いい気持ち」

て今はさくが……い……。別に寝たりしないから大丈夫。だって

「はっ！」

何かあった気がして俺は突然眠りから目を覚ました。もしかして寝過ぎたかと思って時計を見てみると2時45分。まだあれから15分しか経っていない。

「なんだ、まだ寝れるか……」

またうとうとしてきた。しかしそれは腹部に感じた違和感とさくが家に来ていたという事実を思い出すことによって火星あたりまで吹っ飛んでいった。

まださくのことを理解していない人がいるかもしれないから簡潔に彼女を表現すると、いたずら好きなのだ。いままでもさくの無駄な発想力のおかげでひどい目にあってきたのだ。さくの目の前で眠って無防備になるなんて自殺行為に近い。そして今腹部に感じるこの違和感。だんだんと眠気が覚めてくるにしたがって感覚がさえてきて違和感の正体が掴めてくる。この重量感。この弾力性。間違いない。

「あら、まだ眠るの？じゃあもう一回ゆうの上で眠ろうかしら」

またってさっきまで寝てたのか。俺の上で寝てたのか。まさか俺のYシャツのしみはさくのあれだったりしないよな。やめてくれよそういうの。

っていうか重いっす。いくらそういうのを気にする女の子とはいえ、健康な体を維持するためにはやはりそれなりの筋肉、骨、体脂肪が必要なのだ。適正体重付近の重さは決しておなかに乗っかられて平気なほど軽くはない。

でも、それをそのまま口にしたら確実にさくにつぶされる。もしくはたたかれる。これは経験上確定だ。俺も人間だからそれくらいのこととは学習した。それではどうしようか。とりあえず重いからおなかの上からどいてもらおう。とりあえず体を起こして……

「あれっ!？」

自分が置かれている状況に思わず声を上げてしまった。でも許してほしい。だってなんか体をロープで縛り付けてあつて動けないんだから。おかげで起こした体を支えられなくて床に頭を打ち付けたよ。結構痛い。っていうかさくは・・・またこんなことを・・・

「今すぐこれをほどこなさいっ!」

ロープに縛られた状態で勝ち誇った表情で突っ立っているさくに言っても惨めな感じしかなかったが、とりあえず必死で訴えてみる。

「あら、どの口でそんな偉そうなことを言っているのかしら」

いつもの無表情には変わりが無いが、俺にだけわかる程度のわずかさだけど、悪魔の微笑を浮かべているのがわかった。楽しんでやがるなこの野郎。てかさんなにふんぞり返らないでくれ。下からだとか丸見えなんだって。気づいてるだろそれくらい。しかも体を動かせないから視界を思うように動かせないんだって。こっちが恥ずかしいから、本当。

そんな俺の思いが通じたのか、丸見えの今のポジションから動いてくれた。とりあえずほっと一息。

「あら、好戦敵なのは口だけじゃないみたいね」

いきなりさくがまた腹の上に乗ってきた。そんなに勢いよく乗ったら・・・うえっ・・・けっこうきついんですけど。俺がおなかの圧力に必死に耐えていると、今度は男の敏感な部分を手でさするように確かめてきた。いや、好戦的ってそれは違うんですよ!さっきはで

寝てたのとそうやって乗っかってくるから反射でそうなるんです！

「ふん？」

あー、やめて！そんな人間の力スを見るような目で見ないで！って
いうか、そうやってで触らないでくれ！その何か、手でなめ取る
ような感じ背筋にいやな感じが走るから！なんかこう、ぞくつとす
るから！

この耐え難い羞恥心のおかげか、突然体に力がみなぎってきた。き
つと前代未聞の事態に体のリミッターが外れてくれたのだらう。想
像もできないくらい位の力で身体の自由を奪っていたロープをちぎ
る。

「おわつと！」

俺の腹の上にいたさくはその拍子に転げ落ちたけど大して痛そうな
素振りをしていないので気にしないでおく。ロープを完全に取った
俺はまず作と一定の距離を作って息を整える。限界を超えた力を使
ったせいなのか、かなり息があがっている。

「はあはあいつちゃって、本当はもっとやってほしかったくせに」

違う！それは断じて違う！この心拍数の高鳴りはそうじゃないと俺
は信じているんだ！

「元気になったからぺろぺろしてあげようと思ったのに。つまんな
いのっ」

「……いい加減にしなさいっ！っ！」

その後、やーとか言いながら部屋の中を逃げるさくをわりと必死に追い掛け回したりしていたら、いつのまにかもうすぐ夕暮れ時というところまで時が過ぎていた。無駄に広い我が家の構造を知り尽くしているさくはこの住人である俺の手にかかってもなかなか捕まえることができなかった。まあ、はじめこそ怒り心頭といった感じで追い回していたのだが、後半は遊び半分、というかなんで追いかけているのか忘れていた。だからさくが

「トランプで決着をつけましょう」

とかいって勝ち逃げしていても悔しいとしか感じなかった。ようするにあれた、俺は馬鹿なんだ。そんな感じでまたいつもどおりになつて、さくを家まで送ることになった。

さくの家は意外と、といって言いのかわらないけど、門限とか、お小遣いとか、身なりとかそういうのはすごく親にしつこく言われているようだ。しかも、玄関でしかあったことはないけど結構怖い。

なのに何でああいう風に育ったのかはわからないけど、人前では教育の成果がおしとやかな女の子になっている。

そういう訳で、部活がない日は日が暮れるくらいまでには家に着かないといけないので今日も夕空を眺めながら我が家からさくの家まで歩いている。

「走り回って疲れたわ。ゆう、おんぶ」

馬鹿なこと言っていないでさっさと歩きなさい。ちえっとか言いながらまたさくは歩き出した。この年になつておんぶとかやってられないんでね。そこは我慢してもらおう。

空を見上げると、沈みかけの太陽が消えかけている自分を一生懸命に見せようとしているかのように赤い光を放ち、雲が幻想的な感じにその色に染まっていた。俺は別に芸術とか美術とか好きじゃない

けど、こういう風景を眺めているのは結構好きだ。時間を忘れて心をリラックスさせられる。

しばらく無言で上を見上げながら歩いていたが、右手に冷たいものを感じた。さくの手だ。さくは冷え性の体質を持っているので手は夏でもひんやりとしている。つくづく、損な体質だなと思う。

なんとなくそれがかわいそうだったから、手を握り返してあげた。手をあつためてあげよう。結構俺はあつたかいんだ。毎日健康食を食べてるおかげで血流が最高なんですね。

俺が握り返すと、ぎゅっと少し手に伝わってくる力が強くなった気がした。まあ、その辺のことは今は気にしない。だって空がきれいなんだから。

「じゃあね、ゆう。また明日」

さくの家の前までついた。さくはちよつとだけ顔を赤くして手を振って家へ入っていった。きっと俺のあつたかい手のおかげで血流が良くなったんだな。うん、いいことだ。まあ、赤くなったと言っても無表情なさくだから本当に少しだから夕陽に照らされてただけかもしれないけど、まあどつちでもいいや。

さて、やることはやったから家に帰って勉強でもするかな。

少しさくの家を見てから俺の家までの、さっき二人で歩いてきた道をまた戻っていった。

「ふう、疲れたー」

ご飯を作って、干していた洗濯物やらその他も色々こなすともう夜真っ盛りの時間になる。テレビなんか見ていられない。さっさと勉強を始める。

たまに疲れて勉強しないで寝ることもなくはないけど、そうしてるからさくに勝てないのかと思うと勉強せずに入らなくなる。なぜなんだろうね。クラスの男達には負けたことないのに。

そうして勉強が終わって、俺はベットに転がるようにもぐりこむ。今日も一日疲れた。

正直な話、こんな生活していて嫌にならないのかと友達に言われたことがある。まあ、客観的に見ると確かにそう思わなくもないかもしれない。けど、どうしても、前の自分よりも今の自分は幸せだと思う。

いつだって暇をせずに自分にかまってくれる人がいる。それが何よりも幸せなことだと思うんだ。だからなのか、今の自分を不幸だとか、嫌だとかは思ったことはないね。まあ、疲れることは確かだけど。

「さて、もう寝るかな」

明日もきつとさくがまた何かしてくるだろう。きつと振り回されるだろう。けど、そう思っても俺は嫌になったりしない。次は見返してやろうとか、もう引っこかったりしないようにいろいろ頭を使えるしね。

また明日も・・・楽しいだろうからさ・・・

お休み・・・

...<u>

45話

「それじゃあ、さっそく次行こうか」

さっそく疲労困憊の様子 of ハヤテやマリアさんをおいて、いつもの調子でたんと司会を進めていく理沙。彼女の精神力の強靱さはいうまでもない。多少のお色気は視界にも入らない。

むしろ、自分の番が回ってくるのを楽しみにしているようにも見える理沙は、部屋の端っこで出たくないよーとピーピー泣いている泉を容赦なくハヤテのいる部屋へ投げ込んだ。

（どどどどうしよう・・・ハヤ太君に・・・ええええつちなことを・・・）

何もそこまでしろと入っていないのに勝手に色々妄想が広がっていく泉。まあ、先ほどの美希があまりにも過激だったから致し方ないかもしれない。

「えっと、瀬川さん・・・？まずはこの縄をほどいてくれませんか？」

なんだかドアのそばでそわそわしているの、さっきから闘争という手段を奪っているこの縄をほどいてもらう。しかし、今の泉には何を言っても通じなかった。

（ハヤ太君が縄に縛られて・・・ハワワワア）

いや、彼女に非はないです。はい。そういうかわいそうな性格なんです。

（い、いかん。何もしていないのにまるで僕が犯罪者みたいだ・・・
・・・何とかしなくては！）

本当に何もしていないのに被害にあっているハヤテ君。本当にかわいそうとしか言いようがないがそれは持病不幸の不幸や労なので仕方がないのかもしれない。

（と、とりあえず瀬川さんを落ち着かせないとまた警察の方にお世話になりそうだ・・・どうしてもかな・・・）

部屋の隅でまた何か新しい妄想を始めた泉が先ほどよりも激しくピーピー言っている。よそ（控え室の人たち）からみたらまさしく変態的な世界となっていることだろう。

「なあ、マリア。あの二人は何をやっているんだ？」

その控え室で、皆でゆっくりとお茶を読みながら42型液晶テレビに移っている様子をまったり眺めている。

その目線は昼間のグルメ番組を見ようなどでもよさそうなものでもあり、お笑い番組をみるときの哀れむような目線でもある。

ようするにどうでもいいけど哀れな二人を眺めているわけだが、どうもさつきから様子がおかしい。泉ははしっこでなんか騒いでるだけだし、ハヤテは顔に焦りが見えてきた。まったく持ってこの部屋に居るメンバーには理解不能な状態だった。

「たぶん、変なんだろ、あの二人」

「あつ、そうか」

「そついえばそうでしたね」

そんな感じの受け取り方だった。

一方で・・・

「瀬川さん！」

意を決したハヤテ君はやや強い口調で泉に声をかける。それに驚く形で泉も少し静かになった。

その声を聞いていた控え室でもモニターに注目が集まった。

「・・・抱いてもいいですか！」（落ち着かせようとしてたどり着いた答え

続く！

45話（後書き）

めずらしく長期にわたって伏線を回収していないマニアです。
さて、だれかこれに気づいている人はいるのでしょうか……

46話

「ブー！！」 お茶を吹く音

（は、ハヤテのやつこの私を差し置いてなんてことを！）

（だ、大胆ですわ！）

控え室はお茶まみれになったそうだ。一方泉は……

「ほえ？／＼／」

あまりのできごとに固まっていた。具体的に表現すると脳細胞がぐつぐつとまだ沸騰している状態のラーメンに付けられた感じだ。わかりにくい表現だっけ？それは言わない約束だぜベイバー。しかしその状態は長くは続かず、すぐに思考回路が復活してきた。

（そそそ、それって……ぷぷぷプロポーズ？……）

ぽつと何かが飛ぶ音がした。そんな音なるわけないわけだが、きくと見ている人が勝手に想像して付けているんだと思う。そして顔がヒートアップしてきて、その熱で思考回路がやられて動けなくなってしまった。たんぱく質は70度くらいまで上がるともう二度と元通りに戻らないらしいが大丈夫だろうか。

（よしっ！どうにか落ち着いてもらえたぞ）

見た目は動かなくなって落ち着いたように見えなくもないが、ハヤテは攻撃は最大の防御作戦で泉をねじ伏せた。さすが最強レベルの

執事だ。本人がそれを自覚していないことを省けばだが。

しかしながら、こんどはなかなか話しかけてもうんともすんとも言わなくなった泉にさすがのハヤテも違和感を覚え始めた。

もしかして、これ何かミスった？

泉はそのまま床に倒れ付したという。

「試合終了ー」

モニターで様子を見ていた理沙が終了をつげにやってきた。

「いや、まさか挑戦者がダウンするなんて予想外だったよ。さすがハヤ太君だ」

そっついながらそこら辺にいた執事に泉を控え室に連れ戻させた。以前、面倒なヒゲの事件で怪しいと思っていたが、これでほぼ確定したようだと思沙は思いながら、さっきからナギに罵倒されている

ハヤテに次は私の番だとつげにいった。

「全くもって何なんだ、これは」

息切れ気味のハヤテのこの疲労は精神的なものだろう。そんなハヤテの元へナギがやってきた。

「その調子だハヤテ。もうコクピットを避ける必要は無い、おもいつきり撃墜してやって早くこの無意味な戦争を終わらせるんだ」

そういうナギも息切れ気味のようだった。おそらく幾度となく繰り返された激しい戦闘に対してお茶を噴出しすぎたのだろう。

「しかし大佐、敵の思惑がはっきりしないうちは手の出しようがありません」

実際はハヤテはなにをしたらいいのかよくわかっていない。

「とにかく、殺らなきゃ殺られるぞ。割り切るんだ」

そんなことを言ってナギは去ってしまった。正直な話ハヤテは何を言われたのかわからなかったが、それはナギも自覚しているようで

その顔は苦虫を噛み潰したようだった。

そんな不毛な会話がされているうちに準備が整い理沙が入ってきた。

「殺らなきゃ殺られる・・・まずは相手をよく観察するんだ」

理沙は普段となんら変わらぬ制服姿である。髪型、表情ともにいつも通りだ。若干いつもの表情というのがなにか悪いことを考えているようなところがひっかるが。

「そんなにみつめられると胸がときめいてしまうな、ハヤ太君」

ハヤテの視線にびくともせず、理沙はどんどん近づいてくる。おもわずハヤテが下がりがりたくなるほどの威圧感だった。何気ない先程の台詞からもなにか嫌なものを感じる。

これは・・・殺られる・・・！

ハヤテの本能が警告してきた。しかし、それすらすでに手遅れだった。

「それじゃあ、いただきまーす」

刹那、理沙が近寄ってきて、そして

ブチューーーーー

という強烈な吸引音を長々と部屋に響かせた。

その一瞬の出来事に反応できたものは1人もおらず、皆ただただ呆然と立ち尽くすしかなかった。

そして、全てが終わった後には氣を失ったハヤテの亡骸があるだけだった。

46話（後書き）

長い間更新できずにいて申し訳ありません。
これからも更新のめどは立っています。

作者のやる気、時間的都合がつき次第更新ということになりそうです。
沢山のコメントありがとうございます。とても励みになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1685d/>

ハヤテのごとく！～初恋物語～

2010年10月9日12時14分発行